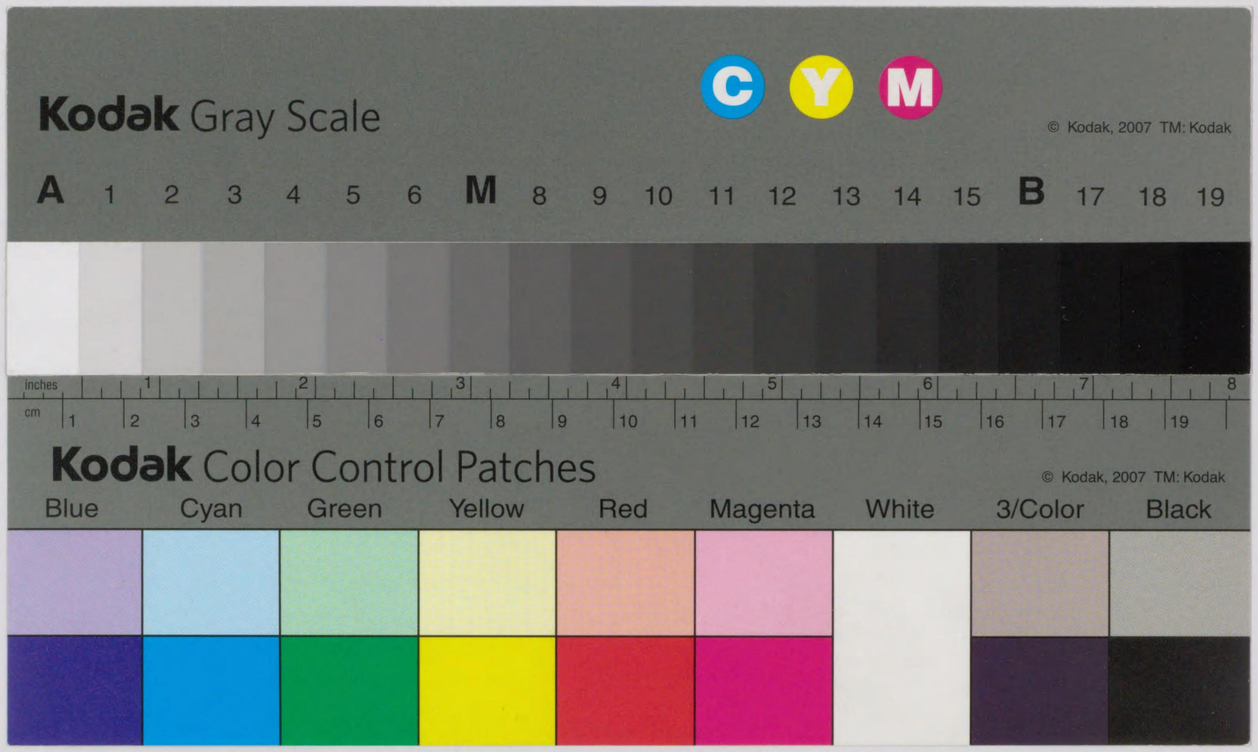


562
141
562-1141
12005015126695

長篇物語

お伽三十年記念
新海竹太郎作

362—114
562-114

口上

二十歳の昔から、六十四歳の今日まで、四十餘年間藝術に沒頭して來た私わ、その大半を少年文學の爲に盡しましたが、その大部分わ、博文館主大橋新太郎君の知遇の下に、編輯局の一員として、書物や雜誌に筆を執つて居りました。

日本昔噺二十四編、日本お伽噺二十四編、世界お伽噺百編、世界お伽文庫五十編、小波お伽百話、同新編お伽百話等わ、卽ち其間の產物であります。

此四十年の間にわ、明治三十三年から三十五年まで、獨逸伯林東洋語學院に聘せられて、日本語の敎授を擔任の傍ら、海外の童話、傳說等を研究して、其材料を蒐集して來ました。明治四十年頃にわ、文部省囑託を命ぜられ、國定敎科書の改訂編纂に、約二年間從事して居ましたが、其後同省の文藝委員、通俗敎育調査委員に擧げられ、現今わ臨時國語調査會委員として、國語國字の整理に當つて居ります。

口上

大正五年の六月にわ、畏くも淳宮殿下（今の秩父宮）の御誕辰に際し、特に青山の皇子御殿に召されまして、東宮殿下、高松宮殿下御同席の御前で、二回のお伽口演をお聽かせ申す光榮を得ました。

又大正十年わ、私が此事業を始めましてから、恰度三十年になりましたので、多數の知友によつて、お伽三十年祭なるものを催され、貴重な記念品を贈られました。

同じく十三年十月、同志の人達と謀りまして、デンマルクのアンデルゼンの爲に、五十年祭を擧行しましたら、此事が遙にデンマルク國王に傳えられ、翌年の春其功勞に酬いるべく、ダンネブロウ二等章を贈られるなど、過分の光榮に浴したのであります。

又この二十年以來わ、時々舌栗毛の名の下に、口演旅行を試みまして、國内わ申すに及ばず、臺灣、滿洲、朝鮮、進んでわ布哇の各島までも、殆ど廻り盡したのでありますが、此間何等蹉跌もなく來られましたのも、皆大方諸君の御

愛顧の致す所と、深く感謝致す他わありません。

然るところ、此度一身上の都合によりまして、博文館編輯局を離れることになりましたが、猶餘生を斯道に委ねまして、可憐なる小國民諸君の爲に、一層奮勵致し度いというのが、相變らず私の本意なのであります。付てわ過去四十年間の作品を、此際更に整理致しまして、別に新しい創作をも加え、一種の全集體として、遍く愛誦の用に供し度いと思います。實わ兩三年前、私わ獨力を以て之が發行を企てましたが、固より廣く行き渡つてわ居らず、只一部同好の士に讀まれたに過ぎません。今回吉田百邦氏の希望に依り、普及の目的を以て更に新らしきものを加え卷數を十五册とし、一般に及し度いとの希望を以て廉價版を發行する次第であります。何卒平生の御馴染甲斐に、私の微志を御諒察下さいまして、特別の御愛顧の下に、此の事業の成功致しますよう、くれ〴〵もお願申す次第であります。

昭和八年五月

巖谷小波

凡例

一　お伽小說とも云うべき長い物ばかりをあつめて、此編を長篇物語と名づける。

一　此中『新八犬傳』と『お伽太閤記』とわ、有名な八犬傳と太閤記に倣つて、全くお伽式に書いたものだが、別に之を作りかえたものでわない。

一　『珍竹齋物語』や『黃島月島』『隣の鬼』なぞにわ、いさゝか國際的の寓意が含まれて居るが、いづれも明治四十年代の事だから、そのつもりで讀んでもらい度い。

一　若し夫れ『黃金丸』に至つてわ、少年文學の露はらいに書いた、云わば私の出世作であるが、その後三十年目に、文體をかえて書き直したものである。

一　要するに本篇わ、他編に比して、やゝ高級の物がまとめられて居る。したがつてやゝ生長した人達、乃至大人の方々によく讀んでもらい度いと思う。

著　者

小波お伽全集
第十一卷

長篇物語

目次

一 新八犬傳……一
發端 大狗張子……一
一 競馬遊戲……六
二 張子合戰……一二
三 犬瀨改心……一六
四 犬柄銃獵……二一
五 四犬出獵……一六
六 四匹紛失……三〇
七 不時の大雪……三三

八 東西南北……三七
九 初鷹勇戰……四二
一〇 新犬邂逅……四六
一一 狗兒圖……五二
一二 手長猿橋……五六
一三 筑波怪童……六一
一四 名水奇特……六五
一五 八王子町……六九
一六 四犬奇遇……七四
一七 合圖狼煙……七九
一八 八犬出陣……八三
大團圓 大狗子國……八八

二 お伽太閤記……九七

一 猿の迷兒と光物……九七
二 光丸誕生と日出吉の正體……一〇二
三 光丸の放逐と橋上の大鬼……一〇八
四 鬼の鼻毛と馬の足音……一一三
五 錦織左衛門と襤褸城……一一八
六 腰元桔梗實わ鬼女……一二四
七 墓前で授かる天下の名玉……一二九
八 鬼の退散、天狗の推參……一三四
九 日出吉の再現、名玉の奇特……一三八
一〇 妖仙の狼狽、王子の生捕……一四四
一一 大面の加勢、天狗の茵狩……一四八
一二 妖仙の降參、光吉の天昇……一五三

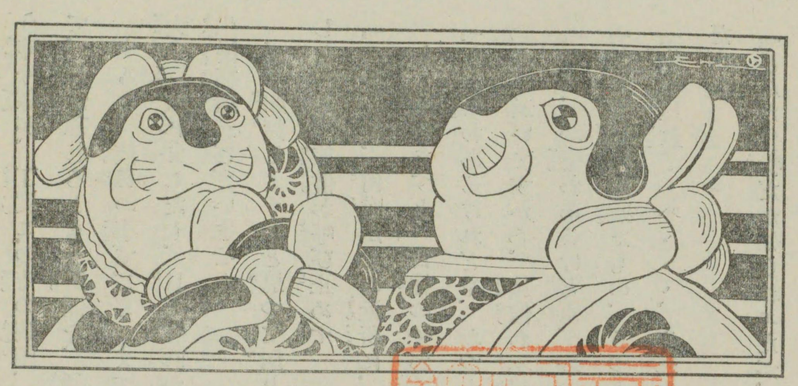
三 こがね丸……一五九

四 お伽十二支……二〇九
一 子 持大黒……二〇九
二 牛モウ〳〵……二一五
三 虎の飴攻……二二二
四 兎山……二二八
五 龍の鏡……二三四
六 蛇の脱衣……二四〇
七 馬の蠅……二四四
八 羊の髯太夫……二四九
九 三匹猿……二五六
一〇 葉鶏頭……二五九
一一 大神山……二六三
一二 猪が鼻……二六七
五 珍竹齊物語……二七一
六 黄島白島……二二五
七 隣の鬼……二三五一
八 日取童子……二三七七
一 劒に代わる木の横着……二三七七
二 風と雲とが產んだ童子……二三八二
三 木の精の傍若無人……二三八九
四 風の神も照日の味方……二三九二
五 明るい溫い草木の山……二三九五
九 大勝魔神……四〇三

目次

附錄　姫の小舟……四二九
一　小川の拾物……四二九
二　香函の行方……四三四
三　不思議の水鏡……四四〇
四　森の謎……四四六
五　地の宮……四五二
六　寶の舟……四五七

目次　終



新八犬傳

發端　大狗張子

むかしくに、まづある處の山の中に、大きな古寺がございました。元より和尚さんもなんにも居ない、空屋同然の古寺の事ですから、庫裏も本堂も荒れ放題、柱わ跛を引いて居る樣に曲り、家根わ何か考えて居る樣に傾き、そして其上にあつた鬼瓦も、何時か地上え落こちて、大欠伸をして居ると居う有樣、樹わ森々と茂り、草わ茫々と生えて、實に晝間でも可恐い位でございました。

處がまだ可恐い事にわ、この大きな古寺の中に、何か化物が住んで居ると見えて、毎晩その奥の方で、ワウオウ、ワウオウと云

う呻吟聲が、丁度この寺の周圍、八里四方に響き渡ると云うのですから、近邊の者わ一同戰慄上つて、日が暮れるともう其側を、通る者が無い位に成りました。

　すると、或日の事でございます。諸國行脚の旅僧が一人、この近所を通りかゝりましたが、足わ大分草臥れましたし、日も暮れかゝつて來ましたから、何處かで泊めてもらおうと思いましたが、生憎宿屋がございません。

　で、如何しようかと思つて居りますと、彼方から百姓の子と見えて、一人スタ〳〵やつて參りましたから、旅僧わ呼び止めて、

『コレ〳〵、何處かこの近所に、お寺があるなら知らせてくれんか。』

と、聞きますと、百姓の子わ立ち止つて、

『ある事わあるけれども、おつかなくツて行かれやしねエ。』

と、云いますから、旅僧わ不思議に思いまして、

『ナニ、お寺わあるけども、おつかなくツて行かれんと云うのか。全體そりやア如何云う譯だ？』

『だつて化物屋敷だもの、うつかり行くと喰われてしまうだ。』

『化物屋敷？　ハヽヽヽ、それわ却て面白い。そうして全體そのお寺にやア、どんな化物が居るのだネ。』

『どんな化物だか知らねエだが、なんでも晩に成ると、おつかねエ聲が聞えるだ。』

『ふウん。每晩呻吟聲がするのだな。』

『それでその呻吟聲が、八里も遠く聞えるだから、誰もおつかながつて、近所えも行く者わ無エだ。』

『そうか。そりや何しろ面白い。今夜わ其處え泊まり込んで、その化物の正體を、一番私が見屆けてやろう。で、そのお寺わ何方の方だ？』

　こう云いますので、對手の子わ、さも吃驚した樣に、旅僧の顏を見つめて居りましたが、頻りに路を聞かれますので、やがてそのお寺の方角を、委しく教えてやりました。

　さて旅僧わ、百姓の子に教わりました通り、路を急いで參りますと、やがて大きな本堂の前え出ました。見ると、成る程空寺と見えて、誰も人の居る樣子わありませんから、『お賴もう』と云う世話も入らず、スツと本堂から上り込んで、段々奥え行つて見ますと、何しろ昔時わ、餘程立派なお寺であつたのですから、中わ大層廣うございますが、今わまるで廢屋で、いかにも化物が住んで居そうです。

　けれども此方わ坊さんの事ですから、少しも可恐わとわ思いません。平氣で方々見てまわつた揚句、一番奥の一番靜かな處え行つて、其處にまづ荷物をおろし、

『ヤレ〳〵草臥れた。ドリヤ、今夜わこゝでゆつくり寢もう。』

と、行李を枕の代りにして、コロリと横に成りましたが、

『まてよ、先刻の小兒の話ぢやア、日が暮れると呻吟聲がするそうだが、もうそろ〳〵聞えそうな

ものだ。』

と、心待ちに待つて居る中に、何だか自分も草臥れて居りますから、ついウト〳〵寢込みますと、直ぐにグウ〳〵グウ〳〵と云う、雷の樣な高鼾。これでわ却て化物の方が、肝を潰してしまいそうです。

其中に、夜が段々更けて參りますと、誰とも知れず枕邊で、『和尙樣々々々〳〵！』と、呼び起す者がございますから、旅僧わ目を覺して、

『誰だ？　おれを呼ぶのわ誰だ。』

と、云いながら起き返つて見ますと、高さ五尺もあろうと云う、恐ろしく大きな狗張子が、ヌツと立つて居りますから、さてわ此奴が化物だなと、思いながらもわざと落付いて、

『今おれを起こしたのわ、貴樣だつたのか。』

と、聞きますと、狗張子わチン〳〵をして、丁寧にお辭儀をしながら、

『いかにも私でございます。』

『シテ、何か用があるのか。』

『少々お願いがございまして、わざ〳〵お目を覺ましたのでございます。』

『何だ。おれに願がある？、全體何う云う願だ？』

『他の事でもございません。元私わ、今から丁度十二年前の、大博覽會に出されました、大狗張子でございます。處が、御覽の通りの大さで、持ち運びにも不便でございますから、誰一人買手もございませず。其中に閉場に成りましてから、出品主が引取りまして、元の國まで持つて歸ります途中、この山の中を通りかゝりました處、路わ惡く荷わ重く、又持つて歸りました處で、所詮この樣な大狗張子の、賣れる事わあるまいと、無慈悲にも私を、このお寺の前に置き去りにして、其儘歸つてしまいました。

それからと云うものわ、此身を野天に曝らされて、雨に打たれ、日に照らされ、風に吹かれ雲に捲かれて、十二年の歲月を、この山に送ります中、不圖天地の氣を受けて、懷妊の體に成りましたが、神通力わ得て居ても、眞の動物で無い悲しさにわ、月わ滿ちても產む事を知らず。その苦しさに每夜每晚、呻吟き立てゝ居ります斗り。就きまして和尙樣、何卒御慈悲にこの苦痛を、お助けなされて下ださりませ！　これが御願でございます。』

と、さも苦しそうに陳べ立てました。旅僧わこの話を、ぢつと聞いて居りましたが、やがて膝をポンと打つて、

『さてわ化物の正體わ、貴樣の呻吟聲であつたのか。しかし、人間にもせよ畜生にもせよ、助けて取らすが坊主の役目、いかにもそれわ氣の毒ぢやから、私が助けて進ぜよう。とわ云うものゝ、元より自然の動物でわ無うて、人手に作り出された體、これに產をさせるにわ、氣の毒ながら又其方を、人手によつて破らにや成らぬが、それでも苦しう無いと云うのか。』

『それわ元より覺悟の前。胎兒さえ助かりますれば、私のこの張子の體わ、たとい何の様に破れましても、少しも恨わござりませぬ。』

『オ、流石わ天地の氣を受けた、神通自在の大狗張子、天晴れそれわよい覺悟ぢや。思わぬ殺生も佛の方便、それでわ其方の賴通り、直ちに此場で破つてとらそう。』

と、如意を持つて立ち上りますと、狗張子わさも嬉しそうに、その前え出て四足をそろえ、

『南無阿彌陀佛！　々々々々々！』

と、人間の通りに云いますと、旅僧わ如意を振りあげて、狗張子の背の處を、二タ打ち三打ち打ちますと、其勢に中央から、背わ兩方え破れました。

すると、不思議やその中から、金色の光がサツと出て、それと一所に、小さな狗張子が都合八個ワン〳〵と云う產聲と共に、八方え飛び出したと思いますと、其まゝ姿わ見えなく成つてしまいました。

一　競馬遊戲

父わ總理大臣侯爵、犬宮春元、母わ侯爵夫人雪子、其間に生まれたのが、犬宮初鷹と云う少年でございます。

初鷹に今年滿十二歲、則ち今から十三年前の、戌の年に生まれたのですが、丁度そのお宮詣の時に、まことに不思議な事がございました。

邸わ麹町の永田町ですから、產土神わ日枝神社、卽ち山王樣でございました。初鷹わ見事な產衣に身體を包まれて、お梅と云う乳母に抱かれ、家扶侍婢、馬丁などに、前後左右を護られて、日枝神社え參詣し、一代守護の御守札を頂いて、其歸途に、石壇下の玩弄品屋に寄つて、例の狗張子を買う事になりました。

乳母わ侍婢と一所に、まづ店え上り込んで、澤山出してある狗張子を、あれかこれかと、選り分けて居りますと、不思議にも初鷹わ——、まだ眼もろく〳〵見えない、口わ元より利く事の出來ない、產まれたての初鷹わ、急にムク〳〵と頭をもちあげて、星の樣な眼を見開らき、狗張子の澤山あるのを、一々見廻わしましたが、やがて其中でも、一番大きな、そして一番古いのを見ると、紅葉の樣な手をだして、それをちやんと指さしながら、

『これだ〳〵！』

と、云いました。

今までわまるで人形の樣に、身動きもしなかつた初鷹が、不意にこう云う事を云い出したのですから、乳母も侍婢も肝を潰して、その顏を見つめますと、初鷹わまた聲をあげて、

『これだ〳〵、この狗張子だ！』

と、繰り返して云いますので、乳母も不思議に思いながら、問い返す間もございません。

『はい畏まりました。それでわこれに致しましょう。』

と、若君の云う通り、その狗張子を買いますと、初鷹わそれを見て、さも安心した様に、又スヤ〳〵と寐入つてしまいました。

乳母わ云うに及ばず、侍婢から家扶、馬丁、さてわ玩弄品屋の亭主、小僧に至るまで、産まれての嬰兒が、口を立派に利いたと云う、この眼前の不思議に、一同顔を見合せて、

『何と云う坊ちやまだろう？』

と、舌を捲いて驚きましたが、只店頭に居た老犬丈わ、さも合點が行つた様に、獨り尾を振り立てゝ、初鷹の寢顏をば、餘念なく見あげて居りました。

やがて邸え歸りますと、乳母わ直ぐにこの事を、奥方に申上げましたから、奥方わ又殿様に、この話を致しました。

すると父の春元わ、それを聞いて、膝をポンと打ち、

『それわいかにも目出度い事だ。支那の老子と云う聖人わ、生れ落ちると直ぐに物を言い、また印度の釋迦わ、母の胎内を出るや否、天地を指さして立つたと云う。今自家の初鷹わ、宮詣の日に言葉を發して、自分の望む狗張子を指したとわ、老子釋迦にも劣らぬ奴、將來必ず豪い者に成つて天下に名を轟かすであろう。』

と、大層な喜悦で、又その狗張子も、

『此兒がわざ〳〵指をさして、欲しいと云うた位の物なら、定めし緣のあるものであろうから、此の兒の成人するまでわ、決して破壞れ損じない様に、大切にして置くがよい。』

と、云うので、それからわ尙更大切にかけて、蝶よ花よと育てゝ居りました。

其中に初鷹わ、まことに達者に成人しましたが、こゝにまた不思議な事にわ、その玩弄品にして居る狗張子も、年數を經るに從つて、段々大きく成りまして、而も初鷹の云いなり次第に、立たり坐つたり、臥たり起きたり、まるで眞個の犬の通りに、よく懷いて居りました。然し、他の人の前でわ、置けば置かれたまゝ、倒せば倒れたまゝ、——矢張り普通の狗張子でした。

すると又、この家の門番の息子に、犬門番平と云う、可愛らしい兒が居りましたが、丁度初鷹と同年で、性質も至つて怜悧でございますから、殿様のお鑑定で、若君のお相手に致しました。

初鷹わ、丁度好い遊戲相手が出來ましたので、大喜悦でございます。

『お前今日から僕のお友達に成るのかエ。ほんとによく來てくれたねエ。』

と、云いますと、番平も嬉うございますから、

『はい。左樣でございます。何卒仲好く遊ばして下ださいまし！』

『仲好くするとも。お前幾歲だ？』

『はい。取つて十三でございます。』

『それぢやア僕と同年だ。矢張り戌の年だネ。』

『左様でございます。』

『それぢやアお前もこう云う物を持つてるか。』

と、云いながら後の方を向いて、

『太郎〳〵！』

と、呼びますと、その聲に應じて、大きな狗張子が一個、後の屏風の陰から、ノソ〳〵歩き出して來ました。

見ると、その大さから色合まで、自分の持つて居る狗張子と、少しも差異がございませんから、番平わ吃驚しながら、

『はい、持つて居ります。丁度それと同じ様なのが、私許にもございます。』

『ナニ、あると。そして、それや、何時買つたんだ！』

『私の誕生の時でございました。阿父さんがわざ〳〵淺草までお參詣に行つて、雷門で買つて參つのでございます。』

『それでわ矢張り此通り動くか。』

『はい。他の者でわいけませんが、私が玩弄にしますと、勝手に動きますのでございます。』

『それわ面白い。まるで僕のとおんなし様だ。で、名前わ何と云う？』

『はい……まだ名わツイ付けませんでしたが！』

『そうか。それぢやア僕のが太郎だから、お前のわ次郎にするといゝ。』

『有難うございます。それでわ次郎に致しまして、これから直ぐに持つて參りましょう。』

と、やがて自分の家え飛んで參りましたが、間も無く大きな狗張子を、

『次郎來い〳〵！』

と、云いながら、お庭の方え連れて參りました。

初鷹わいよ〳〵喜んで、

『ウン、まるで僕のとおんなし様だ。それぢやアこれから兩人で、一つ競走をして見ようぢやないか。』

『それがよろしうございましょう。』

と、これから初鷹と番平わ、各自に狗張子に乘りまして、

『さアいゝか、ちやんと並んで！』

『一の二の三ツ！　ハイヨウ〳〵〳〵！』

と、御殿の廊下を馬場のつもりで、競馬遊戲を初めましたが、兩方とも不思議な狗張子ですから、まるで馬の走る様に、この廣い廊下中を、自由自在に駈けまわりました。

二 張子合戰

初鷹と番平とわ、その身分こそ、大臣の子と門番の兒、主人と家臣の差別わあれ、其交際の好い事わ、まるで兄弟同樣に、いつも狗張子を持ち出して、面白そうに遊んで居りました。

すると、この犬宮の邸に、不思議な事が起りました。それわ他でも無い、此頃奥の土藏に盜人が這入つて、中に入れてある寶物をば、盜み出すと云う事で、而もそれが一ト晩でわ無く、二晩三晩と續きました。

尤もこの邸にわ、平常から盜人用心に、大きな洋犬が五六匹飼つてあつて、日が暮れると、この五六匹が各自に邸中を廻つて、少しでも怪しい者と見れば、直ぐにワン〳〵吠え立てますから、中々盜人なんぞわ這入れませんのに、この盜人ばかりわ、何處を如何して盜入りますか、いつも巧く忍び込んで、寶物を持つて行きますから、邸中の者わ一同不思議がつて居りました。

若樣附從の番平わ、この事を聞きまして、『これわ如何も怪しからん事だ。あの大勢の洋犬に、平常から高價い牛肉を喰わせて、飼つて置くのわ何の爲だ？　こう云う時の用心ぢや無いか。それにその用心の犬が、少しも用心に成らないで、一度ならず二度も三度も平氣で盜人を忍び込ませると わ、實に何と云う馬鹿な事だろう？　全體同じ犬の年に生まれた、この番平の面汚しだ。よし、こう成りやアこの番平だつて、狗張子を持つて居るからわ、こう云う時に手柄を現わして、犬の名譽を恢復しなけりや成らない。』

と、こう思いましたから、直ぐに其晩、氣負にもたつた一人、お土藏の陰に隱れながら、盜人の來るのを待つて居りますと、やがてその夜も眞夜中過ぎ、四邊がシン〳〵と靜まり返りますと、邸に飼つてある洋犬が、何だか頻りに吠え初めました。

『さてわ盜人が來たのだな』

と、尙も息を殺して待つて居りますと、不思議にもその犬の聲が、まるで水を打つた樣に、パツタリ止まつてしまいました。

『オヤ、犬が默つたな。さてわ盜人奴、握飯でもやつたと見える』

と、口の中で獨語を云いながら、そつと覗いて見ますと、不思議！　いよ〳〵不思議！　彼方の捨石の上に、小さな狗張子が一個、行儀よく置いてあり、そしてその側にわ、今迄喧しく吠えて居た犬が、みんな圓くなつて、さも心持好さそうに寐て居ります。

これを見ると番平わ、腕を組んで考えました。

『まてよ。彼處にあるのわ狗張子ぢや無いか。而もおれ達の持つてる狗張子だ。して見るとおれより先に、おれのか、若樣のか、太郎狗か次郎狗か、彼方かの一個が此處え來て、盜人の番をして居るのだな。これわどうも感心な奴だ。まア、一つ呼んでやろう。』

と、やがて番平わ、

『次郎々々〳〵！』

と、呼んで見ましたが、狗張子わ默つて居ります。

『次郎で無ければ若様の太郎か、太郎々々〳〵！』

と、呼びましたが、まだ此方を向きませんから、つか〳〵と進んで行つて、

『オイ、太郎か次郎か。おれわ番平だよ。』

と、云いながら、撫でようとしますと、こわ如何に、その狗張子わ、『ワンだ』とも何とも云わず突然手を咬もうとしますから、番平わ吃驚して、飛び退きながら、

『オ、さてわ此奴わ盜人方だな。よし、そんならば此方にもあるぞ。』

と、直ぐに部屋え取つて返し、

『次郎來い〳〵〳〵！』

と、呼びますと、直ぐに眞個の次郎狗が、尾を振りながら飛んで來ました。

『オ、次郎か、よく來た〳〵、そして若様の太郎狗わ如何した？』

と、頭を撫で〻聞いて居る中に、また太郎狗も來ましたから、

『オ、二匹とも揃つたか、それぢやア直ぐにお土藏え行つて、盜人狗を征伐しろ！』

と、云うが速いか、二個の狗張子わ、直ぐにお土藏の方え飛んで行きました。

すると、其物音を聞きつけて、若様の初鷹も、急いで奥から出て來まして、

『番平々々〳〵！　太郎わ何處え行つた、〳〵？』

『オ、若様でございますか。今盜人狗を見付けましたから、直ぐに二匹をけしかけました。』

『そうか。そいつわ面白い逃がすな〳〵！』

『よろしうございます。』

と、初鷹わ用意のステツキ、番平わ手燭と心張棒を、兩手に持ちながら、

『ウウシ、ウシ、ウシ〳〵、太郎ウシ、次郎ウシ！』

『ウウシ、ウシ、ウシ〳〵、次郎ウシ、太郎ウシ！』

と、聲をかけながら、お土藏の方え飛んで行きました。

て、お土藏の處え來て見ますと、もう三個の狗張子わ、ウウ〳〵、ワウワウ、ワン〳〵、オウ〳〵

と、恐ろしい聲を揚げながら、組んづほぐれつ上に成り下に成り、咬合の最中ですから、初鷹わステツキを振り立て〻、

『太郎ウシ、次郎ウシ！　ウウシ！　ウシウシ〳〵！』

と、一所懸命にけしかけますと、番平わまた彼方の黑暗の中え、驀地に駈けて行つて、

『ヤツ、こん盜人！』

と、云いながら、誰だか捕えた様子です。

三犬瀬改心

『なに、盜人?』

『へい、盜人です。』

『捕えたか。』

『捕えました。』

云う中に初鷹わ、手燭を挿しながらやつて來まして、

『逃がすな〳〵! 逃がしちや不可ぞ!』

『大丈夫、もう逃がしや致しません。』

と、云うのを見ますと、番平わ彼方の塀の根元え、小さな男を一人抑えつけて、ギウ〳〵云わせて居る處です。

『盜人わ其奴か、早く縛れ〳〵!』

『畏まりました。』

『さア、おれも手傳つてやるぞ。』

と、初鷹も側え行つて、番平を助けながら、用意の苧繩で以つて、その小男を縛りあげ、さて手燭を差しつけて、よく其顏を見ますと、これも矢張り十二三斗りの、可愛らしい小僧ですから、初

鷹わ不思議に思い。

『盜人わ其方か。』

と、問いかけますと、小僧わ神妙わ御辭儀をしながら、

『へい、私でござります。』

『それでわ此間中から、自家の土藏え忍び込んで、實物を持ち出すのわ、悉皆其方の仕業なのか。』

『はい、左樣でござります。まことに申譯がござりません。』

『ふむ……そうか。』

と、初鷹わまだ合點の行かない樣子。

其中にまた番平わ、狗張子を一個小腋に抱え、後の二個を連れながら、二人の間え進み出まして、

『若樣! 御覽遊ばせ! これが此奴の狗張子でございます。』

と、初鷹の前に置きますと、初鷹わその狗張子を、自分達のと較べて見て、いよ〳〵不審の晴れない顏色。

『これが此奴の狗張子だと? まるでおれ達のと同じぢやないか。』

『いかにも生寫しでございます。そればかりでわございません、この又狗張子にも、神通力があると見えまして、此奴を側に置いておきますと、何樣に吠え立てる猛犬でも、直ぐにあれあの通り、正體も無く寐てしまうと云う、いかにも不思議な狗張子でございます。』

『ふゝん。それわどうも奇妙だな。』

と、少し考えましたが、何と思つたか番平に、盜人の繩を解かせてしまい。

『コリヤ小僧。其方わ一體何處の奴だ？　そうして何處からこの狗張子を持つて來て、何と思つて盜人に成つたか、それを委しく白狀しろ！』』

と、言葉も優しくして尋ねました。

すると盜人の小僧わ、急にハラ〳〵と淚を飜して、暫らくわ默つて居りましたが、よう〳〵の事で頭をあげ、

『はい……有難うございます。こう捕えられました上わ、巡査さんに渡されるか、御邸で責檻されるか、何方にしてもこの身體わ、酷い目に遭わされる事と、覺悟を極めて居りましたのに、思いの外な若樣の、御情深いそのお言葉、何んと御禮を申しましようやら……』』

と、又泣き出すのを慰めて、

『何もそう泣く事わ無い。それよりわ今聞いた事を、早く話して聞かすがいゝ。』』

と、云う側から番平も、

『これ小僧！　若樣もあゝ仰有る事だから、早く白狀するがよかろう。御情深い方だから、決してお前の惡い樣にわ成さらんよ。』』

と、頻りに問いかけますので、小僧わやつと氣を取り直し、

『それでわ申し上げましよう。私の四谷の鮫が橋に居ります、犬瀬鈍八と申す者の子で、速吉と申しますが、元より貧乏人の事でございますから、いくら玩具が欲しいと思いましても、阿父さんが買つてくれません。すると或日の事でございます、裏の塵塚え行つて見ますと、誰が持つて來て棄てましたか。小さな狗張子が一個、塵芥の中に落こちて居りました。見ると、まだ新しくつて、何處も破れて居りませんから、これわ好い物を拾つたと、其儘自家え持つて來まして、それを玩具にして居りますと、この又狗張子が、まことに不思議な狗張子で、まるで生きた犬の通り、駈け出したり、寢轉んだり、私の云う通りに動きますから、名も三太と付けまして、私の弟同樣に可愛がつて居りました。これがこの狗張子でございます。』』

『成る程、よく似た話もあるものだ。で、それが又何と思つて、盜人なんぞ始めたのだ！』』

『はい……それわ……まことに申惡うございますが……』』

『何も遠慮わ入らないよ。でわ家が貧乏だから、それで盜人を始めたのか。』』

『いゝえ、それ斗りでわございません。一體この世の中に、何だつて金滿家と貧乏人とが、あんなに別れて居るのだろう。金滿家だつて人間なら貧乏人でも人間、おんなじ人間でありながら、金のある奴わ、寢轉んで居てもお金が出來、貧乏してる者わ、いくら稼いでも甘い物が喰べられない……これがどうも殘念で、腹が立つて溜りませんから、寧その事盜人に成つて、手ツ取り速く金滿家の金を、貧乏人の方え廻わしてやろうと、こう思いましたから、それで盜人に成りまして、他人の物

を取り初めましたが、それだつて決して只の家えわ這入りません、成る丈お金のある處、寶物のある家を選つて、其處の物を盜み出してわ、貧乏人に遣つて居りましたが、その盜人に這入ります時に、この狗張子を持つて參りますと、何樣な恐い犬の居る處でも、少しも吠えられる事わありません。樂に物がれ取りますから、それで此方え參りますにも、屹度この狗張子をば、持つて參つたのでございます。處が此方にも、矢張り同じ樣な狗張子が、而も二個までございましたので、とう〳〵今夜わこの通り、貴君方に見付かりまして、まことにどうも、申譯がございません。しかし、もうこれからわ、決してこう云う惡い事わ、二度と再び致しませんから、何卒若樣！　私を、今日から御家來に遊ばして下ださいまし！　御願いでございます。』

と、手を突いて頻りに賴みました。

初鷹わ點頭いて、

『過を改めて憚る勿れとわ、論語でも習つた事だが、お前がすつかり心を入れかえて、これから盜人をやめるならば、いかにも家來にしてやろう。』

と、云いますと、番平も側から、

『お前が御家來に成つてくれゝば、私も今日から仲間が出來て、ほんとにこんな嬉しい事わ無い。』

と、云いますので速吉も大喜悅

『それでわお聞き下ださいますか。有難うございます。』

と、さも嬉しそうに御禮を云いまして、これでいよ〳〵犬瀨速吉わ、犬門番平と同じ樣に、初鷹の家來になりまして、其儘犬宮家の邸內に、置いて貰う事に成りました。

處が、元より盜人でもする位な、速吉の事ですから、その名前の通り、その敏捷い事と云つたら、悧怜な獵犬も及ばない位で、何をさせても脫漏がありませんから、初鷹にも大層氣に入り、それからわ毎日番平と三人で、仲好く遊んで居りますと、またこの狗張子も三個とも、この三人と同じ樣に、まことに睦まじくして居りました。

四　犬柄銃獵

さて犬宮初鷹わ、思掛けなく今度又、犬瀨速吉と云う、新らしい狗張子仲間を得まして、大喜悅でございます。以前から居る番平を合わせて、都合三人というもの、學校え行くにも、自家で遊ぶにも、少しも離れた事わございません。

其中試驗休に成りましたから、自家で遊んで計り居ても、面白くないからと云うので、今度わ又三人して、目黑の別莊えと參りました。

この別莊というのわ、丁度不動樣の後の方で、地面わ廣し、眺望わ好し、まことに好い處ですから、三人とも喜んで、此處に暫らく泊まり込み、又或時わ、各自の狗張子に乘つて、近所を散步したりして、まことに樂しく遊んで居りました。

すると、或日の事でございます。初鷹、番平、速吉の三人わ、お庭の芝原え出て、三匹の狗張子に競走をさせたり、角力を取らせたりして、面白がつて居りますと、不意に後の森の中で、ズドウンと云う音がしました。

『何だあれワ？』

初鷹わ聞咎めますと、

『鐵砲の様でございますネ。』

云う中に速吉わ、急いで彼方の築山え駈けあがつて、音のする方を見て居りましたが、やがて聲を揚げて、

『若様々々！　早く來て御覽遊ばせ！　早く早く！』

と、云いますから、初鷹わ番平と一所に、續いて登つて來ました。

『何だ？　〳〵？』

『あツ、彼方を御覽なさいまし？　兎が逃げて參ります。』

『なに、兎が？　……おゝ、居る〳〵。』

『ほんとに兎でございますねエ。ぢやア今のわ獵師ですネ。』

『屹度そうだ。』

云う中に速吉わ、何を見つけたか大きな聲で、

『やツ、これやア妙だ？』

『如何した？』

『狗張子が追つかけて來ました。』

『なに、狗張子が？　どれ〳〵……』

『それ〳〵！』

『おゝ狗張子だな。』

『狗張子でございます。』

『何奴だ？　太郎か、次郎か、それとも三太か、よく見ろ、〳〵？』

『左樣でございます……太郎が氣が强うございますから、大方太郎でございましょう。』

『いゝえ、太郎でわございません。』

『ぢやア二郎か。二郎も隨分はしツこいぜ。』

『いゝえ、二郎でわございません。二郎わ彼處に居ります。』

『そう云や、三太もあれ〳〵、太郎と一所に彼處に居ります。』

『ナニ、三匹共居るのか。それぢやアいよ〳〵他の奴だぞ。はやく行つて見ろ、行つて見ろ！』

と、初鷹わ先に立つて、築山を駈け下りまして、表の方え參りますと、番平も速吉も、續いて後から參ります。それを見て又、太郎も二郎も三太も、何だか譯が解らずに、急いで後から尾いて參

りました。

やがて門を出ましたが、其中にわもう兎も狗張子も、何處えか飛んで行つてしまつて、更に行方が解りません。

『如何したろう?』

『何でも彼方え行つた樣です。』

『ぢやア其方を捜せ、さがせ!』

と、三人わまた彼方の森の中を、彼方此方と捜しましたが、影も形も見えません。』

『解らないかい?』

『解りません。』

『困つたなア。何でもそんなに遠くえ行く筈わ無いよ。』

『でもあの勢いで駈けた日にやア、餘程速うございますから、中々追付きや致しません。それよりわもう少し待つとりますと、又鐵砲が鳴りましよう。そうしたら直ぐに行つて、獵師を捕えてやろうぢやございませんか。』

『うむ、それがいゝ、そうしよう。』

と、此處でまた三人わ、一トまづお庭え歸りまして、彼方の垣根の外で、ピユウ〳〵と云う、口笛の聲が聞えます。

はやくも聞付けたのわ、矢張り速吉で、

『おやツ、誰だか口笛を吹いてます。』

『ぢやア今の獵師だろう。行つて見ろ!』

と、又三人で、彼方の生垣の處まで來て、其隙間から外を見ますと、——まだ十二三斗りの獵師が一人、肩に鐵砲を擔いで居りますと、其前え大きな張子の狗が一匹、口に大きな兎を咬わえて、尾を振りながら來て居りました。

獵師わ狗の頭を撫でながら、

『おゝ、四郎々々! 大出來〳〵!』

と、褒めてやつて居る處です。

『大層若い獵師ですネ。また小兒ぢやございませんか。』

『そうだ。矢張りおれ達の仲間かも知れないよ。ソレ、あぢやないか。』

『そうです。ちつとも差異わございません。如何して彼が持つてるんでしよう。』

『だからはやく行つて聞いて見ろ!』

『へい。』

番平わ直ぐに門から廻つて、表え來て獵師に向い、

『おい、君！　君わ獵師かい？』

と、言葉を掛けますと、獵師わ驚いて、暫らく番平を見て居りましたが、

『そうです。』

『何と云う名だ？』

『犬柄銃太郎と云うんです。』

『犬柄？　矢張り犬の字があるんだネ。それぢやア直に來たまえ！』

『何か御用ですか。』

『犬宮様の若様が、會い度いツて仰有るから。』

『何方です？』

『僕と一所に來たまえ！』

と、番平わ銃太郎を連れて、別莊の門を這入りますと、四郎わ兎をくわえながら、その後から尾いて參りました。

五　四犬出獵

初髭と速吉わ、お庭で待つて居りますと、やがて番平わ、犬柄銃太郎と云う人を連れて參りました。

番平わ初髭の前え出て、

『はい、連れて參りました。今も名前を聞いて見ましたら、矢張り犬の字で、犬柄銃太郎と云う人です。』

と、云いながら銃太郎に向つて、

『犬柄君！　この方が犬宮様の若様です。またこの人わ、犬瀬速吉と云つて僕の同役です。』

と、紹介せますと、銃太郎わ帽子を脫ぎ、鐵砲を側に置いて、

『左様でございますか。私わ犬柄銃太郎と申し、獵師の兒でございます。何卒御見知り置きを！』

『僕わ犬宮初髭。これから朋友に成りましょう。』

續いて速吉も進み出て、

『私わ犬瀬速吉、御懇意に願います。』

と、茲で初對面の挨拶も濟みましたから、初髭わ又銃太郎を、築山の上の東屋え案内し、速吉に云いつけて、お茶やお菓子を運ばせ、いろ〳〵と疑待しますので、銃太郎も嬉しがつて、御馳走に成つて居りましたが、見ると山の下に、自分の持つて居る樣な、狗張子が三個も置いてありますから、初めて氣が付いて、

『はてな、御邸にも矢張り狗張子が、以前から御在ましたのでございますか。』

と、云つて尋ねますと、初髭わ點頭いて、

『そうさ、以前からみんな持つてるのだ。』

と、この三人の狗張子の由來を、それ〳〵話して聞かせました揚句、

『處で君のその狗張子わ、如何して君が持つてるのだ？』

と、尋ねました。

すると銃太郎わ膝を進ませて、

『私の狗張子にも、亦不思議な事がございます。一體私共の家わ代々獵師でございますから、例も獵犬を飼つて居りましたが、丁度私の阿父の代に、お白と云う牝犬が居りました。この犬わ至つて怜悧な犬で、よく役に立ちますから、阿父も大層可愛がつて居りましたが、只困る事にわ、他に牡犬が居りませんので、兒を生ませる事が出來ません。で、只そればかり氣にかけて居りますと、不思議にも私の阿母が、この私た產みます時、その犬も急に產氣付きまして、苦しがつて居る樣ですから、はてな、今までお腹が大きかつた樣子も無いが、如何して產氣が付いて居るのだろうと、みんな不思議に思つて居りますと、やがて一匹の子を產みまして、直ぐにそれを咬えながら、阿父の處え持つて參りましたが、よく見ますと、眞個の犬の子と思いの外、大きな狗張子でございました。』

『うむ、それぢやア君の狗張子わ、眞個の犬が產んだのだね。』

『そうです。まことに不思議な事だと思いましたが、丁度私が生まれまして、狗張子の要る處でしたから、そのまゝ私の玩具にして居りますと、この又狗張子が、矢張り眞個の犬の通りに、動いたり鳴いたりしますから、それからこの狗張子を、亦獵犬にも使いましたところ、親のお白にもまけない位で、毎度手柄を致しますので、其名も四郎と付けまして、大切にかけて育てゝ居るのでございます。』

と、由來を話して聞かせますと、初鷹も感心して、

『それわどうも不思議な狗張子だ。それにその名も四郎とわ、他の太郎、二郎、三郎に續いて、丁度好い名ぢやないか。處で君わ獵師だそうだが、全體獵と云う物わ、定めて面白い物だろうねエ。』

と、聞きますと、銃太郎わ得意に成つて、

『それわもう、世の中に獵位、面白い事わ無かろうと思います。何しろ野山をかけまわつて、生類を敵手にするのですから、隨分恐い事もある代りに、又面白い事も澤山ございます。貴君方もちと御運動に、獵をやつて御覽遊ばせ！　それわもう、戰をするより愉快ですぜ。』

と、さも面白そうに云いますので、初鷹を始め三人とも、吾知らず乘り出して、

『それわ實に愉快そうだ。』

『ほんとに面白そうでございますネ。』

『屹度それわ面白うございましよう。如何です若樣、この犬柄君に案內を頼んで、ちと御出掛遊ばしてわ？　私も御伴致しとうございます。』

と、云いますと、元より活潑な初鷹、直ぐにその氣に成りまして、

『そうだ。直ぐに出掛けよう。丁度自家に鐵砲もあつたから。速吉！　お前急いで取つておいで！』

『へい、畏まりました。』

と、速吉わ直ぐに駈け出して、永田町の本宅から、鐵砲を三挺持つて參りますと、番平わまた近所え行つて、草鞋と脚袢を買つて來て、玆で支度も出來ましたから、——實に子供わ氣の早いもの、この銃太郎を先に立て、四匹の狗張子を引連れて、直ぐさま獵にと出かけました。

六四匹紛失

四人の少年わ、四匹の狗張子を連れまして、いよ〳〵獵に出かけました。

『今度わおれが一番に兎を取るぞ。』

『てわ私わ猿を撃ツて見ましよう。』

『犬門君が猿を撃つなら、僕わ一番鹿を撃つて見せよう。』

『はゝゝ、猿だの鹿だのてエものが、中々〳〵素人に撃てるものですか。まア君達にわ、晝間の木兎が丁度いゝでしよう。』

と、こんな事を云う中に、段々山の中え這入ツて來ました。

其處で四人わ、各自に鐵砲え彈丸を籠めて、獲物を探して廻わりましたが、生憎一羽の小鳥も居りません。

『オイ、犬瀬君如何したんだ？　なんにも居ない様ぢやや無いか。』

と、初鷹わはやく一發放して見たいから、頻りに催促しますと、銃太郎も氣を揉んで、

『まア少しお待ちなさい。今呼んであげますから。』

と、笹笛をチユツ〳〵鳴らしたり、又四郎を森の中え追い込んだりして、頻りに探し立てましたが、如何しても出て來ません。

『でわもつと奥え行つて見ましよう。』

と、又前に立ちまして、森を抜け、籔を潜り、崖を登り、谷を越えて、ずつと奥え這入つて來ましたが、まだ獸の足跡も見えなければ、鳥の啼聲も聞えません。

が、只狗張子斗りわ、四匹とも鼻をヒコ付せて、何か物を嗅ぎ付けた様子ですから、さてわ近所に獲物があるのだなと、銃太郎わ職業柄で、早くも氣が付きましたから、今度わ狗張子を四匹共放して、山中を方々探がさせて見ようと、例の四郎を初め、太郎も二郎も三太も、みんな繩を解いてやりました。

すると、四匹の狗張子わ、さも嬉しそうに飛び上つて、一聲宛ワン〳〵ワン〳〵と、勇しく吠え立てるが早いか、直ぐに彼方の草叢の中え、驀地に駈け込みました。

これを見て四人の少年も、急に元氣付きまして、今に兎を追い出すか、雉子の巢を見付けて來るか……來たら一發に撃ち止めてやるぞ……だが……こんな山奥の事だから、若しか猪でも出たら如

何しよう。……なアに、猪だつて恐いもんか、直ぐに退治てくれるぞと。四人が四方に分れて、各自に鐵砲を構えながら、今か今かと待つて居りました。

處が、狗張子わ急に出て來ません。——五分經ち、二十分……三十分と……待てど暮らせど、四匹の中が一匹も歸つて來ません。

さてわ何處かで迷兒に成つたんぢやないか。それにしても一匹か二匹わ、もう歸つて來そうなものだと、頻りに待つて居りましたが、まるで鐵砲丸の御使、行つたきり歸つて來ません。

其中に構えた手わ、段々力が拔けて來て、鐵砲が持ち切れなく成りましたから、今度わ一同一つ所に集まり、草の上に胡座をかいて、休みながら待つて見ましたが、まだ姿が見えません。こう成ると、そろ〳〵心配に成つて來ました。

で、初鷹わ、頻りに首を傾けながら、

『どうもこれわ困るぢや無いか。こんな山奥え這入つて來て、小鳥一羽も取らないのに、大切な狗張子を紛失してしまつちやア、どうもほんとに困るぢや無いか。』

と、云いますと、銃太郎わさも氣の毒そうに、

『此儘狗張子が歸りませんでわ、私がどうも申譯がございませんから、これから私が探して參りましよう。』

と、已に立ち上ろうとする時、何時の間に登つたか、側にある大きな樹の上から、速吉が聲を揚げて、

『あゝ居た！　あんな處に居りました。』

七　不時の大雪

速吉の聲を聞くと、下の三人わ、みんな立ち上りまして、

『居たか〳〵？』

『居りました〳〵。』

『何處に〳〵？』

『彼方の谷川の處に！』

『四匹とも居りますか？』

『一同一所に居ります。』

と、上下で問答して居る中、速吉わやがて降りて來ましたが、

『さア此方え來て御覽なさい！　此處からなら見えましよう。』

と、先に立つて、山の端の處え來まして、

『それ、この見當の、それ、谷川の側の、それ、洞穴の處に、四匹とも居りましよう。』

と、指さす方を見ますと、成る程彼方の谷川の側に、大きな洞穴がありまして、その中に四匹と

も、ちやんと畏まつて居りますが、尚よく見ますと、其奥に、誰だか人間が居る様ですから、初麿わ、兼て用意をして來た、双眼鏡の度を合わせて、其の人間をよく見ますと、これわ一人の老婆さんで、而も頭から足の先まで、眞白に成つて居りますから、初麿わいよ〳〵不思議がつて、

『おい〳〵、變だぜ〳〵！　あの洞穴ン中に、眞白な老婆さんが居るぜ、さアこれでよく御覽！』

と、双眼鏡を番平に渡し、番平から速吉、速吉から銃太郎と、順々に見ますと、中にも銃太郎わ、頻りに首を傾けて、

『これわどうも不思議です。こんな山ン中に、彼様な老婆さんが、而もたつた一人で居るとわ、どうも不思議ぢやありませんか。事によつたら人間でわ無い、これわ化物かも知れませんぜ。』

『そうです。只の老婆さんが、こんな山奥に居る筈わ無いから、これわ屹度仙人ですぜ。』

『なにこれわ、山の神だろう。』

と、云う中にも初麿わ、

『何にしても失敬な奴だ。おれ達の狗張子を取上げるとわ……よし、是から彼處え出かけて行つて、あの老婆を取捕えて、狗を取り返してやろうぢやないか。』

『それが宜しうございます。でわ直ぐにこれから行つて、あの老婆を退治てやりましよう。』

『いや、それよりわ生捕にして、淺草の奥山の、見世物にしてやろうぢや無いか。』

『それがいゝ、〳〵。』

と、勇み立つて出懸けようとしますと、銃太郎わ留めまして、

『いゝえ、少しお待ちなさい！　どうも先刻から見ますのに、あれほど神道自在の狗を、私共が使うよりわ、もつと自由にして居りますから、これわよつぽどえらい奴です。事によつたら謀略で、うまく私共を釣りよせて、一同側え來た處を、取つて喰う氣かも知れませんから、これわうつかり行かれませんぜ。』

『成る程、そう云えばそれもそうだ。』

『ですからそれよりわ、こう云う時の飛道具、寧そ此處から鐵砲で、狙撃にしてやりましよう。』

と、云いますと、初麿わ手を拍つて、

『うん、そうだ〳〵。こう云う時に使わなけりやア、鐵砲持つて來た甲斐が無い。よし、それぢやア兎の代りに、あの老婆を撃ち取つて、かち〳〵山の狸ぢやア無いが、婆汁にしてやろう。』

『成る程、それわよい處え御氣が付きなさいました。それでわ此處から筒をそろえて、「撃てエおい」とやりましようか。』

と、云いますと又銃太郎わ、

『なに、たつた一人の老婆を撃つのに、四人掛りにわ及びません。もし過失つて狗張子でも、撃ち殺しちやア大變ですから、此處わ私と若様と、二人でやれば大丈夫です。』

『よし、それぢやアおれと犬柄とで撃つから、お前達わ見物して居て、若し此方が撃ち損じたら、

直ぐに續いて放すがいゝ。』

と、これから初鹿わ銃太郎と一所に、鐵砲の筒口をそろえて、彼方の洞穴の中の、眞白な老婆さんを狙いすまして、一所にドンドンと放しました。

『どうだ、〆めたか？』

云つて、彼方を見ましたが、まだ煙で見えません。

『たしかに反應がありましたが……』

と、尙透かして眺めましたが、まだ朦朧として見えません。すると——、こわ如何に！

俄かにゴウと云う、山おろしの風が吹いて來ますと、それと一所にチラ〳〵と、雪が降り出して參りました。

『やツ、これわ雪ですぜ。』

『どうもこれわ、不思議な天氣だ。』

と、云う中に、見る〳〵雪わ大雪に成り、眞綿をちぎつて投げる樣に、どん〳〵降り出して來まして、一寸先も見えませんから、四人わ互いに名を呼び合つて、一ツ所に固まりながら、『どうもこれわ驚いた。』『何と云う天氣だろう。』『これわ屹度あの老婆が、魔法を使つたにちがい無いぜ。』

『それならば猶の事、こんな處に居られない』

と、急いで逃げようとしましたが、其中に大雪わ、もう〳〵三尺も四尺も積つて、一歩も前え出られません。

可哀そうに四人とも、とう〳〵雪の中に埋まつてしまいました。

八東西南北

無

殘にも、大雪の中に埋められた四人の犬士、寒いのと、せつないのとで、其儘氣絕してしまいました。

すると、あゝら不思議！

今まであれほど降つて居た雪が、一時にぱつたり止んだと思うと、忽ち彼方の谷間から、眞白な光物が、段々〳〵こつち方え向つて來ましたが　やがて側え來た處で、よくそれを見ますと、光物だと思つたのわ、眞白な雲に乘つた、一人の眞白な老婆さんで、其前にわ、太郎も次郎も、三太も四郎も、頭をそろえて附添い、また其後にわ、此の四匹と同じ樣な、而も四匹の狗張子が、まるで影の樣に、もうろうとして見えて居ります。

老婆さんわ丁度四犬士の埋まつて居る、其上まで來ますと、靜かに狗張子を見返つて、

『これ、早う行て助けてあげい。』

と、云いますと、狗張子わワンと答えて、直ぐに雪の上え飛んで下り、……太郎わ初鹿、次郎わ番平、三太わ速吉、四郎わ銃太郎と、各自に自分達の主人をば、雪の中から掘り起しました。』

が、まだ四人とも正體わ無く、齒を喰いしばり、手を握りつめ、而も其體わ、まるで氷の様に成つて居ります。

老婆さんわまた狗張子に、

『早う溫めて上げんか！』

と、云いますと、狗わワンと畏つて、直ぐにその主人達を、各自の腹の下え入れたり、又息を吐き掛けたりして、頻りに介抱して居ります中、程無く四人共蘇生りました。

『オヽ太郎か？』　『ワン！』

『オヽ次郎か？』　『ワン！』

『やア、三太か？』　『ワン！』

『やア、四郎か？』　『ワン！』

茲に主從が、漸く邂逅いましたので、初めて安心しましたが、見ると、先刻洞穴に居た、彼の例の眞白な老婆さんが、何時の間にか來て居ますから、さてわと又驚いて、『おのれツ老婆奴！』と云いながら、四人共飛び起きて、一度に筒口を向けました。

すると老婆さんわ、ニツコリと笑いながら、

『これ！　皆さん少しお待ち！　私わ決して怪しい者でわ無い。實わこの狗張子の叔母、雪の精と云うものだが、お前方に云う事があつて、此頃の時候後れに、わざ〳〵降つて來ましたのだよ。』

と、云う聲がいかにも優しく、其中にまた威光があつて、迂濶に手を出しかねますから、初鷹わやがて鐵砲を棄てゝ、其前に兩手をつき、

『さてわ貴女わ雪の精でしたか。雪わ狗の叔母さんだとわ、平素から聞いて居ましたが、まさかこの山に居らつしやろうとわ、今までちつとも知りませんで、つい鐵砲を向けました。まことに申譯がありません。しかしそれならばそれで、尋常に名乘つて下だされればよいのに、わざと洞穴に隱れて、狗ばかり取りあげてしまうとわ、全體如何云う譯なのです？』

と、少し理屈を云いかけますと、雪の精わ點頭いて、

『流石わ犬宮の坊ちやん、その御尋ねわ御道理ぢや。しかし、それわ他でも無い。お前方の膽力を、一寸試して見た斗り。處が、案に少しも違わず、四人が四人揃いも揃つて、末頼もしい膽力腕前。その勢なら此後とも、天晴れ功勞が立てられますぞや。それに付いてお前方に、云うて聞かす事がある。――一體この狗張子わ、今四個だけ揃うて居るが、此の他にもまだ四個、併せて都合八匹に、それ〳〵一人の主人が在つて、それで犬士が都合八人、おつゝけ揃うことがある。其時こそわお前方が、初めて眞實の力を得て、この日本の國の爲めに、前代未聞の大功勞を、立てる時節が來たと云うもの、まづそれまでわ四人とも、殘餘る犬士と狗張子に、一日も早く邂逅う樣、隨分共に氣を付けて、骨を惜まず探すがよろしい。尤も其間にわ、まだ種々の苦勞もあり、悲い事やせつない事わ、幾度と無く來ようけれど、それ等わ丁度今の先、雪の中に埋られても、やがてまた蘇生つて

この青空を見ると同様、僅かの間の辛抱ゆえ、けつしてそれ等の苦勞の爲めに、氣を落してわ成りませんぞ。――それだけ云えば用の無い者、私わこれでお暇ぢや。おさらば〳〵。』

と、云う中に、もうその姿わ今までの、雪と一所に消えてしまつて、空わ元の青天井、日わようく傾いて、西の峰に掛りながら、明日も天氣だと云わぬ斗りに、まだキラ〳〵と輝いて居ります。

夢の中に夢を見た樣な、この四人の犬子わ、此時初めて目が覺めた樣に、暫らくわ言葉も無く、顏を見合わせて居りましたが、やがて初鷹わ手を拍つて、

『いや、實に今日わ不思議な日で、全體兎を擊ちに來たのが、兎わ取れずに雪の精と云う、不思議な老婆さんに出會して、不思議な事を聞いたものだ。しかし、今の老婆さんの話で見ると、まだ此の外におれ等の樣な、不思議な狗張子を持てる者が、四人居ると云う事だから、もう兎狩わ癈止にして、はやくその四人を、一同で探しに行こうぢや無いか。』

と、云いますと、番平も贊成して、

『そうして八人揃いさえすれば、日本國の爲めに成る、前代未聞の大功勞が、出來ると云うのわ何より愉快。でわ直ぐと出掛けましよう。』

と、茲に相談が纏まりまして、やがて四人わ狗張子に乘つて、勇み立つて山を降りましたが、又速吉の云いますにわ、

『これから殘りの四人を、四人で探しに行くのわいゝが、しかしその四人が、一ツ所に居るのだか、又四所に分れて居るのか、それが少しも解らないぢやア、四人で揃つて行つたつて、何の役にも立たないから、それよりか今日からわ、四人がしばらく四方に分れて、一人が一人宛探す事にしたら、却つて早く解るぢやありませんか。』

と、云う尾に付いて銃太郎も、

『それわ犬瀨君の云う通り、丁度先刻もあの山で、兎を狩り立てた時の樣に、四人が四方に手分をして、探しに行くのが上策です。』

『うん、それわ其方がいゝ。だが、それで若し見付かつたら、何處で一同落合おう？』

『それわ御邸がよいでわございませんか。』

『いゝや、自家でわ却つて五月蠅いから、それよりあの老婆さんに會つて、揃つた處を見せる樣に、先刻の山がいゝぢや無いか。』

『いかにも、それがよろしう御座います。でわそう云う事にして、誰でも一番先に見つけて來たものが、何か合圖をする事に致しましよう。』

『そうだ。その合圖にわ、よく昔時の戰爭なんぞにある、狼煙を揚げる事にしようぢやないか。』

『成る程、狼煙わ遠くからよく見えますから、合圖にわ一番宜しうございます。』

『でわ可いか、そう極めたぞ。』

『はい、宜しうございます。』

と、是から四人わ別れ〳〵、初麿わ太郎をつれて、東の方えと志ざし、番平わ次郎と西の方、速吉と三太が南の方で、銃太郎と四郎が北の方と、思い〳〵に出かけました。

九　初麿勇戰

東の方えと向つて行つた、犬宮の初麿わ、可愛い狗張子の太郎を連れまして、東海道を急ぎます中、程無く來かゝつたのわ、駿河の國富士山の麓。あの天人が羽衣を忘れたと云う、三保の松原で御座ります。

今迄わ阿父さんの官宅に居て、大勢の家來や女中に、若樣々々〳〵と立てられて、不自由と云う事わ、遂に知らなかつた初麿、常から氣に入りの、番平速吉にも別れまして、只つた一人で旅え出たのですから、流石に心細うございましたろう。

けれども、元より氣の勝つた若樣ですから、決して厭に成つた顏もせず、何でもはやく新らしい犬士を見付出して、一番掛に狼煙を揚げて、一同を驚かしてやらなければ成らんと、其方に氣が張つて居りますから、例の太郎を無二の友達にしまして、頻りと路程を急ぎました。

すると、丁度この三保の松原に、龍神の御祭がございます。

龍神と云えば海の神樣、則ち此邊の漁師達が、此頃の大漁の御禮に、そのお祭禮をするので、二三日前から職業を休み、一同揃いの袢纏に花笠、又わ向鉢卷に揃いの浴衣で、山車を曳くやら、萬燈を振り立てるやら、チヤンチキリン、チヤンチキリン、ワツシヨイ、ワツシヨイ、と云う騷動、村中が沸く樣な賑いです。

初麿わ山王樣の氏子だけに、大のお祭禮好ですから、この聲を聞きますと、もう胸が躍り出す樣になつて、面白くて〳〵耐りません。

『さア太郎、行つて見よう。山車が來た〳〵。』

と、浮かれ立つて駈けて行きましたが、何しろ黒山の樣な人で、わい〳〵押し合つて居る處ですから、初麿の樣な小兒にわ、少しも前が見えません。

で、困つて居りましたが、見ると、彼方の龍神の社の前に、大きな松の木が在りまして、而も其幹が、まるで龍の天昇する樣に、曲りくねつて居りますから、登るにわ丁度ようございます。

『しめた。此奴わい〳〵處がある。太郎、お前わ其處で待つてろ！』

と、狗張子を根の處に置いて、直ぐ其松の木につかまり、それから段々登つて行つて、上の方の枝に腰をかけ、それからずつと見おろしますと、丁度富士山が正面に成つて、其前を龍神の山車が、ゆられながら來る處わ、何とも云えない景色ですから、初麿わ大喜悅で、一所懸命に見て居りました。

其中に山車わ、段々近く成つて來ましたが、見ると其上で、頻りにヒヨツトコを躍つて居るのが、如何にも面白うございますので、とう〳〵初麿わ浮かれ出して、

『テンテレツク〳〵、テレツクツ、テンテレツク〳〵、オツピリヒヤ……』

と、口で囃子を始めました。

すると、それを聞き付けた下の若者、

『何だ〳〵？　木の上で變な聲がするぜ！』

と、云いながら上を見ますと、此邊にわ見慣れない、洋服を着た一人の小兒が、松の木の頂邊に登つて居りますから、直ぐに眼を剝いて、

『やい！　手前わ何だつて其樣な處に登つてやがるんだ。はやく降りねエと撲ちのめすぞ。』

と、お祭禮で氣が立つて居りますから、一番呶鳴り付けました。

が、初麿わ囃子で夢中ですから、ちつとも耳に這入りません。平氣でまだ枝につかまつて、今度わ山車の人形の樣に、身體を動かして浮かれて居ります。

下でわ又若者、木の根元までやつて來て、

『やい、降りろツたら降りねエか。此餓鬼ア强情な奴だなア。』

と、云う中に、他の若者も見付け出して、

『こん畜生、太エ奴だ。』

『降りろやい、降りろやい！』

『已！　これでも降りねエか。』

と、果わ下から石を投りそうですから、初麿わ初めて氣が付いて、

『何だ？　此處に居ちやア惡いのか。』

と、聞きますと、下でわ口を揃えて、

『惡いから降りろツてエんだ。さア、早く降りろ！　〳〵！』

と、喧ましく云いますので、初麿も仕方無く、

『それぢやア降りてやろう。』

と、云いながらそろ〳〵下りかけました。

下でわ又若者、初麿の降りて來る間に、根の處に置いてあつた、狗張子を見つけまして、

『何だ、こんな物が置いてあるぜ。』

『あの餓鬼の玩具だろう。』

『ぢやア構わねエ蹈み潰してしまえ！』

と、其中の一人が、足で蹴飛ばそうとしますと、こわ如何に！　玩具だと思つた狗張子が、突然

『ワン』と云いながら、向脛にかぶり付きました。

若者わ驚いたの驚かないの、

『あツ、痛エ、痛エ。此奴わほんとの犬だ。』

『なに、ほんとの犬だ？　ちやア撲ち殺せ！　〳〵！』

と、氣の速い奴等、各自に棒切を振りあげて、太郎を撲とうとしますから、初鷹も腹を立て、

『おのれ！　失敬な奴等だ。』

と、云うより早く、松の木からヒラリと飛び下り、有り合う松の枝を持つて、若者に打つてかゝる。

『オヤ、此奴生意氣な！』

と、若者も向つて來る。此處でとう〳〵初鷹わ、漁師の若者を敵手にして、大喧嘩を始めました。

一〇　新犬遜逅

先方わ大勢の若者、此方わ初鷹たつた一人です。けれども此方にわ、神道自在の太郎と云う、不思議な狗張子が付いて居りますから、中々〳〵負けわしません。

見る〳〵中に太郎の體わ、犢ほどの大きさに成つて、ウウワウ〳〵、ワウオウ〳〵と、恐ろしい聲で呻りながら、前え飛び付き、後え蹴散らし、右え喰い付き、左え咬み付き、一所懸命に働きましたから、流石血氣の漁師共も、横腹を蹴破られるやら、臀肉を喰切られるやら、散々な目に會わされて、一同血だらけに成りながら、とう〳〵追つ拂らわれてしまいました。

初鷹わホツと一息を吐いて、衣服の塵などを拂いながら、不圖氣が付いて見ますと、何處え行つたか太郎が居ません。

さてわ今の漁師達をまだ追駈けて行つたのかと、んから、少し心配初めまして、

ヒユウ〳〵太郎來い〳〵と、口笛を吹いて呼びましたが、影も形も見えません。

『如何したんだろう。これわ困つたなア。』

と、初鷹も氣が氣でありませんから、今度わ自分から出かけて、御祭禮の雜踏の中を、彼地此地と探しましたが、如何しても解りません。

今までわ、杖とも柱とも、家來とも友人ともして、賴みに賴み切つて居た、大切の〳〵太郎に、而も知らない土地え來て、はぐれてしまつた事ですから、流石の初鷹も、心細く成りまして、今わ自分の事も忘れてしまい、やがて夕方に成つて、御腹もそろ〳〵空いて來ましたのに、まだ御飯も喰べず、眼をお皿の樣にして、頻りに探して廻りましたが、

其中に、日もたつぷり暮れてしまいました。けれどもまだ見付かりません。

さてわいよ〳〵あの太郎わ、あんまり敵の中え深入したので、却つて漁師達に捕つて、酷い目に遭つてるのでわないかと、こう思うと尚更氣が揉めて、居ても立つても居られませんから、急いで又漁師町え來て、軒に釣してある提灯の光で、一軒毎に覗いて廻りましたが、まるで聲すら聞えません。

仕方がありませんから、今度わ裏町を松原傳いに、濱邊の方え來て見ますと、今夜わ御祭禮の事ですから、町の方こそ賑やかですが、此邊わ人の影も見えず、只波の音ばかりで、其上にわ眞圓なお月樣が、徐かに照らして居らつしやいます。

『あゝお月樣！　貴君わ高い處に居らしつて、明るく光つて居らつしやいますから、よく御解りでございましよう。太郎わ何處え參りましたか、何卒教えて下ださいまし！』

と、頼んで見たが、うつかり物を云つたら、直ぐに雲が出て來やしないかと、お月樣わ澄ました顔で、何とも云つて下ださらない。

すると、遙か彼方の方で、笛の聲が聞え出しました。

はてな、祭禮の笛ともちがうようだと、耳を欹てゝ聞いて見ると、其聲が大海に響いて、いかにも勇ましく聞えますので、初鷹もつい釣り込まれて、やがて其聲を目的に、段々近く行つて見ますと、丁度彼方の波打際を、一人の漁師の兒が、笛を吹きながら歩いて行くと、その前になり後になり、一匹の狗張子が、さも其笛に聞惚れた樣に、尾を振りながら付いて行きます。

『おウ、太郎だ、〳〵！』

思わず聲を出した初鷹わ、直ぐに側え飛んで行つて、

『太郎！　太郎！』

と、呼びましたが、狗張子わ聞えない風で、まだ此方を向きません。

『太郎と云つたら、太郎！』

と、初鷹わ急き込んで、いきなり其の頸首を捕えますと、今まで笛を吹いて居た兒わ、此時初めて立ち止まつて、

『貴郎何をなさるんです？』

と、靜かに咎めた。

咎められた初鷹わ、少し勃然としましたから、

『おれの犬だから連れてくんだ。』

と、云いますと、漁師の兒わ笑いながら、

『坊ちやん、それわ違いましよう。これわ私の犬ですよ。』

『なに違うもんか。これわ確かにおれの犬だ。』

『そんなに仰有るのなら、確かな證據がございますか。』

『あるとも、この犬わ太郎と云つて、この犬宮初鷹が、先刻途中で喧嘩した時、はぐれた犬に違いない。』

『いゝえそれわ違います。この犬わ五郎と云つて、この犬島舵五郎が幼稚い時から祕藏の狗張子です。』

『なに、五郎？』

『ワン！』

『それ御覽なさい！　貴郎が先刻太郎と云つた時にわ、何とも返事をしなかつたのが、今五郎と仰有つたら、ワンと云つたぢやありませんか。これが確かな證據です。』

と、こう云われて見ますと、成る程一言もありませんから、初鷹も腕を組んで、考え込んでしまいましたが、不圖雪の精に聞いた事を、思い出して膝をポンと打ち、

『うむ、それでわ君も八犬士の一人か。それで犬島と云うんだネ。これわ好い人に邂逅した。』

と、俄かに元氣付いて喜びますと、舵五郎も嬉しそうに、

『さてわ貴君が、先刻海神様の御地内で、若者と喧嘩をなすつて、すばらしい動作をなすつた、豪い坊ちやんでございますか。それでわ私も先刻から、御目に掛り度いと思つて居りました。して貴君の狗張子わ、それ切り解らないのでございますか。』

『そうだ。先刻から方々探してるんだが、如何しても解らない。』

『それわさぞ御困りでございましよう。』

『事によつたら漁師達に、捕虜に成つて居やしないか、君わまだ知らないか？』

『私わまだ知りませんが、元より神通自在な狗張子、まさかそんな事わございますまい。大方それわ何處えか行つて、御飯でも喰べて居るのでしよう。いまに屹度參りますから、まづそれまでわ、こゝで御話なすつて居らつしやいまし！』

『そうだ太郎が居なく成つた代りに、君に此處で會う事が出來りや、これで僕の氣も濟むのだ。でわ暫らく此邊で、話をしながら待つて居よう。』

『それが宜しうございます。しかし此處でわ、又他の奴等が來ると邪魔ですから、船の中でゆつくりと、御休息をなさいまし！』

と、やがて濱邊え來て、其處にあつた一艘の船え、初鷹と五郎を乘せて、自分に艫を押しながら、少し陸を離れました。

すると又、何を見付けたか五郎が、頻りに陸の方を向いて、

『ワン〳〵、ウオウ……』

と、吠えますから、舵五郎わ艫を止めて、

『何だ？　五郎！』

と、云いながら振り返つて見ますと、今しも彼方の波の中を、一匹の狗張子が、頻りに泳いで來る樣子です。

『やア、參りました〳〵、あれが貴郎の太郎でしよう。』

『なに、太郎が……？』

云つて見ますと、成る程先刻はぐれた太郎が、波の中を泳いで出ます。

『おゝ、太郎、よく來た〳〵〳〵！』

と、初鷹の大喜悦、船の中から両手を出して、急いで太郎を抱きあげて、船の中え入れて見ますと、こわ如何に、太郎わ口をカツと開いて、立派な箱を吐き出しました。

二　狗兒島圖

太郎の口から吐き出した箱、見ると立派な黒塗に、金で波の紋の蒔繪をした、文箱の様な物ですから、初鷹わ驚いて、

『全體これわ何だろう?』

と、不思議がつて見て居りますと、舵五郎も小首を傾けて、

『この御紋わ龍神様の御紋ですな』

『なに、龍神様の紋だ?』

『解りました。太郎が今まで見えなかつたのわ、屹度この箱を取りに行つたのでしよう。何でも好いから其箱を、早く開けて御覽なさい。』

と、云いますので、太郎わ蓋を取つて見ますと、中から巻物が一本出ました。

『おやこんな物が出た。』

『早く廣げて御覽なさい!』

初鷹わ又紐を解いて、その巻物を廣げて見ますと、これわまだ新しい地圖です。

全體何處の地圖だろうと、二人わ月光で見ましたが、元より世界の圖でも無ければ、日本の圖でも無く、ついに見た事も無い形をして居ります。

が、尚よく〳〵見ますと、これわ一つの島國で、形わまるで狗張子を横から見たとうり、側にわ丁度鈴の様な、小さな島も付いて居ります。

これを見ると舵五郎わ、急に膝をポンと打つて、

『ウム、そうだ〳〵。これわ狗兒島の地圖ですよ。』

『なわ狗兒島だつて?』

『そうです。——此の三保の浦から南の方を、一萬二千三百里行くと大きな無人島があつて、狗張子に似て居る處から、狗兒島と云つて居る事わ、幼少い時から聞いて居りました。それで屹度此の地圖わ、其島の圖に相違ありません。』

と、云いますから、初鷹も驚いて、

『おゝ、それでわ狗兒島と云う島が、南の方にあるのだネ。』

『そうです。而も其國にわ、立派な山や立派な川が、この圖の通りにちやんとあつて、金も出れば銀も出、其他動物でも植物でも、何でも無い物わ無いと云う、世界一の好い處ですが、只一つ困る事にわ、其處にわ恐ろしい狂犬が居て、人を見ると喰い殺してしまうので、誰も其處え行く事が出來ず、只遠くから指を咬わえて、見て來る斗りだと云う事わ、よく阿父が話して居りました。

と、云う中初鷹わ、じつと腕を組んだまゝ、地圖を見詰めて居りましたが、

『そう云う好い處があるのに、今まで放棄つて置くと云うのわ、どうも惜い話ぢや無いか。如何かして其國を、日本の領地に仕度いもんだネ。』

『それわもう私も、疾うから考えて居るんですが、何しろ私一人ぢやア、如何する事も出來ません から、今まで默つて居りました。』

『いや、それわ驚く事わ無い　お前わ一人だと云うけれども、この不思議な狗張子を持つてる、犬と云う苗字の付く者わ、この日本に八人居て、其八人が揃う時わ、取りも直さず日本の爲めに、大功名をする時だと、日外狗の叔母さんだと云う、雪の精に聞いた事がある。』

と、茲で以前からの事歷を話しますと、初めて聞いた舵五郎も、大きに力を得まして、『そう云う事なら一日も早く、殘りの三人を探し出し、一番狗兒島え乘り出して、此の神通自在の狗張子で、狂犬どもを追拂い、狗兒島の中央に、朝日の旗を押立てましよう。』と、二人共勇み立つて、やがて其地圖を卷き納め、それを大切に懷中え入れて、尙狗兒島征伐の、二人の考案を話し合つて居りましたが、其中に夜も明け放れて、遙か東の海の端にわ、眞赤な朝日が登つて來まして、その八方を照らす後光わ、まるで大きな軍旗の樣です。

話頭わ變つて、茲に又犬柄銃太郎わ、他の者に別れましてから、例の四郎を連れまして、北え〳〵と參ります中、程なく來かゝりましたのわ、常陸の筑波山でございます。

筑波山と云えば、駿河の富士と相對して、東京近所でも名代の山。こう云う山の奥にわ、よく豪い人の居るものだから、事に寄つたらおれ達の仲間も、此の山に居るかも知れないと、段々山路を登つて參りました。

元より獵師の銃太郎、山路にわ馴れて居りますが、今朝から歩行き續けたので、大分御腹が空きましたから、一つ御辨當を遣おうと、路傍の森の中え這入つて、用意の竹皮包を取り出しました。けれども、何か飲む物が無ければ、御辨當も甘く喰えませんから、又吸筒を出しまして、一口飲もうとしました處、途々咽喉の乾く度に、ちよい〳〵飲んでしまいましたので、もう一滴もありません。

其處で仕方がありませんから、溪流の音を聞きつけて、其處え水を酌みに行き、これでよいと喜びながら、又元の森え來ますと、これわしたり、先刻其處え置て行つた、鐵砲わちやんとありますが、竹皮包が見えません。

『はてな、先刻確かに此處え出して置いたのに、紛失るとわ不思議だぞ。盜人の所爲なら、一所に鐵砲も持つて行きそうなものを、……食物斗り取つて行くとわ、……よつぽど意地の汚い奴だ。』

と、獨語を云つて居りました。

すると四郎わ急に木の上を見て、

『ワン〳〵ワン！　ウオ……ワン〳〵ワン！』

と、劇しく叱り付けますから、氣が付いて木の上を見ますと、大きな杉の股の處で、手長猿が二三匹、先刻の竹皮包を解いて、さも甘そうに喰べて居ります。

『おのれ失敬な奴だ！』

と、例の鐵砲を取りあげて、只の一發に擊殺そうとしますと、手長猿わ吃驚して、キヤツ〳〵〳〵と云いながら、長い手を合わせましたが、拜む眞似をするかと思うと、又眞赤なお尻を向けて、ペタ〳〵叩いたりして居ります。

二　手長猿橋

失敬極まる猿共の惡戲と、銃太郎わもう勘辨せず、唐突鐵砲の彈條を彈きました。處が、只カチツと云つた斗りで、ズドンと云う音が出ませんから、はてなと鐶を入れかけて、今度こそわと引きましたが、又彈丸が出ませんから、變だと思つてよく見ますと、こわ如何に、何時の間にか機械が毀してあります。

さてわこれも猿の所爲かと、銃太郎わ切齒をしながら、木の上を睨めつけますと、其中に猿共わ、御辨當を悉皆食べてしまつて、空に成つた竹の皮を、見せびらかしてわ笑つて居りますから、もう銃太郎わ火の樣になつて、

『おのれ如何するか見やがれ！』

と、云うが早いか、突然木の幹え手をかけて、身體中の力をこめて、エツサ〳〵と振り立てました。

すると上の猿共も、此奴大變な事に成つたと、一所懸命にかじり付いて居ましたが、何しろ大力で搖振られるのですから、暴風の時より枝が動いて、流石の猿も我慢が出來ず、まるで柿實の振落される樣に、バラ〳〵バラ〳〵落ちてしまいました。

下にわ待ちかまえて居た狗張子の四郎、元より大の仲惡の猿が、主人の辨當を横取したり、鐵砲までも毀すなど〻、失敬極まる事をしたのですから、何で猶豫をしましょう、矢庭に飛びかゝつて行つて、片端から喰らい付きました。

猿わ元より犬に敵いません。けれども大勢の事ですから、負けない氣を出しまして、この一匹の四郎をば、中央に追取り圍んで、四方から引掻きにかゝりましたが、神通自在の狗張子にわ、まるで爪の痕もつきません。

其中に一匹倒れ、二匹弱り、三匹投げられ、四匹傷けられて、散々な目に遭わされましたから、もう耐らんと思いまして、一同地上え平蜘蛛の樣に成つて、今度わ眞個に手を合わせました。

『降參々々！』

『この通り手を合わせますから。』

『何卒御勘辨遊ばしまして。』

『命斗りわ……』

『御助け〳〵！』

と、頼みましたが、狗張子わ聽きません。

『卑怯な奴だッ！』

と、云いながら、又踏み殺してしまおうとしますと、何思つたか銃太郎わ、今まで木の下に立つて、四郎の動作を見て居りましたが、此時ずつと進みよつて、

『いや、待て〳〵！』

と、四郎を制し、更めて猿に向いまして、

『こらやい、貴様等わ怪しからん奴だぞ。辨當を盜むやら、鐵砲を毀すやら、其上おれ達を馬鹿にするやら、散々悪い事をして置きながら、敵わなく成つて來ると、直ぐまた降參するなどゝわ、卑怯千萬憎くい奴だぞ。しかし、高の知れた山猿共、鏖殺しにした處で、何の役にも立たんから、品によつたら許さん事もないが、其代りに、これからわおれの家來に成つて、この狗張子と一所に、おれ樣の御用を勤めるか如何だ？』

銃太郎わ氣の廣い兒ですから、こう云つて聞きますと、猿共わさも嬉しそうに、額を地上に摺り付けながら、

『それわ仰有るまでもございません。昔時桃太郎と云う大將が、鬼が嶋征伐に入らつしやいます時も、私共の先祖の猿わ、途中から御家來に成りまして、戰爭の御供を致しましたが、その時も同じ御家來の中に、一匹の犬殿が居らつしやいまして、初めわ猿と仲が悪く、喧嘩ばかり致して居りましたが、遂にわ大の仲好に成つて、それから鬼が嶋え押し渡り、双方共に功名をして、めで度く凱旋したと云う事わ、定めし御存じで御座いましょう。』

『其處で今私共も、こうして降參致しますから、其處に居らつしやる狗張子殿にも、先刻からの失禮を御詫び申して。此後わ双方仲好く、旦那樣の御用を勤めまするでござりましょう。』

と、眞面目に成つて云いますと、銃太郎わ横手を拍ち、

『これわ好い事を云う奴だ。犬と猿とわ昔時から、仲の悪い譬喩にも云うが、又一度仲が直れば、却つて双方の力を併せて、一廉の功名を立てるものだ。よし、それでわ今日から家來にして、おれの供に連れて行くから、隨分忠義を盡すのだぞ。』

と、云い聞かせ、又四郎に向いまして、

『四郎！　この猿共わ、今日からお前の仲間だから、其心算で仲好くしろ！』

と、云いましたが、四郎わ只默つて聞いて居る斗りで、碌に挨拶もしません。

『何分よろしく御願い申します。』

『これからわ仲好くしましようねエ。』

『先刻わどうも失禮しました。』

『しかし貴犬の御強いのにわ、實に恐入つてしまいました。』

など丶、頻りに御世辭を云つて居ります。

さて銃太郎わ、大勢の猿を家來にしまして、何だか嬉しくてたまりません。これで一匹でも雉子を捕えれば、おれわさしづめ桃太郎だと、勇み立ち勇みたつて、尚山奥えと參りましたが、やがて高い崖の上え出ました。

見おろすと、下わ目も廻わる斗りの深い谷で、彼方わ森々と茂つた山です。

けれども橋がありませんから、彼方え渡る事が出來ず、と云つて後え引返えすわ、いかにも馬鹿氣た話だと、暫く立つて考えて居りました。

すると猿わ、忠義らしく前え出まして、

『旦那樣！　此處を御渡りに成りますなら、私共が橋を拵えましようか。』

と、云いますから、銃太郎わ點頭いて、

『そうだ、其處等の藤蔓でも取つて、早く橋を拵えてくれ！』

と、云いますと、

『なに、藤蔓も何も要りません。こうすれば橋が出來るんです。』

と、やがて殘らずの猿共が、順々に手と足を繋ぎまして、長い梯子の樣な形になり、そして一番先に居るのが、ヒヨイと彼方え飛び越して、岩の角えつかまりますと、成る程丁度橋の樣に成りました。

『さア、旦那樣も四郎さんも、これを渡つて入らつしやいまし！』と云いますから、『これわ妙だ眞個の猿橋だ』と、銃太郎わ面白がつて、四郎を先に渡らせ、自分わ其後から、鐵砲で調子を取りながら、猿の背中を踏みしめ〳〵、段々渡つて參りますと、やがて中央まで行つた時分、後の方に居た猿の一疋が、何かキヤツと聲をかけると、それを合圖に中央の猿が、わざと手を放したから耐りません、見る〳〵中に銃太郎と四郎わ、底も知れない谷の中え、眞逆樣に落ちてしまいました。

一三　筑波怪童

猿の計畧にかゝつた銃太郎わ、可哀そうに底も知れない谷の中え、眞逆樣に落込みました。

けれども銃太郎わ、根が獵師の子で、幼少い時分から野山をかけ廻わり、こう云う危險な目にわ、今までも會つた事がありますから、空を切つて落ちて行く間にも、ひらりと體を交わして、やがて其底え來た時にわ、身體を眞直にして居りましたから、大した怪我もしませんで、只谷底の草の上に、どしんと尻餅を搗いた斗りです。

が、何しろ高い處から落ちたのですから、暫らくわ氣が遠く成つて、茫然として居りましたが、漸々の事で元氣付いて、初めて四邊を見廻わしますと、此處わ深い谷の底で、草わ茫々と生い茂り、

兩方の懸崖わまるで斧で削つた様に、登ろうと云つても手掛わありません。又彼方の岩の陰を見ますと、巾が三間もあろうかと思われる、大きな瀧がドウ〳〵と落ちて居ります。

銃太郎わやがて起きあがつて、

『猿奴、酷い目に會わしやがつた。しかしこんな谷底え落ちても、何處にも怪我をしなかつたのわ、よく〳〵おれの運の好いのだ。それわそうと、四郎わ如何した？　彼奴も確かに一所に落ちた筈だが、何處え行つてしまやがつたか……若しや途中で岩にでもぶつかつて、其儘死んでしまやしないか。そうだとほんとに大變だが……』

と、大きに心配しまして、彼方此方と探して見ましたが、まるで影も形も見えません。

『これわどうもいよ〳〵變だ。でわ矢張り落ちなかつたのか知ら？　そんならそれで、早く見付けてやり度いが、何を云うにも此處わ谷底、上るにわ路も無し、こいつわどうも困つた事に成つた。』

と、頻りに考えて居ましたが、其中に咽喉が渇いて來ましたから、一つ水を呑もうと思つて、瀧の側まで來ますと、誰とも知らず、自分より先に、瀧を浴びて居る者があります。

銃太郎わそれを見て、『そうだ、おれも序に浴びてやろう。』と、岩の上え衣服を脱ごうとしますと、突然瀧の中から、

『こら！　誰だ？』

と、まるで銅鑼の様な聲で叱りつけますから、銃太郎わ吃驚しまして、

『誰だとわ……貴様こそ誰だ？』

此方からも威張りました。

すると、やがて其瀧坪から、ムク〳〵と出て來たのわ、畫で見る金太郎の様な、眞赤な顏をした小供が一人。圍栗の様な眼を剝いて、此方を睨めつけて居りますから、此奴わ不思議な奴だと思いながら、銃太郎も睨み返えしますと、先方わ又岩の蔭から、大きな鉞をかつぎ出して、

『やい、貴様わ何者だ？』

『貴様こそ何者だ？』

『全體何しに來やがつたんだ？』

『貴様こそ何をして居やがるんだ？』

『何だと此奴め！　おれの眞似斗りしやがるな。』

云うが早いか其小供わ、大鉞を振りあげて、銃太郎に打つてかゝりますから、銃太郎も心得たり と、鐵砲の筒で受け止めますと、又取り直して切りつければ、此方わ受け流して又打ち込む。

『おのれ生意氣な！』

『何を小癪な！』

と、一上一下、虚々實々、火花を散らして闘いましたが、中々勝負が付きません。

其中に銃太郎わ、初めて氣が付いて見ますと、先方の小供の胸に掛けて居る、腹掛の中央に書い

てあるのわ、大きな「犬」と云う字ですから、『これわ不思議だぞ、事によつたらこの小供わ、矢張り犬士の仲間かも知れんぞ。道理で普通の小供とちがつて、餘程手強いと思つた』と、こう氣が付いて見ますと、迂濶闘つて、怪我をさせてわつまらんと思いますから、やがて聲をかけました。

『おい、待つた〳〵！』

『待てとわ何だ？　弱虫奴！』

『いや、貴様の名が聞き度いんだ、名乘れ〳〵！』

『そう云う貴様から名乘れ！』

『よし、それならば名乘つて聞かそう、吾こそ日本新八犬士の一人、犬柄銃太郎と云う者だ。』

『それでわおれの名も聞かしてやろう。おれわこの筑波山に住んで居る。犬瀧音丸と云う者だ。』

『なに、犬瀧音丸だと？　あの犬瀧……』

『おゝさ、此筑波山の犬瀧で、産湯をつかつた犬瀧音丸。足柄山の金太郎にも、腕白競ぢや敗を取らねえ、犬童子を知らねいのか。』

と、力身返つて名乘りました。

犬

瀧音丸と云う名を聞くと、銃太郎わ其儘鐵砲を棄てゝ、

『それぢやア少し待ちたまい！』

『何だ待てとわ？』

『話があるから待ちたまい！』

と、云つて側にある岩の上え、自分から先づ腰をかけると、音丸も仕方無く、大鉞を小腋にかゝえて、其傍えどつかと胡座をかき、

『何だ話たア、ぐづ〳〵せずに早く云わねエか。』

と、云う顔をつく〴〵見ながら、銃太郎わさも感心した體で、

『君も犬瀧と名乘るからにやア、犬士の仲間に違いない。』

と、云うと、それを又聞き咎めて、

『犬士の仲間たア何の事だ？』

『君わこんな山奥に居るから、こう云う事わ知るまいが、全體僕達わ新八犬士と云つて、今この日本中に、犬ツて云う苗字の付く兒が八人ある、其中の一人なんだ。て、君わ犬瀧音丸、僕わ犬柄銃太郎。ね、この通り、犬ツて云う字の付く者に、犬宮初鷹、犬門番平、犬瀬速吉と、こう五人まで

わ解つたが、まだ此の他に三人ある筈、この三人を見付け出して、八人かちやんと顔を揃えりやア、其時こそわ僕達が、この大日本帝國の爲めに、大功勞をする時なんだが、何と君もこれからわ、こんな山奥に引込んで居ないで、僕と一所に東京え來たまいな！』

と、これから今までの事を、一ト通話しますと、音丸わ俄かに莞爾付いて、

『うむ、面白れエ〳〵！　こいつわ馬鹿に面白れエ！　ぢやア八人が揃いさえすりやア、大日本帝國の爲めに、大功勞が出來るんだな。おれも功勞わ大好きで、何でも今に大きく成つたら、大仕事をしなけりや成らねエが、まアそれまでわ此の山に居て、よく身躰を鍛えて置こうと、毎日この大瀧を浴びに來て、八才の年から十二まで、丁度五年に成るんだが、初めわ身が裂けるかと思つたが、今ぢやア見なせエこの通り、背中の皮が石の樣だぜ。』

と、叩いて見せるとコツ〳〵云います。

銃太郎わそれを聞いて、いよいよ頼もしく思いましたが、やがて又思い出して、

『それぢやア君も狗張子と云う、不思議な寶を持てるだろう。』

『うむ、持てるとも〳〵、生れた時から狗張子と鉞わ、始終側を放した事ア無エんだが、おれの瀧を浴びてる間わ、いつでも山え遊びに行つて、おれの食物に成るものを、何か知らん取つて來るんだ。今に屹度兎か雉子でも、咬えて來るに違いない。』

『それやアいよ〳〵面白いな。實わ僕も持てるんだが、今途中で猿に欺されて、この谷底え墜落る途端に何處えか行つてしまつたから、先刻から心配してるんだ。』

『なアにそんなら案じる事わ無い。今におれのが歸つて來たら、そこいらを探さしてやろう。』

と、こう云つて居る中に、音丸わまた瀧壺え行つて、水を少し酌んで來まして、

『おいこの水を飲んで見ねエか、實に甘エ名水だぜ！』

『それわ有難い。先刻辨當を喰いはぐれたんで、空腹くつてたまらない處だ。』

と、云つて一口飲んで見ますと、何とも云えない味がして、頰桁も落ちそうですから、銃太郎わ感心して、

『如何もこりやア不思議な水だ。こんな甘い水わ初度だ。』

と、舌皷を打つてガブ〳〵飲みますと、音丸わまた腕を見せて、

『この水の不思議な事わ、まだそれ斗りぢやア無エんだよ。怪我をした時にこれで洗えば、直ぐに疼痛が止まつてしまうし、病氣の時にこれを飲めば、どんな大病でも直きに癒る。此間おれが崖から落ちて、この腕を折つぺしよつたが、この瀧を浴びたもんだから、今ぢやアこの通り何とも無エ美濃の養老が靈泉だの、富士の金明水が名水だツて、この筑波の大瀧にやヤ敵うもんか、おれなんぞわこの水許りで、この通り大きく成つたんだ。』

と、効能を聞いて見ますと、如何にも有難い水ですから、何か後日の役に立つだろうと、銃太郎わ持て來た吸筒を出して、それえ一杯入れて置きました。

この時彼方の懸崖の上で、ワウオウ〳〵と云う聲がしました。

兩人わ耳を引立てゝ、

『それ六が歸つて來たぞ。』

『而もたしかに二匹の聲だが……』

と、云いながら見上げる處え、間も無く岨通を急ぎ足で、此方えやつて來ますのわ、先刻はぐれた四郎に、それとまるでお揃いのが一匹。——これこそ音丸の祕藏の飼犬、筑波の六と云う狗張子です。

『おゝ六か、待つて居た〳〵。』

『おゝ四郎か、よく來た〳〵。』

云いながら傍え行つて見ますと、二匹共其の背中え、一杯に猿の死骸を負つてますから、さてわ先刻の仇敵をば、二匹で討つて來てくれたのかと、銃太郎わその頭を撫でゝ、頻りに喜んで居りました。

さて玆で銃太郎わ、筑波山の怪童子、犬瀧音丸と云う新犬士を、探しあてた事ですから、此上わ一日も早く、兼て手筈の目黒え歸つて、他の犬士と名乘り合おうと、それ斗りを樂しみに、今までの疲勞も忘れ、直ぐに音丸を連れまして、山を出る事に成りました。

其途中、又以前の懸崖の上え出ましたから、銃太郎わ音丸を見かえり、

『此處々々。さつき猿奴に一杯やられたのわ、丁度此處だつた。馬鹿々々しい！』

と、云いますと、音丸わ笑い乍ら、

『こんな谷に橋が入るもんか。見なせエ、こうすりやア譯わ無い。』

と、例の六の背中に乘つて、えイと一聲かけますと、一足飛びに飛び越してしまいました。

これを見て銃太郎も負けない氣に成り、

『どれ、それぢやア僕もやつて見よう。』

と、四郎に跨がつて一ト鞭あげますと、成る程譯も無く飛び越せましたから、こゝで二人わ連れ立つて、狗張子の頭を並べながら、程無く筑波山を出て參りました。

話變つて速吉に番平、これが又西と南に、思い〳〵の路を急ぎまして、不思議な事から一時に、二個の犬士を見付け出し、四人一組に成りまして、めで度く目黒え引揚の御話、それわ次回の御樂しみ。

一五　八王子町

こゝに又犬瀨速吉わ、三太を連れて出かけましたが、自分わ南の方の番ですが、先刻見た處でわ、大將の犬宮初麿が、東の番でありながら、東海道を南えと行つた樣子ですから、同じ方え行つても仕方が無いと、わざと道をかえて、自分わ西の方を、甲州路えと急ぎました。

まづ初めわ多摩川の河原傳いに、段々上つて參りましたが、程なく出ましたのわ、八王子の町でございます。

八王子と云う處わ、東京の近在でわ、隨分賑かな町でございます。

殊にその町の名の八王子、その八が八犬士の八に緣があつて、而も八ツの王子とわ、如何にも緣起が好うございますから、速吉わまづ此處に足を停めて、新しい犬士を探す事にしました。

其處で毎日々々、例の三太を連れて、町中をあるいて居りましたが、或日の事でございます。或町を通りかゝりますと、或家の勝手口で、『シツ〳〵、こん畜生！』と、おさんの叱の聲が聞えますから、速吉わ三太が叱られたのかと、立止つて後を見ますと、三太わ其處に音無しくして居ますから、はてなと思つて居りますと、間も無く彼方の垣根の穴から、勢好く飛び出した者があります。見ると、一匹の大きな斑猫で、大きな鯛を咬えながら、一目散に逃げて行きます。

これを見た狗張子の三太、何で默つて居りましよう、『おのれツ』とも何とも云わず、一聲『ウウウツ』と叫びながら、直ぐに追ツかけて參りました。

すると、猫も一所懸命。矢を射る樣に逃げて行きますから、三太もまるで競馬の樣に、宙を飛んで追ツかけて、忽ちの中に二匹共、影も見えない位に成りました。

其間がまるで稻妻の樣に、瞬く間の事ですから、速吉も呆れて居りましたが、これも以前わ盜賊をした位な、敏捷い男の事ですから、直ぐに又其後から、飛ぶ樣に追かけて行きました。

けれども先方わ二匹とも四本脚、此方わ二本脚の事ですから、どうして中々追付きません。とう〳〵はぐれてしまいました。

で、仕方がありませんから、今度わ頻りに口笛を鳴らしましたが、これも聞えない樣子です。

『此奴わ困つたぞ。今彼奴にはぐれちやア、折角此處まで來た甲斐が無いんだ。三太も好い加減にして置きやアいゝのに、あんまり長追をするもんだから、こんな事に成ツちやつたんだ。チヨツ困つたなア。』

と、獨語を云いながら、目的も無く町を步行き、そして會う人毎に、

『もし〳〵、只今此邊を、鯛を咬えた猫を追かけて、大きな狗張子が駈けて行きやしませんか。』

と、尋ねましたが、

『何だ狗張子が猫を追かけた。馬鹿な事を云いなさんな。狗張子を尋ねるなら、其邊の玩具屋え行くがいゝや。』

と、誰も取り合つてくれません。

其中に或る四辻え來ますと、彼方から十才斗りの兒が三四人、何か話しながら來る樣子です。速吉わこれを見て、小供わ正直なものだから、よし、これに聞いて見ようと、其側え出かけて行つて。

『おい〳〵、今此邊を、大きな狗張子が駈けてきやしなかつたか。お前達知つてるなら、いゝ兒だから教えておくんな！』

と、こう云つて聞きますと、小供達わ顔見合わせて居ましたが、
『ぢやア安ちやん許のが逃げたんだろうか。』
『なアに、今し方居たぢやアないか。』
『居たとも〳〵、診ちやん許のも一所に居た。』
と、話し合つて居るのが、他にも狗張子の居る様ですから、速くも聞き咎めた速吉。
『おい〳〵、その安ちやんだの診ちやんだのツて云うのわ、一體何處の兒だエ？』
と、聞きますと、小供の中でも一番口の達者なのが、少し前え出て、
『ぢやア君わ、まだ安ちやんや診ちやんの事を知らないんだネ。』
『うむ。知らないから教えてくんな！』
其小供わ得意に成つて、
『安ちやんてエなア織屋の坊ちやんで、眞實の名わ犬町安藏てエんだ。』
『なに犬町安藏？　あの犬町？』
『そうさ。せエから診ちやんてエなア、犬手さんてエお醫者様の兒で、犬手診一てエんだア。』
『犬手診一？』
『そうさ。で、な、兩人とも強いぜ。僕達の大將なんだ。處がネ君、兩人とも生れた時から、大きな狗張子を持てるんだ。』

『なに、大きな狗張子？　うん〳〵、それから？』
『でネ。まるで眞實の犬の通りなんだ。強いぜ、君！　横町の赤だつて、通町の斑だつて、何だつて敵やしない。……でネ、安ちやんも、診ちやんも、大層可愛がつてるんだ。だから毎日々々診ちやん許の御庭で、二匹ご角力取らしてるんだ。……今も僕達ア見て來たんだ。面白いぜ〳〵。』
と、話すのを聞きまして、速吉わ大喜悦。
『うん〳〵、有難う〳〵。ぢやアその犬手さんてエなア何處だイ？』
『其處の角を曲つて、二町斗り行つてまた左え行くと、直ぐだ。』
『そうか。有難う〳〵！』
と、今わ速吉、新犬士を探し當てた嬉しさ、三太の事わ後廻しにして、まづ小供の教えた通り、犬手と云う家え來ました。
見ると、成る程立派な結搆で、正面にわ、大きな玄關があり、それから左右にわ、高い板塀がずウつとあつて、庭も中々廣い樣子です。
すると其塀の中で、頻りに犬の吠える聲が聞え、それから又人の聲で、
『さア今度わ七の勝だぞ。』
『なアに八だ〳〵。』
『それよりやア次郎とやらせよう！』

『ぢやア次郎と大七とだぞ。』
『面白い〳〵！』
と、云うのがよく聞えますから、速吉わ塀の側え行つて、丁度好い處に明いて居る、節穴から中を覗きますと、――成る程中央の芝の上で、二匹の狗張子が咬みあつて居り、その側にわ太つた兒が、腹掛一つに成つて行司をし、又彼方の樹の下にわ、飛白の着物に麥藁帽子をかぶつたのが、威張つて腰かけて居ましたが、また其側に控えて居るのわ、思いがけない朋輩の、犬門番平に相違ありませんから、速吉わ驚いて、
『あア、門番さんだ、犬門君だ！』
と、思わず聲をかけました。

一六 四犬奇遇

けれども中でわ聞えない樣子。三人共一所懸命に成つて狗張子の角力を見て居りますから、速吉わまた聲をあげて、
『おい番平さん！　僕だよ、犬瀬だよ、速吉だよ。』
と、續け樣に呼ぼうとする時、自分の體を引く者がありますから、誰かと思つて振りかえつて見ますと、先刻猫を追かけて行つて、其儘迷兒に成つたと思つた、自分の狗張子の三太ですから、

『おゝ三太、よく歸つて來た。全體今まで何處え行つてた？』
と、聞くのに、それにわ答えず、只頻に裾を引きますから、引かれる儘に行つて見ますと、丁度高塀を廻つた處に、小さな木戸があつて、而も少し明いて居ますので、今度わ其處から首を突込んで、
『おい番平さん、おい〳〵！』
と、呼びますと、初めて氣が付いたと見えまして、番平わ此方を振向て、
『おゝ犬瀬君か、速吉さんか、不思議な處で會うぢやないか。』
『先刻から呼んでたのに……』
『そうか。ちつとも知らなかつた。まあ此方え這入りたまえ！』
『いゝかい這入つても？』
と、云う時番平わ、他の二人に向いまして、
『此の人です。今お話をした犬瀬速吉と云うのわ。矢張り犬宮樣のお邸に居る、八犬士の一人です。』
と、云いますと、腕白らしい腹掛一ツの兒わ、速吉の側えずつと來て、
『オヽ、君かい犬瀬君てエのわ。僕ア犬手診一てエんだ。今犬門君に君の話を聞いて、早く會い度いと思つてたんだ。よく君、此處が解つたねエ。』
と、云いながら嬉しそうに手を取つて、奥の方え連れて來ますと、麥藁帽子の怜悧らしい兒わ、

靜かに迎いに出て、帽子を脫ぎながら、

『君が犬瀨速吉さんですか。貴君の名わ先刻犬門さんから聞いてました。よく速く來て下ださいました。さア、此方え來てお掛けなさい！』

と、自分の今まで腰かけて居た、樹の下の席を讓りましたが、速吉わまた遠慮して、

『はい、有難う。どうも、思い掛無く貴君方に會つて、實に私わ、こんな嬉しい事わありません。實わ貴君方の御名前も、今此處え來ます途中で、町の兒に聞きましたから、早くお目に掛り度いと思いました。ですが……この番平さんが、何うして此樣な處え來てるんだか、こればつかりわ不思議です。』

と、云いますと、番平わ直ぐ引取つて、

『うん。そりやア道理だ。君の不思議がるのも無理わ無い。それぢやア一つ話そうか。——僕ア西の方が受持だから、此間から此方え來てたが、何しろ毎日方々歩行いて、足わ草臥れる、腹わ減る、仕方が無しに先刻のこと、この次郎も草臥れた樣だから、森の中で寢て居ると、唐突にガサガサツて云う音がするから、急いで眼を明いて見ると、何處から逃げて來やがつたか、一匹の泥棒猫が、大きな鯛を咬わえながら、此方え飛んで來るぢやないか。』

『猫が鯛を咬わえて行つた？』

と、吾知らず乘り出します。

『此方わ丁度腹の減つてる處だろう。而も敵手わ泥棒猫、只で盜んで來たもんだから、只で取つてもよかろうと、一寸君の眞似をして……』

『おい〳〵、そんな事ア云わなくつてもいゝぜ！』

『アヽ、失敬々々〳〵！　怒つちや困るよ。』

『まさか怒りやアしないから、早く後を話したまい！』

『それから君、僕わ直ぐに飛び起きて、突然次郎をけしかけると、次郎わワツと云いながら、泥棒猫の頸ツ玉え　厭ツて云う程かぶり付き、一ト振り振つて振り倒すと、可哀そうにその猫奴。ニヤンとも云わずに死んでしまつた。其處で僕わ出かけて行つて、其鯛を拾つて見ると、これわ何處かの御膳に付いてたと見えて、ちやんと鹽燒にしてあるから、こいつわ好い物が手に入つたと、半分わ褒美に次郎に遣り、殘餘の半分わ僕一人でムシヤ〳〵喰つたが、その甘味い事！』

『はゝア、甘い事をやつたネ。』

『すると君驚いた。唐突後から呶鳴りつけて、『こん泥棒奴！』と云う聲がした。誰だと思つて振返えると、恐い顏をした阿爺さんさ。阿爺さんわ眼を剝き出して、

『やいこん泥棒奴！　何だつて人の家の肴を盜みやがつた。』

と、叱り付けられたから、

『なに、ほんとの泥棒わあの猫です。僕わ只拾つた斗りです』

と、云つたけれども追付かない。

『なアに、そんな事云つたツて承知しねエ。』

と、とう〳〵其人に引張られて、其家え連れてかれちやつたのさ。處が、行つて見ると其の家わ、この犬町君の家なんで、阿爺さんわ犬町さん許の番頭さんさ。て、僕わ臺所口で、酷く御目玉を喰つてると、中から丁度犬町さんが出て來て、段々譯を聞いて見ると、何も僕が惡いんぢや無し、それに第一僕の側にわ、この次郎が居るもんだから、却つて大層喜んて、君も好い物を持てるねエ、その狗張子を持つてるなら、今日から僕の朋友に成りたまえつて、それでやつと勘忍してもらつて、直ぐにその犬町君と、この犬手さん許え一所に來たのさ。』

と、殘らず話して聞かせますと、速吉わ横手を拍つて、

『それわほんとに不思議だつたネ。而もその鯛を盜んだ猫わ、丁度三太が追駈けて行つた奴だよ。』

と、それから又速吉わ、先刻三太に別れてからの事を、こゝで委しく話しました。

すると又診一も安藏も、頻りに不思議がりまして、

『どうもほんとに面白い話だ。何しろ今までわ、こう云う不思議な狗張子を持つてるのわ、僕達二人斗りだと思つたのに、まだ六人もあるんだそうだが、その中の二人だと云う、犬門君や犬瀨君に、こうして一時に會う事の出來たのも、考えて見りやア、全く狗張子の紹介と云うもんだ。ねエ君。犬町君！』

『そうとも、今日わ何と云う吉日だか、こうして四人落ち合うとわ、こんなめで度い事わ無い。』

と、四人共大喜悦、頓て犬手の家の座敷え通つて、又いろ〳〵談話をし、こうして四人が揃つた以上わ、一日も早く目黑え行つて、他の四人に會おうと云うので、尚又打合せをして居ます中に、用意の御膳も出ましたから、茲で四人の犬士わ、仲好く御飯を喰べ、又四匹の狗張子にも、それ〴〵肴をやりました。

一七 合圖狼煙

さて四人の新犬士わ、やがて御飯も濟ましましたから、氣の速い犬手診一、『善わ急げと云う事がある。直ぐその目黑え行つて他の犬士に會おう』と云い出しましたが、『何しろもう晩だから、立つのわ明日の朝早くがいゝ』と、まつて、其晩わ一同はやく寢る事にしました。

で、四人わ枕を列べて、はやく寢ようと思いましたが、何うしても寢られません。まるで運動會の前の晩か、大晦日の夜の樣に、明日が樂みで〳〵、眼わ段々冴えるばかり。

一同寢られないものですから、つい又談話が初まりました。中にも犬手診一わ、隣に寢て居る速吉に向いまして、

『ねエ犬瀨君、その犬宮さんの坊ちやんと云うのわ、屹度強い兒だろうねエ。』

『そりやア強い事も強いが、第一、智慧があるから敵いませんや。何しろ私達と異つて、學問があるんですもの。』

と、云いますと、後を番平が引取て、

『そりやア智慧も智慧だが、私やアそれよりわあの方の、氣の強いのと、心の廣いのにわ、ほんとに感心してるんです。強い者にやア向つて行き、弱い者にわ慈悲をかけると云う、ほんとに豪い坊ちやんだろう。だが、自分わそう云う豪い家の兒だから、如何しても少しわ威張るだろうねエ。』

と、皆まで云わせず、速吉わ手を振つて、

『どうして〳〵、そんな事があるもんですか。その證據にやア私見たいな、盜賊上りの貧乏人でも、又あの犬柄の銃ちやんの様な、獵人の兒にだつて、ちつとも阻隔を置かないで、朋友同様にして下ださるもの、ほんとにあんな坊ちやんわ無い。』

それを聞いて安藏も診一も、頻りに感心して居りましたが、安藏わ又、

『それから犬柄さんてエなア、ほんとの獵人の兒なんですか。』

『そうです。ほんとの獵人の兒ですけども、中々〳〵しつかりした處があつて、まるで豪い人の兒の様です。それに我慢する事が強くつて、鐵砲わほんとに名人です。』

『それわそうでしようねエ。其處で其の兩人も、矢張り新犬士を探しに出たんですね。』

『そうです。ですから面白いんです。何様な新犬士が目付かつたか、それに會うのが樂しみです。』

『屹度坊ちやんも犬柄さんも、矢張り犬町さんや犬手さんの様な、立派な人を見付けたに違いない。て、八人がちやんと揃つたら、ほんとに嬉しいでしようねエ。』

暫らく默つて居た診一わ、此時又頭を擡げて、

『で、八人が揃つたら、全體何をしようと云うのだ?』

『何でも雪の精の云う通り、大日本の利益に成る、立派な功勳をしなけりやア成らないんです。』

『大日本の利益に成る、立派な功勳とわ何だろう?』

『それわまだ解りませんが、早く八犬士揃つた處で、よく相談しなけりやなりませんネ。』

『それよりやア、八犬士が揃つたら、其處でもう一度山え行つて、雪の精に聞いたらいゝだろう。』

『そう、そうすれば解る事だ。』

『なに、そんな事しないでも、日本の利益になる事つて云やア、一同早く軍人に成つて、國家の干城に成るのがいゝ。』

『いゝや、軍人斗り出來たつて仕方が無い。中にやア又商人に成つて、國を富ます事も考えなけりやア。』

『そうですとも、軍人や商人斗りでもいけないから、百姓に成つて御米を作つたり、又學者に成つて人間を怜悧にもしなければ、ほんとの國の利益とわ云えません。』

『それわ犬門さんの云う通りだが、中にやア職人も肝腎だぜ。』

『そうさ。君なんざア器用だから、その職人が丁度好い。ナニ、職人と云うとけちな樣だが、工學士だとか技師だとか云やア、職人でも立流なもんだ。』

などゝこんな事を話しあつて、思い〳〵の事を饒舌つて居る中、とう〳〵夜が明けてしまいました。

其處で四人わ、急いで飛び起きて、顏を洗つて、御飯を喰べて、各自に支度をして居りますと、又四匹の狗張子の方でも、今日こそいよ〳〵八匹の仲間が、みんな揃う事が出來ると思う故か、尾を振り立てたり、チン〳〵したりして、何れも喜び勇んで居ります。

其中に支度も出來ましたから、さアいよ〳〵出かけようと云うので、安藏わ大七、診一わ八郎、番平わ次郎、速吉わ三太と、それ〳〵自分の狗張子を引張つて、目黑の山えと急ぎました。

又四匹の狗張子わ時々わ大きく成つて、馬の代りに主人を乘せたり、又邪魔に成る時わ、小さく成つて袂の中え這入つたりして、やがて目黑の山近く來ました。

すると遙彼方の森の中から、黃色い煙がずつと昇つたと思うと、やがてズドウンと云う音が聞えますから、診一わ驚いて、

『何だ〳〵？　今のわ何だ？』

と、云いますと、先に行く速吉わ振り返つて、

『あれわ合圖の狼煙です。もう誰か歸つて居るのを、知らせる爲めの合圖です。』

『そうか。それぢやアもつと急げ〳〵！』

一八　八犬出陣

急ぎに急いで、よう〳〵山え登つて來た四人、見ると彼方の岩の上からも、初鷹わ銃太郎と一所に、此方を見おろして、頻りに手を動かしながら、『おいで〳〵』をして居りますから、先に立つた番平わ、早くも聲をかけまして、

『坊ちやんお早うございました。オヽ、犬柄さんもゝう來てたのか。』云うと銃太郎も、

『丁度今着いた處で、坊ちやんが一番駈でした。』

と、云う中に四人も、其處まで登りついて見ますと、後の方に見なれない兒が、一人わ船頭の樣な風をし、又一人わ眞赤に肥つて、まるで金太郎の樣なのが、兩人で立つて居りますから、速吉わ銃太郎に、

『おヽ、新犬士が見付かりましたネ。彼の人達わ何と云う人です？』と聞きますと、

『うん。あの右の方が坊ちやんの連れて入らしつた、三保の浦の犬嶋舵五郎君。それから此方の肥

つてるのが、筑波山の音丸と云つて、僕が犬瀧で見付けて來たんだ。又この狗張子わ、犬嶋君の方が五郎で、犬瀧さんのが六と云うんだ。』

と、云いますから、速吉わ側え行つて、一々挨拶し、それから又、自分達の連れて來た、犬町、犬手の二犬士を紹介せまして、茲でいよいよ八犬士が、殘らず揃つてしまいました。

其處で又番平わ、初鷹に向いまして、

『斯う八人が揃つた上わ、あの姥さんの云つた通り、日本の爲めの大功勳を、一同で仕なけりやならないんですが、それにわ一體何樣な事すりやア可いんだか、どうも私達にやア解りませんから、これからもう一度姥さんに會つて、この理由を聞こうぢやありませんか。』

と、云いますと、初鷹わニツコリ笑つて、

『ナニ、聞かなくつても解つてるよ。』

『えツ、聞かなくつても解つてますつて？　それぢやア坊ちやん御存じですか。』

他の者も一所に成つて、思わず膝を摺り寄せました。

すると初鷹わ、徐かに舵五郎を見返つて、

『君！　此間のを出したまえ！』

と、云いますと、舵五郎わ點頭いて、自分の懷中から、立派な箱を出して、恭しく初鷹に渡しますと、初鷹わその中から、見事な卷物を取り出し、

『さア、諸君これを見給え！』

と、云つてそれを開けました。

見ると、其の卷物にわ、今まで學校の地理の稽古でも、まだ見た事の無い嶋の圖が、立派に書いてありますから、殘りの六人わ、丁度一ダアスの目を見張つて、頻りに見詰めて居りましたが、此時始めて犬手診一、

『これわ不思議だ、この嶋わまるで狗張子の樣だぜ。』

と、云いますと、音丸も一所に成つて、

『ほんとにおらの六見たいだ。而も此處に鈴まで付いてらア。全體これわ何てエ處です？』

と、云いますから、初鷹わ座を進めて、

『これわ日本から南の方え、一萬二千三百里行くと在るんだ。て、その形が狗張子に似てるから、狗兒島と云うんだが、其處にわ金も出るし銀も出るし、其他動物でも植物でも、何でも無いものわ無いと云う、世界一の好い處なんだが、只昔からこの島にわ、狂犬が澤山棲んでるので、誰も其處え行く事が出來ないんだ。其處で今度わ僕達が、八人顏の揃つた處で、一番其處え押渡つて、その狂犬を退治して、首尾好く日本の領分にすれば、それこそほんとに大功勳だ。如何だい、こんな面白い事わあるまい。』

と、由來を話して聞かせますと、六人わ手を拍つて喜んで、

『成る程それわ大功勳です。』
『それぢやア直ぐに押掛けましよう。』
『高の知れた狂犬なんぞ。』
『この音丸が撚り潰してやるワ。』
『ナニこの銃太郎が鐵砲で、片端から撃ち殺してやります。』
と、各自に勇み喜んで居りますと、安藏わ又不思議がつて、
『しかしこう云う好い地圖が、如何して坊ちやんの御手に入りました?』
と、聞きますから、今度わ舵五郎が引請けて、
『それわこう云う譯なのです。一體全體この地圖わ、三保の浦の龍神樣の、寶物に成つて居ましたのを、犬宮さんの狗張子の、太郎が獨りで忍び込んで、巧く盜んで來たのです。』
と、これから、三保の浦の祭禮の時に、初鷹が漁師と喧嘩した事から、濱邊で自分が初鷹に、初めて會つた話をば、委しく話して聞かせますと、安藏わ頻りに感心して、
『それわ實に不思議でしたねエ。して見るとこの地圖も、全くその龍神樣から、私達に授かつたも同然です。それでわいよ〳〵八人が、其狗兒島え押し渡つて、その國を乘取らなけりやア成りません。ですが、その間が一萬里の餘もあつちやア、中々急にわ行かれませんが、それわ如何したもんでしよう?』

と、云い出すと、番平わ引取つて、
『それわこの犬島君に頼んで、大きな船を拵えて貰いましよう。それに犬賴さんも器用だから、一所に手傳つて拵えりやア、譯も無く出來るでしよう。』
と、皆まで云わない中に、音丸わ笑い出し、
『ハ、、、そりやア犬門さんにも似合わない。馬鹿な事と云つたもんだ。』
と、云いますから、氣早な診一わ口を尖がらして、
『ナニ、馬鹿な事だつて? 船を拵えるのが何故馬鹿だ?』
と、少し腹を立てました。けれども音丸わ落付いて、
『そうさ。一同が各自に好い船を持つてるのに、それを使わないでからに、他に船を拵えようなんて、馬鹿な事を云うからおかしい。』
『ナニ、各自に船を持つて居ると? そりやア何樣な船なんです?』
『一同が持つてる狗張子さ。あんな重寶な者わ無い。おいらなんざア山に居て、舟も車も知らねエが、その代りにやアこの狗張子で、川も渡りやア谷も飛ぶんだ。こんな重寶な奴わありやしねエ、だから今度の狗兒島だつて、この狗張子に乘つてきア、一萬里や二萬里の海、一またぎに行つてしまうワ。それを何故使わねエんだ。』
と、云いますと、初鷹わ膝を拍つて、

『そうだ〳〵。此間も三保の浦で、海を泳いだ事があつた。神通自在のこの狗張子を、忘れて居たのわ馬鹿だつた、それぢやアそれに極めようが、一體何處から出かけよう、矢張犬の字の付く様な、好い處が無いか知ら？』

と、今度わ發程所を考えますと、舵五郎わ思い出した様に、

『それにわ好い處があります。あの銚子の犬吠が崎！　彼處にわ燈臺もあつて、丁度岬に成つてますから、彼處から出るとようござんす。』

『うん、それがいゝ〳〵。』

と、茲にいよ〳〵極まりまして、八人わ直ぐ其場から、各自に狗張子に乘りまして、下總の國わ銚子口、犬吠が崎えと急ぎました。

大團圓　大狗子國

下總の國わ銚子口の、犬吠が崎の燈臺の下から、海え乘り出した八犬士の面々、各自に狗張子に乘りまして、眞先えわ日の丸の國旗に、犬に緣のある金の鈴の付いたのを押し立てゝ、山の様に打つて來る浪の上を、サツ〳〵と水煙を立てゝ、進んで行くその勇ましさ。何に譬えようもありません。

元より神通自在の狗張子、一萬里斗りと云うものわ、瞬く中に泳いで行きましたが、其中に遙か南の方に、雲か山かと思われる、黑いものが眞先に進んだ速吉わ、それを見ると手を揚げて、

『來た〳〵、張狗島え來たぞ。』

と、大きな聲で云いますから、他の七人も、みんな小手をかざしまして、彼方をキツと見渡しますと、成る程島らしいものが見えます。

其中に段々近く成つて來ましたが、何思つたか八匹の狗張子が、八匹共聲を揃えて、ワウオウ〳〵と、恐ろしく吠え出しました。すると又島の方でも、同じ様にワウオウ〳〵……。一體軍艦でも汽車でも、港や停車場に近く成りますと、もう今に着くと云う合圖に、ボウ〳〵とか、ピユウ〳〵とか、汽笛を吹いて知らせるものです。

ですからこの張狗子も、狗兒島に來た合圖に、一時に吠え出して、それが又島に響いて、谺の様に聞えるのかと思いましたが、それにしてわ吠え方が、例に無く劇しうございますから、どうもこれにわ理由があるだろうと、又目を見張つて島の方を見ますと、案の定その島の、丁度此方え出て居る岩の上に、眞黑に成つて動いて居るもの、——それわみんな狂犬です！

『やい、居るぞ〳〵。狂犬が居るぞ。』

『ナニ、狂犬ですつて……オ、〳〵、もう出て來ましたよ。』

『さアみんな油斷しちやいけないぜ。』

と、初鷹が號令をかけますと、

『よし、大丈夫！　今に殘らず退治てやります。』

と、銃太郎が鐵砲を取り直せば、音丸わ鐵挺棒を振りあげ、其の他の犬士達も、思い〳〵に武器に手を掛けて、今にも島に着いたらば、一番に躍り込んで行つて、あの狂犬共を、片端から退治てくれようと、勢込んで進んで行きました。

間も無く狗張子わ、島の側まで泳ぎ着きましたが、見ると其邊わ一面に、屏風を立てた様な岩崖に成つて、登ろうにも足場がありません。而もその岩崖の上から、何千匹か知れない狂犬が、銀の様な眼を剝て、火の様な口を開いて、オウ〳〵ツと吠えて居ります。

『全體何處から上るんだ？　何處か無いか見ろ〳〵！』

と、八犬士わ八方に目を配つて、頻りに足場を探しましたが、どうも好い所がありません。

此時又音丸わ、大きな聲を張りあげて、

『駄目だ〳〵、探したつて駄目だ。それよりやア一足飛びに、飛び上がれ！』

と、云う中にもう六の尻を、平手でビシリと、打ちますと、其彈みに狗張子の六わ、音丸を背に負つた儘、浪を一蹴り蹴つたと思うと、屏風の様な岩崖の下から、ヒラリと飛び上つてしまいました。

これを見ると他の犬士も、それ後れるな、續け〳〵！　と、各自に狗張子に鞭をくれて、ヒラリ〳〵ヒラリ〳〵と、譯も無くその岩崖の上え、飛び上つて來ましたから、上に居た狂犬共わ、「おのれッ」とも何とも云わず、只ワウオウ〳〵と、四方から飛びかゝり、八方から喰い掛つて、見る〳〵中に八犬士わ、數千匹の狂犬の中に、おツ取り卷かれてしまいました。

すると不思議です。今迄でわ八方に分れて居た、八匹の狗張子わ、太郎二郎、三太、四郎、五郎も六も、大七も八郎も、八匹とも一所に堅まつてワン〳〵ワン〳〵ワン〳〵と云いながら、クル〳〵クル〳〵廻つて居りましたが、其中に三聲高く、ワン〳〵〳〵と吠えるが否、八匹の狗張子わ、其儘一匹の大狗張子に成つて、雲の樣に群がつて來る、狂犬の中え飛び込んで、當るを幸い片端から、牙に掛けてわ咬み倒し、足に掛けてわ蹈み蹂り、縱橫無盡に働きましたから、流石の狂犬も見る〳〵中に、一匹も殘らず殺されてしまつて、瞬く中に眼の前にわ、狂犬の山を築いてしまいました。

これを見て居た八犬士わ、思わず手を拍つて、大狗張子の動作に、感心して居りましたが、やがて狂犬わ、殘らず死んでしまいましたから。其側えかけて行つて、

『オイ太郎！』　『コレ二郎！』

『四郎〳〵！』　『五郎や〳〵！』

『大七！』　『八郎！』

と、各自に自分の狗張子の名を云つて、八方から呼びかけましたが、大狗張子わ何方えも寄つて來ず、只さも嬉しそうに尾を振りながら、初鷹から順々に、八犬士の前で御辭儀をした揚句、キツ

『ヤイ三太！』

『六ヤイ〳〵！』

と天を見上げまして、ウウ……ワンと、一聲吠えますと、それを合圖に天からわ、俄に大雪が降つて來ましたが、大狗張子わこの雪の中を、悠々として天え昇つてしまいました。

この眼前の不思議にわ、流石の八犬士も、只呆れに呆れて、ぼんやり天を見上げて居りましたが、其中に狗張子の姿も、まるで見えなく成つて、雪も奇麗に霽つてしまいましたから、初めて夢の覺めた樣な心地で、互いに顏を見合わせながら、

『全體これわ何の事だ？』

と、まづ診一から云い出しますと、初鷹わ膝を拍つて、

『いや、それで解つた。此間も雪の精に聞いたら、一體僕達八犬士わ狗兒島を乘取つて、大日本帝國の爲めに、大功勳を立てさえすれば、それで役目が濟んだ樣なものだ。それだからそれまでわ、あの狗張子が味方に成つて、僕等の事業を助けたんだが、もう此通り狂犬も退治て、狗兒島を乘取つてしまえば、狗張子の用わ無いから、それでまた姥さんの、雪の精が御迎いに來たんだろう。』

と、云いますと、

『なるほど、これわそれに相違ありません。』

と、番平も感心して居りましたが、安藏わ又膝を進ませて、

『今も坊ちやんの云う通り、この狗兒島を乘取つて、大功勳を立てさえすりやア、それで狗張子の御役目わ、まア濟んだと云うもんです。けれども私達の御役目わ、只乘取つたと云う斗りで、それで濟んだとわ云えません。どうしてまだこれからわ、この島をよく治めて、そしてわが大日本の、御役に立つ樣にしなければ、ほんとの功勳とわ云えないでしょう。』

と、云いますと、初鷹も點頭いて、

『うん。そうとも〳〵。ほんとに犬町君の云う通りだ。只取つた斗りぢや仕樣がない。これからよくこの島を治めて、大日本の屬國にして、國の利益にしなけりやならない。それにわこれから八人が、各自に手配をして、この狗兒島の政治を執ろう。』

『そうです。でわ早く手配をしましょう。』

『だが、その前に、まづ一ト通りこの島を、よく見て置こうぢやありませんか。』

『そうだ。何しろ僕達わ今來た斗りで、まだ樣子が解らないから、幸い此間の地圖もある、でわ之を持つて見物に出かけよう。』

『それがいゝ、〳〵。』

と、これから八犬士わ打揃つて、島中を見物に出かけました。

處が、兼ねて舵五郎の談話に聞いた通り、山にわ立派な木が、森々と茂つて居り、野にわ見事な米が、一面に出來て居り、其他彼方にわ、桃だの林檎だの梨だの柿だの、好きな果物が鈴形に實つて居るかと思えば、此方にわ、馬でも牛でも鷄でも鳩でも、どんな獸類でも居ないものわ無く、又少し土地る掘ると、直ぐに金や銀や銅や鐵が、沸く樣に出て來ますし、又川を覗いて見ると、鯉で

も鮒でも鮎でも、手で掬える様に居ると云う、それわ〳〵結構な島ですから、八犬士わ大喜悦、こう云う好い島が手に這入れば、日本わ直ぐ大富豪に成つて、英吉利亞米利加にも負けない様な強い國に成つてしまうと、勇み立つて居りました。

すると彼方の山奥の方で、何と無くガヤ〳〵と、人の饒舌る様な聲が聞えました。

はてな、この島にわ狂犬が居るので、人間わ住む事が出來ない筈だが、さてわまた奥の方にわ、山賊でも棲んで居るのか、それとも亦妖怪かと、一同わ少しも油斷せず、尚奥の方え分け登つて見ますと、やがて彼方から人間が五六十人、ゾロ〳〵ゾロ〳〵やつて來ました。

見ると、山賊妖怪と思いの外、これわまた書本で見た、鬼界が島の俊寛の様な、一同骨と皮斗りで、餓鬼同然の島人が、杖にすがつたり手を曳かれたりして、やつとの事で側え來ましたが、八犬士の貌を見ると、平地え兩手を突いて、

『はゝア……』

と、平伏してしまいました。

『全體貴様達わ何者だ?』

と、こう云つて初麿が聞きますと、先に出て居た島人わ、少し頭を擡げまして、

『へい〳〵、私共わこの狗兒島の人民でございますが、御存じの通り此島にわ、狂犬が澤山居りまして、私共の仲間の者を、喰い盡そうと致しますから、それでもう私共わ、山の奥に小さく成つて、此通り隱れて居たのでございます。處が丁度昨晩の事、私共の居ります處え、一匹の大犬が參りましたから、アレ、又狂犬が來たと、一同逃げ出そうと致しますと、其の犬わ尾を振つて、イヤお前さん達わ決して逃げるにわ及ばない。何を隱そう私わ、この狗兒島の島の神だが、今度大日本から、八犬士と云う豪い御方を、八人御連れ申して來て今迄の狂犬を、殘らず退治てしまつたから、もう決して案じる事わない。それよりか一日も早く、八犬士の方に御目に掛つて、この狗兒島を昔時の様な、好い島にして貰うがよいと、云うかと思うと、其儘消えておしまいなさいました。其處で今日わ、その犬神様の御告によつて、この通り一同が、打ち揃つて出ましたのでございます。何卒皆様、私共を不憫と思召ますならば、この儘此島に御留まり下ださいまして、島を御治め下ださいまし。』

と、こう云つて賴みましたので、初麿も喜びまして、狗兒島を治める事にしました。

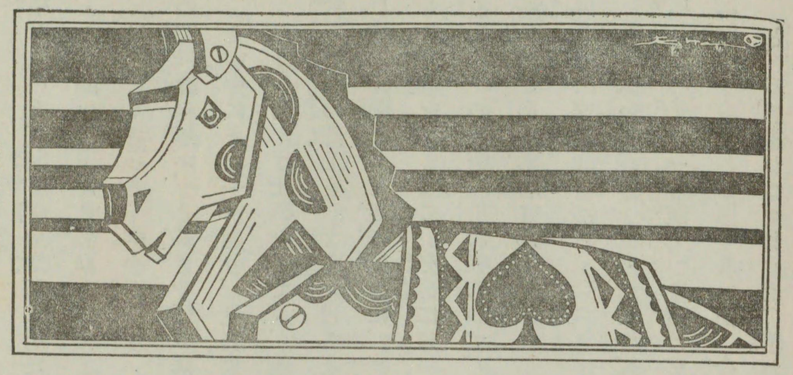
で、まづ此島を大狗子國と名付け、又東の方の、丁度昨晩に當る處に、狗眠府と云う都府を立てまして、其處にちやんと役所を立て、それから八人が相談の上、總理大臣にわ威光のある初麿が成り、犬町安藏わ、少年の割に分別があると云うので、是が内務大臣。犬門番平わ、幼少い時分から犬宮家に奉公して、算盤が達者な處から、是が大藏大臣。犬瀨速吉わ何かにつけて器用な質だから、是が遞信大臣。犬島舵五郎わ船頭の兒ですから、直ぐに海軍大臣。又陸軍大臣にわ、力の強い犬灑音

丸、獵師の兒の犬柄銃太郎わ、農商務大臣に成り、それから又犬手診一わ、醫者の兒で學問があるから、文部大臣が丁度好いと、茲で役割が極まりまして、其日から島の政治を執りましたが、元より何れも怜悧な兒で、殊にわ此島の神だと云う、神通自在の狗張子が、今わ目にこそ見えませんが、蔭からよく守つて居りますので、島わます〳〵穩かに、國わいよ〳〵榮えました。

さて一年と經ち五年と經ち、やがて滿十年に成りました時、この八犬士わ、彼の大狗張子の動作を、永く島人の記念に殘す樣にと、狗眼府の中央に、大きな狗張子の記念碑を建て、その御祭を營みました處、其時わもう日本の國とも、交通が出來て居りましたので、眞個の總理大臣を始め、その他海陸軍の大將も集り、世界全國を驚かす程な、大した賑いでございました。

お伽太閤記

一　猿の迷兒と光物



猿の迷兒と光物

今からおよそ八百年許り前の事だ。方外道わ音木の國、根無郡葉梨村と云う所に、話助と云う百姓が居た。女房のお伽と只二人で、細くも煙を立てゝ居たが、根が大の正直者、家こそ至つて貧乏なれ、夢にも曲つたことわせず、正直一圖に稼いで居るので、家内わ至つて穏かだが、何う云うものか子種が無く、話助わ取年の七々四十九、お伽も六々三十六に成るのに、まだ可愛いのが一人も出來ない。

夫婦わこれを苦に病んで、何うかして子供が欲しい、後嗣が出

來したいと、朝夕神を念じて居たが、神々も意地が悪いのか、それともストライキがかぶれたのか、とんと聞いて下ださらぬと見えて、未だにその御利益を見せない。

けれどもさら〳〵神を恨まず、これも所謂因緣づくと、諦らめてもさて諦らめられぬのわ、二人の間に鍵の無い、心細さや便り無さ！　兎角淋しい月日を送つて居た。

その中にまた一ト廻り、世わ來復の春となつた。

正月と云えば仕事をすてゝ、雜煮を祝うやら、屠蘇を酌むやら、世間わ樂しく賑う中に、話助わ貧乏百姓の悲しさ、元日だけこそ骨を休めたれ、二日からわもう鍬を肩げて、野良に働く甲斐甲斐しさ。お伽わまた留守仕事に、麥をつくやら、糸を繰るやら、するとその三日の事だ。話助わいつもの仕事をしまつて、夕方に只一人、村はずれの畷道を、我家えと急いで來ると、やがて、只ある並木の松の、梢の上に聲あつて、自分の名を呼ぶ者がある。

『話助さん、話助さん！』

『何だイ？』

と、云いながら、立ち止まつて振あおぐと、思いがけない猿が一匹、而も頭にわ金の烏帽子、身にわ鹿の子の『袖無し』を着けて、スル〳〵と幹を辷りおりたが、間も無く話助の前に立つた。

『何だ、お前わ猿ぢやないか。今呼んだのわお前なのか？』

と、不思議がつて聞けば、猿わ頭をうなづかせて、

『如何にも呼んだのわ私ですよ。』

『シテ何の用があるのだ？』

『用と云うのわ他でもありません。實わ私わ猿曳の太夫てす。前の村で犬に威されて、とう〳〵飼主とはぐれてしまい、やつと此所まで逃げて來たんですが、何しろ朝から食物にあり付かないんで、腹が減つて、腹が減つて「肝腎の舞わさておき、ろくにデングリ返しも打てない位です。付てわ話助さん！　貴君わ大の正直者で、また情深いと聞いて居ましたが、なんと私を此所からおぶつて、お家え連れて行つたらば、何でもいゝから甘しい物を、澤山食べさせて下ださいな！』

『何の事かと思つたら、そんならほんのお安い御用だ。よしよし、それぢやア此所え來な！』

と、少しかゞんで背を向けると、元より猿わ心得て居るから、ヒラリとその肩に取りついた。

『よしか、しつかりつかまつて居なよ！』

『大丈夫ですとも……私アおぶさるのわ馴れてますから。』

『なるほどお前わ太夫さんだつたな。所でお前わ何と云う名だネ？』

『太夫の時わ日の出太夫と云うんですが、ふだんわ日出吉、日出吉ツて呼ばれてます。』

『日出吉わ好い名だなア……所でお前の飼主わ？』

『飼主の名わ知りません。いつも旦那旦那ツて云つてますから。』

『イヤ、その旦那が今頃わ、さぞ探して居るだろう。』

『それわそうかも知れませんが、何しろあんまり好い旦那ぢや無いんで。私にばつかり働かして、自分わお酒ばかし飲んでるんですから、……却つて見付からない方がいゝんです。』

『でも今まで世話に成つたんだから、そんな不實な事を云うもんぢやない。』

『なアにお前さん、私のおかげでお酒も飲めれば、御飯も食べられたんですから、却つて私が世話をしてやつた様なもんです。』

『なるほどそう云やアその通りだナ。』

こんな話をして居る中に、話助わ日の出太夫をおぶつて、自分の家え歸つて來た。

家でわお伽が、先刻から御飯の支度をして、話助の歸りを待つて居たが、見るとまるで猿曳の様に、背に太夫を負つて居るから、その譯を聞いて見ると、今しがた途中の畷で、迷兒に成つて居る所を、可哀そうだから連れて來たと云う。お伽も元より情深い質で、

『それわほんとに善い事をしましたネ、どれ〳〵、可愛らしいお猿さんだこと！』

と、云いながら抱きおろせば、猿わお伽の前え來て、

『小母さん、何分よろしく御願申します。』

と、行儀よく辭儀をする。

『オ、〳〵、よく出來ました、出來ました。ほんとにこれわ可愛い猿だ。』

『だから早くおまんまをやつてくれ！』

『やりますとも、やりますとも、こんなお客樣があると知つたら、ころ柿でも取つておけばよかつた。』

と、これから二人わあつくこの猿をもてなして、其晩わ寢かしたが、夜が明けるともう猿わ、十年も前から飼われた樣に、よく話助夫婦に懷けば、夫婦もまたこの猿を、まるで自分達の子の樣に思つて、可愛がつて育てはじめた。それに眞の飼主わ、何うしたものかついに取り戻しに來ない。

その中に二月ほど經つた。ある日またお伽わ、山一つ越した隣村え、用事があつて出かけたが、ついそれが手前取つて、歸途わトップリ日が暮れてしまつた。

女一人で夜道を行くのわ、何しろ不用心だからと云うので、出先から一人の男がついて、暗い山路を送つて來たのわ、夜も今の九時頃であつたろう。

木わ森々〳〵と生い茂つて、晝でさえ暗い山路。而も夜わ眞の暗で、その物凄さわ一ト通で無い。送りの男わ提灯を持つて、スタ〳〵先えやつて來たが、やがて岨道を一トまわりまわつて、だら〳〵坂え掛ろうとすると、何思つたかキヤツと云つて、提灯を其所え投り出すがはやいか、一目散に駈け出した。

不意の事だから驚いて、お伽わ其所に立止つたが、見ると彼方の森の中から、ピカリと怪しい光がさして居る。

『オ、光物！』

と、思わず身の毛を立てたが、然し氣丈な女だから、今更逃げも隠れもしない。瞳を定めてジッと見ると、その光物わ動き出す。而もだんだん近くなる。お伽も氣味悪く思わないでわ無いが、心に神を念じながら、此方からも少し進みよつて見ると、その光物から聲がして、

『お伽！　抱いてくれ！　お伽！　抱いてくれ！』

と、云う。

光物が抱いてくれ？　抱いたら總身焦げずにわ居まい。とわ思つたが此時わ、不思議にまた勇氣が出て、我にもあらず兩手をひろげると、その時はやく光物わ、矢を射る様に飛び寄つて、ヒシとお伽の胸に取りついた。

が、その身わ焦げもせねば、また熱いとも感じない。

まぶしさに一時閉ぢた目を、再びあけてよく見ると、こわ如何に自分の懐にわ、世にも可愛らしい男の子が、じつと抱かれて居るでわ無いか。

二　光丸誕生と日出吉の正體

むかし支那のある皇后わ、夏の暑さに堪えかねて、常に鐵の柱を抱えて居たら、遂に鐵の丸を産んだと云う。かの干將、莫邪と云う、名高い劍わこの鐵丸から出來たので、今だに殘つて居る話だが、それと趣わ又變つて、葉梨村の土百姓、話助の女房お伽わ、ある夜不思議な光物に、森の中で抱き付かれたと思うと、何時の間にかその光物が、玉の様な男の子に成つて、自分の乳房に取付いて居る。

常の百姓の女なら、氣味悪さにその赤兒を、路傍に投げすてて逃もしたろう。然し此方わ男まさりのお伽、殊にわ常から子供が一人、欲しい〳〵と思つて居た所だから、何でこれを仇にしよう！

『オヽ可愛い、この子わまア、何時何所から湧いたんだろう？。……イヤ〳〵、これわ湧いたんでわ無い、平生信心する山王様が、私達のお願を御聞きに成つて、お授け下だすつたに相違無い。ヤレ有難い、辱ない！』

と、片手にわ子を抱きながら、片手で拜んでお禮を述べ、此上わ早く歸つて、夫にも喜ばせようと、そのまゝその子を懐中に入れて、お伽わ家えと急いで歸つた。

するともう門口にわ、例の日出吉猿が出て居て、

『おかみさん、お歸んなさい！』

と、云いながら兩手をさげて、直ぐまた奥え入ると、今度わ話助の袂を引いて、それにも迎いに出ろと促がす。

話助わお伽の歸りの遲いのを、先刻から案じて居た所だから、急いで門口まで出むかえながら、

『何を今頃までして居たんだ？』

『オ、話助さん！　不思議な事があつたんですよ、然しまア喜んでおくんなさい！』

と、云いながら懐中をあけて、例の赤兒を出そうとすると、こわ如何に？　たしかに先刻乳を飲ませて、たしかに今まで抱いて居た筈の子が、何時の間にか姿も見えない。

『オヤ變だ、何うしたろう？　……途中で逃げたか、落したか？』

と、お伽わ眼を圓くして騒ぐが、話助にわ一向合點行かず。

『何をお前まご〳〵してるんだ？』

『いゝえ、先刻森の中で、可愛い子を一人授かつたんです。しかもそれが光物で……』

『ナニ、光物？　……光物なら消たなア……當然た……そんな他愛も無い事を云わないで、はやく此方え入つたがいゝぢや無いか。』

『でも、たしかに此所まで抱いて來たのに……』

と、まだ未練で探して居る。

『まだそんな事云つてるのか？　そりやア大方狐にでも、つまゝれたに相違無いぜ。……サア〳〵早く寢ろ〳〵！』

と、無理に手を取つて内に入れるので、仕方が無しに入りわ入つたが、お伽わ如何にしても腑に落ちず、頻りに首を傾けながら、其夜わそのまゝ寢てしまつた。

所が丁度その夜から、身が重くなり初めて、次第〳〵に腹がふくれ、其から丁度十月目の、而も次の年の正月元日、初日出が東の山から、漸く登りかけた時、俄かに虫がかぶつて來て、やがて產み落としたのわ、世にも可愛い男の子であつた。

而もその男の子わ、いつぞや森の中で光物に會つて、それから自分の懐中に抱いた、あの赤兒に瓜二つと云うより、あれが又候出て來た様なので、お伽わ今更云うまでも無く、話助の喜悦一方ならず、

『ヤレ有難い、嬉しい！』

と、家の中を躍りまわる仕末。

するとまた近所の者わ、その赤兒の產聲の、如何にも高々と響いたのに、驚いて家を出て見るとこの語助の家の棟から、金色の光がキラ〳〵と指して、さながら日でも昇る様な景色に、皆只事でわあるまいと、先を爭つて見舞に來たが、中にわ玉の様な男の子が、今產まれた斗りと聞いて、何れも顔を見合わせ、

『この元日に男の子とわ、何と云うめで度い事ぢや。』

『しかもあの產聲の高さ、また家の棟の光物、こんな吉兆わ又とあるまい。』

と、口々に云い囃す。

さて產湯も無事に濟ますと、話助わすぐに衣服を着かえて、鎭守の日吉大明神え、お禮詣に出かけたが、その途々も考えれば、お伽が光物を抱いたと云う事も、全く譯のありそうな事。さてわい

よ〳〵神様が、お授け下だすつたに相違無いと、そこでこの男の子の名も、あの光物にちなんで、光丸とつける事にして、蝶よ花よと育てたほどに、光丸も至つて健かに、やがて七才の春を迎えた。

その間も例の日出吉わ、まるで人間の小僧の通り、光丸の相手をしてわ、よく守をして居るので、光丸もまたこの日出吉を、無二の友達とよく懐いて、話助やお伽が野良仕事に、家を明ける事があつても、二人でわ無い一人と一匹わ、仲よく家で遊びくらして、少しも不自由な事わ無かつた。

殊にこの光丸わ、全體誰に似たのやら、生れ付いて利發な上に、力も強く、氣わ荒く、やゝもすれば表え出て、近所の子供等と遊ぶのに、軀こそ人より小さけれ、度胸自づから据わつて、物に動ぜず、事に怯ぢず、何時も他の子供を壓して、自から餓鬼大將になり濟ます。

ある日の事で光丸わ、例の通り猿の日出吉を連れて、鎭守の森え遊びに出かけた。此所わ此村の腕白共が、戰爭や鬼ごつこに、持つて來いと云う舞臺。今日も朝から村の子が、五六人打ちよつて、はや餘念なく遊んで居たが、光丸の姿を見ると、何思つたか目引き袖引き、何やらヒソ〳〵と耳語き合いながら、やがて何處えか隱れてしまつた。

おかしな事をする奴等だ。常ならば自分が出ると、皆前え來て頭をさげるのに、今日に限つて何故逃げるのかと、光丸わ不思議に思いなから、

『オイ〳〵、何も隱れなくつてもいゝぢや無いか。皆出て來てお遊びよ、お遊びよ！』

と、云えば云うほど村の子達わ、小さくなつて出て來ない。

するとついて來た日出吉わ、そつと光丸の袖を引いて、

『モシ〳〵、坊ちやん！　彼奴等にやアかまわずに、此方え行きましよう。〳〵！』

と、云いながら連て行つたのわ、社の後の小高い山だ。

『何だイ、日出吉！　こんな所え來て何するんだイ？』

日出吉わ四邊を見まわして、やがて前え來て立つたと思うと、いつの間にかその姿わ、頭に烏帽子、身に狩衣、まるでお祭の時に出る、山車の上の猿の通りだ。

光丸わ驚いて、

『ヤ、お前わ……何時の間に？』

日出吉の威儀を正し、

『オ、その驚きわ道理たが、もはやお前も今年わ七才、何時まで傳の要る事もあるまい。今日限りに日出吉わ、お前の許を離れるが、よしその身わ離れても、その一生の終るまでわ、必ず加護して居る程に、我が無き後わ玩具函の、あのくゝり猿を我と思つて、隨分大切にするがよい。おさらば〳〵光丸！　いよ〳〵光れや光丸！』

と、云つたかと思うと見る〳〵中に、口から金色の氣を吐いて、光丸にハツと吐きかけ、そのまゝ高く雲に乘つて、社殿の方えと飛んで行つた。

呆氣に取られた光丸わ、しばらく無言で社殿の方を、デツと睨んで立つて居た。

所えバラ〳〵と以前の子供等、

『さア遊ぼう！』

と、右左から寄つて來た。何故また先刻わ隱れて居て、今に成つたら出て來たのだろう？

三　光丸の放逐と橋上の大鬼

先にわ何がけむたいのか、誰も寄り付かなかつたのに、急にまた側え來て、

『遊ぼう〳〵！』

と、促がすので、光丸わ其方を見かえりながら、

『皆、何をしてたんだ？　何だつて先刻わ隱れてたんだ？』

と、聞くと、中の一人が答えるにわ、

『だつてあの日出吉猿が、今日わ何だか恐かなくつて、側え行くと食い付かれそうだから、みんな逃げて居たんだよ。よく光ちやんわ何ともなくツて、一所に歩いて居られたねエ。』

と、云う。光丸わニツコリ笑つて、

『何が恐い事があるもんか。だがあの猿わ、只の猿ぢやア無かつたんだぜ、今お前達も見てたろうが、山王樣のお使で、身體中から御光を出して、雲に乘つて飛んでつてしまつたア。』

『ナニ、御光を出して飛んでつた？　ちつともあたい達わ知らないよ。ねエ、誰も見なかつたねエ。』

と、他の者わ一向に氣が付かなかつた樣子だ。

光丸わ一層不思議に思つたが、何しろこの身わ離れても、一生加護をしてくれると云うので、頼もしく思つたから、元氣わ日頃に十倍して、

『何でもいゝや。今日ツから日出吉わ居ないから、みんながおれのお友達だよ。さアいつもの戰爭をしよう。』

と、棒切をもつて先に立ち、皆を指揮して追いまわす樣子が、何でも自分が大將になつた樣な氣だ。

その氣に呑まれて他の者わ、大方その云いなり次第になるが、中にわ少し年長の、身丈の伸びて居る者わ、小さい光丸に威張られるのがいやさに、其云う事を聞くまいとすると、光丸わ日を怒らせて、

『何だ此奴！　生意氣な眞似すると承知しないぞ。』

と、棒切をもつてビシ〳〵食わす。

それを怒つて手向いをすれば、いきなり手を引攫んで手を捻じあげたり、足柄かけて投げ倒したり、さん〴〵な目に會わせるので、果わ皆震え上つて、仕方無しに云う事を聞く。

こんな風で光丸わ、お傳の日出吉が居なくなつてから、却つて一層氣が荒くなつてから、やゝともす

ると友達を、打つたり叩いたり、酷い目に會わすので、遂にわ近所の子供と云う子供わ、毎日生傷の斷えた事なく、其親達わまたそれを怒つて、交る〳〵話助の所え、尻を待ち込んで來る騒ぎに、話助夫婦も今わ持て餘して、

『コレ光丸や！　お前もお友達と遊ぶなら、何故仲よく遊ばないんだ。あんなに他人樣のお子をつかまえて、怪我なんぞさせて濟むとお思いか。ちつと大人しくしてわ何うだな！。』

と、云つてもなか〳〵聞けばこそ。

『なアに、ありやアみんなが弱いんだよ。何も酷い目に會わす氣ぢやないんだが、みんなが勝手に怪我をするんだよ。』

と、一向濟ました顏で居る。

近所の親達わ親達で、

『ほんとに困つた腕白小僧だ。だがあんな者と遊ばすから、自家の子が怪我をするんだから、いつそ誰も交際わせない樣にしよう。』

と、各自子供に云い含めて、光丸の顏が見えると、直ぐ家え隱れる樣にさせた。

すると光丸わ、その家の前に立つて、

『コリヤ、大將樣のお通りだのに、何故お出迎しないんだ。はやく來てお供をしろ！　來ないと踏み込んで叩つ殺すぞ。』

と、威かす。

その聲にまた驚いて、濕々ながら出て行くと、その子を家來の樣に連れて、また他の家えと押しかける。

こうして子供をかり集めて、直ぐまた例の戰爭をして、強い者わ強いて捻じ倒し、弱い者わ弱いで踏み付けるから、又しても〳〵、泣いて歸らない子わ無いと云う仕末。これにわ同じ村中の者わ、誰一人苦情を云わない者わ無い。

それをまた話助夫婦わ、毎日聞かされる心苦しさ！　ほんとに厄介な子が出來たものだ。これを思うとあの光丸わ、山王樣の申し子所か、やつぱり森の中の魔物か何かで、假りに人の腹え宿つたんぢやあるまいか。そう云えば日出吉の、急に行方の知れなくなつたのも、魔物の正體を見屆けてそれで怖くて逃げたのかも知れない。何にしてもあんな者を、永く家に置いて居てわ、後に何をされるか知れないから、今の中に追い出してしまおうと、夫婦わとう〳〵相談をして、ある日光丸に向い、

『お前もあれほど云つて聞かすのに、親の云う事を聞かないで、ます〳〵亂暴をする樣でわ、村の人達に對しても、家に置く譯にわ行かないから、可哀そうだが今日限り、何所えでも勝手に行つておくれ！』

と、云つた。所が光丸わ驚きもせず、

『そうですか。それぢやア私わ出て行きましよう。』

と、平氣で家を出てしまつた。

出たがさて行く所が無い。行く所わ無いが、またそれを苦にもしない。光丸わ平氣で彼方此方あるいて、その日も漸く暮れかゝる頃、來かゝつたのわ大きな橋の袂だ。

見るとその袂に、菰が一枚落ちて居る。光丸わ進みよつて、

『ウン、こゝに好い物がある。先刻から歩るいて草臥れた所だから、こゝで少し休んで行こうや。』

と、云いながら其所え腰をおろしたが、坐るともう立つのがいやになり、果わコロリと横になつて、其儘他愛も無く寢てしまつた。

その中に日わ全く暮れ、夜わ次第に更けて、四邊わ眞黒になつたが、光丸わまだ前後も知らず、グウ〳〵高鼾をかいて居る。

と、やがて橋の彼方から、ズシン〳〵と地響をさせて、此方え渡つて來る者がある。近づくまゝによく見ると、こわ如何に！　これわ雲突く斗りの大鬼！　手にわ大鐘の撞木の様な、太い鐵棒を杖につき、青や赤の小鬼共を、大勢後に引つれながら、やがて光丸の枕元を、うつかり通り過ぎようとすると、其足音に目をさました光丸わ、いきなりこの鐵棒に手をかけ、

『ヤイ待て！』

と、聲をかけた。

四　鬼の鼻毛と馬の足音

鬼わ鐵棒を握られて、思わず立止つて下を見ると、小さな人間の小供が居るから、何の事だと鼻で笑いながら、そのまゝ行き過ぎようとするのに、鐵棒が少しも動かない。

『オヤ！』

と、我知らずまた振りむくと、子供わまだ鐵棒をはなさず、

『ヤイこの野郎！　おれが折角好い心持で寢てる所を、よく起して通りやがつたナ。この廣い橋の上を、此所ばかりが通路ぢやあるまい。馬鹿な奴が……』

と、云いながら、對手の顔をすかして見たが、此時初めて氣がついたと見えて、

『ヤア、お前わ鬼だナ。』

と、云つたが別に驚きもしない。

鬼わ何か點頭きながら、

『ウン、いかにもおれわ鬼だが、貴樣わ人間の餓鬼の癖に、馬鹿に氣の強い奴だな。面白い！　ウン面白い！』

と、感心をして見て居る。

所え子分の小鬼共も、ドヤ〳〵側え寄つて來てたが、

『親方！　生意氣な小僧ぢやありませんか。いつそ頭から食つておやんなさい！』

と、中の一匹が云つたが、大鬼わ頭を振つて、

『イヤ〳〵、あれの鐵棒をつかんだ力と云い、おれの顏を見て平氣な所を見ると、此奴ア只の人間の子ぢやない。いつそ此儘連れて行つて、鬼仲間に入れてやろう。』

と、云いながらまた光丸に向い、

『どうだ小僧！　お前わなか〳〵話せそうな奴だが、なんとおれの子分になつて、これから鬼仲間に入らんか？』

『なんだと？　お前の子分の鬼仲間に成れ？　失敬な事を云うな！　おれわ忝なくも、山玉様の申子で、光丸と云うものだぞ。なんだお前わ鬼ぢやないか。鬼なら桃太郎に降參して、寶物をみんな取られた奴だろう。そんな意氣地の無い野郎わ、其方からおれの子分に成れ！　おれを子分にしようなど、わ、チヤンチヤラ可笑い、アハヽヽヽ、アハヽヽヽ！』

と、大聲あげて笑い出したから、小鬼共わまた腹を立て、

『此奴が〳〵！　子供だと思つて勘辨すりやア、つけ上つて勝手な熱を吹きやがる。さアもう覺悟しろ！』

と、二三匹よつて引つかもうとする時、光丸わその鬼共を、小さな手で拂つたと思うと、忽ち前後に投げ飛ばされて、角を折られるやら、牙を缺かれるやら、散々な目に會わされた。

『それ見ろ！　だから只の人間ぢや無いと云うんだ。何しろこんな所ぢや話も出來ないから、はやく窟え連れて行こう。――さア光丸さんとやら、惡い樣にしないから、まア私の家まで來なさい！』

と、今度わ大鬼もやさしく出たので、光丸も漸く得心し、

『よし、それぢやア一所に行つてやるが、決して子分なんぞにや成らんぞ。』

『そりやアどうでもお前の勝手だ。』

と、それから大鬼わ、光丸の手を取つて、其窟えと連れて行つた。

窟でわまた他の小鬼共が、

『今日わ親方が好事に、あんな小さな子供を取つて來た。あれぢやア骨まで親方に食われて、とてもお餘りわ頂けまいなア。』

などゝ陰口を云つて居るが、大鬼わ光丸を食うどころか、却つてこれに馳走を出して、さも親切にもてなして居る。

光丸わその馳走を、遠慮もせずにムシヤ〳〵食つたが、腹がはるとまた眠くなるので、眠氣ざましに大鬼に向い、

『どうだ一番腕押をしようか！』

と、力競を挑みかけた。

大鬼わニツコリ笑つて、

『ウン、腕押面白い！　だがこれでお前が負けたら、いやでもおれの子分だよ。』

と、云えば、光丸も興に入つて、

『その代りお前が負けたら、お前こそおれの家來だぞ。』

と、約束を堅く交わして、双方まづ座をかまえ、螺の主の様な大鬼の手と、楓の若葉の様な光丸の手わ、やがてしつかり組み合つた。

『よしか、押すぞ。』

『いゝとも、さア來い！』

ウウン〳〵、エイ〳〵と、二人わ掛聲をして押合つたが、右え押され、左え押し返えし、東え傾き、西にたおれして、容易に勝負が付きそうにも無い。

見物の小鬼共わ、たがいに顔を見合せて、

『どうだい、あの親方の拳固でやられちやア、甲を被つた人間の頭でも、粉微塵に成らうと云うのに……』

『あの力で押されても、ビクともしないばつかりか、却つて時々押し返して……』

『アレ〳〵アレ、親方が……』

『オウ〳〵、こりやアやられそうだぞ。』

と、皆舌を捲いて居る。

其中何思つたか、大鬼わ手をはなしながら、

『こりやアいつそ勝負無しにしよう。何しろお前わ恐ろしい力だ。』

と、云えば、

『お前もなか〳〵強いんだねエ。』

と、光丸も手を引いたが、別に疲れた様子も無い。

然し大鬼わ、先刻からあまり力を出して、餘程草臥れたものと見えて、そのまゝゴロリと横になり、さもがツかりした様な聲で、

『さア、今夜わもう遲いから、お前も其邊で寢るがいゝ。』

と、云う中に自分の方わ、もうグウ〳〵寢込でしまう。

それを見て子分の小鬼達も、

『ぢやアみんな寢た〳〵！』

と、彼方でもゴロリ、此方でもゴロリ、行儀も作法も一切かまわず、大の字になつたり、ト の字になつたり、〻の字になつたり、へ の字になつたりして、あとに光丸わ、却つて一人起き上り、窟の中を見まわしながら、

『なんだこの態わ！　なんぼ鬼とわ云いながら、あんまりダラシが無さ過ぎるぢやないか。こんな奴を家來にしたつて、ろくな事わ出來やしない。いつそ今の中に出て行つてやろう。だが、只で出

るのも面白くないから……そうだ、一番おどろかしてやろう。』

と、そつと大鬼の寢顏の側え行つて、釘の樣なその鼻毛を、いきなり一本グイと引ぬき、吃驚して跳ね起る間に、ツイと表え飛び出して、一目算に逃げてしまつた。

が、不圖あたりを見ると、もう東の方が白んで、夜の明けるにわ間も無い。

夜が明けたら町え行つて、何所か甘い所を見つけて、兎に角此身を落付けなければ成ならいと、こんな事を考えながら、段々人里の方え來ると、やがて後の方から、ポカ〳〵と云う馬の足音。誰か來る樣子だから、何の氣無しに振り向く途端、スツと通りぬけて行つたのわ、薄明りでもそれと見える、若い立派な騎馬武者だが、何故か家來も馬丁もつれず、只一騎で駈けて行く。

それを見ると光丸わ、ひとり何かうなづいて、いきなり自分の草履をぬぎ、はだしのまゝ宙を飛んで、その馬の後を追かけた。

五　錦織左衞門と襤褸城

草履片手に宙を飛んで、騎馬武者の後を追かけた光丸わ、そのまた早いこと、はやい事！

さながら其の名の光物が、空を飛ぶかと思うばかり、忽ちの中に追付いたが、敢えて是れを呼び止めるでも無く、只後に成り、前に成り、その間二間と離れないで、まるで馬丁でゝもある樣に、始終一所に駈けて居る。

馬上の武士わ、やがてそれに氣が付いて、變な小僧だとわ思つたが、別に咎めもせずに居た。

其中に騎馬武者わ、只在る大きな門の前で、馬をハタと止めたが、下りようとして獨語、

『しまつた！　先刻あまり急いだので、こりや履物を忘れて來た。馬上の時わ是でも可いが、まさか他人の家え上るに、土足のまゝでわ行かれない。こりや困つた事をした。』

と、眉を顰めると、此時逸早く光丸わ、ツとその側え駈けよつて、先刻自分の脫いで持つて居た、草履を揃えてその前え出した。

武士わ見ると驚きながらも、

『オヽ、これわ有難う。』

と、其儘穿いたが、さて今度わ馬の仕末に困つた。

自分わこの邸に用があるが、馬を引いて座敷にわ通れない。それも出る時急いだので、口取の馬丁も連れて來なかつたから、今と成つてまた當惑すると　光丸わそれと悟つて、

『お馬わ私がお預り致しましよう。』

と、甲斐々々しく前えまわつて、馬の轡をちやんと取つたが、馴れた馬丁も及ばない位に、馬わおとなしく其所に立つた。

『オヽ、それでわ太儀だが、暫時預つてくれ！　用が濟んだら直ぐ出て來るから。』

と、武士わよく〳〵急ぐと見えて、其儘門内え駈けて入り、玄關から奥え通つて、半時ばかり出

て來ない。

その間光丸わ、じつと馬の口を取つて、門の前に立つて居ると、通り掛りの者わ指をさして、

『どうだイ、あんな小僧が馬の口を取つてるぜ。今にあの馬が暴れたら、直ぐに蹴飛ばされて了うだろうに。』

と、惡口を云つて行くが、常なら短氣な光丸、直ぐに拳骨を振りまわすのを、今日ばかりわ何を思つたか、それらわ馬の耳に風、聞いても聞かぬふりをして、少しも取り合わない。

暫時すると武士わ、用を濟ましてまた出て來た。

『オ、、御苦勞々々々！　よく逃がさずに居てくれた。』

と、云いながらまたヒラリと乘つたが、徐に手綱を捌きながら、

『時に小僧！』

と、優しく聲をかけた。

光丸わ武士を見上ながら、

『何でございます？』

『お前わ體に似合わず、不思議によく間に合う奴だが、……一體何所の何者の倅だ？』

『私ですか……何所の誰の子でもありません。只天と地との間に、ヒヨコリと涌いて出た人の子です。』

『面白い！　その返事が氣に入つた。それぢやア何うだ。今日から武士に成る氣わ無いか？』

『武士になら成つても可うございます。だが何うしたら成れるんです？』

『それでわおれの家來になれ！』

『貴君の家來に……？』

と、何思つたか光丸わ、光る眼でじつと馬上の人を見たが、

『……よし、成りましよう。たがお武士さん！　貴君も只の人ぢやありませんネ。』

『いかにもおれわ只の武士ぢや無い。この近國に隱れもない、錦織左衛門という大名だが、今に見ろ！　日本の天下わ、皆おれの物に成るのだ。』

と、云うと光丸わニヤリと笑つて、

『そうしたらその天下わ、また私が貰いましよう。』

『此奴、愉快な事を云う奴ぢや。面白い〳〵！　だが小僧！　お前にも名があるだろう。何と云う名だ？』

『私の名ですか？　光丸と云うのです。』

『光丸わえらい名だ。だが、家來にわ不似合だから、その光丸の一字だけ取つて、今日から光吉と呼ぶ事にしよう。其中立派な武士になつたら、また立派な名をつけてやるぞ。』

『それわ有難うございます。』

『でわ付いて來い。』

『畏まりした。』

と、これから錦織左衛門わ、光丸の光吉を連れて、元來た道を引かえしたが、今度わ先刻とちがつて、少しも馬を駈けさせず、ポカリ〳〵と靜かに步かせて、しきりに光吉と話をして行くと、やがて前方から、左衛門の家來の者が、漸く追付いて來て、

『殿樣！　もう御歸りでございますか。不意の御成りに御供も仕らず、まことに申し譯がございません。』

と、平蜘蛛の樣になつてあやまつた。

左衛門わ尻目にかけながら、

『イヤ、貴樣達の樣な者わ、付いて居つても何の役に立たん。その代りこれを見ろ？　今日わ良い家來を拾つて來たぞ！』

と、光吉を紹介せる。

家來わ見て驚いた。

『殿樣！　これわまだ小僧でございますな。かような者が御家來とわ？』

『この小僧が貴樣達の、十人百人にも優るのぢや。』

『ヘエ……こんな半分にも三分一にも足らん奴が……』

と、家來わ一向腑に落ちない顏、光吉わ只ニヤリと笑う斗りで、平氣で左衛門の後について行く。やがて左衛門の城近く來た。前面の小高い山の上にわ、天守や、櫓や、塀が見えて居る。

左衛門わ光吉を見かえりながら、

『光吉！　あの城がおれの城ぢや。』

と、聊か誇り顏に云うと、光吉わ立止まつてぢつと見たが、急に聲高く笑い出した。

『アハヽ、あんな所に居らつしやるんですか。ヤレ〳〵危險〳〵！　敵が一度でも攻めて來りやア、直ぐ落されてしまいます。こんな襤褸城わ打ち壞して、早く建て直さなけりやいけませんねエ。』

『コレこの小僧何をぬかす。生意氣な事云うと只わ置かんぞ。』

と、刀の柄に手をかけた。が、光吉わ驚かず、

『でも然うだから仕方が無い。ねエ、殿樣！』

と、云うと、左衛門わ點頭いて、

『如何にも光吉の云う通りだ。この城でわ戰が出來ん。而しこれで今壞せば、急に後が建たんから、それでも當分辛抱して居るのだ。』

と、云うと光吉わ進み出て、

『何と殿樣！　そんなら私にお委せ下ださい！　そうしたら一晩の中に、立派に建て直してあげますぜ。』

六　腰元桔梗實わ鬼女

左衛門わこの高言を取り上げまいと思いの外、眞顏に成つて光吉を見かえり、

『面白いその一言！　然らば其方にわこの城を、一晩の中に建直すと申すか？』

『ヘイ、立派に建て直して御覽に入れます。』

と、言葉さえ立派に云い切る。

家來共わ吹き出して、

『此奴が〳〵！　途方もないことをぬかし居る。殿樣！　此わ狂人でございますな。』

と、云うのを左衛門わ耳にもかけず、

『然らば光吉！　其方にこの城を預けるから、今晩中に建直して、初奉公の手柄にして見ろ！』

『ハツ、畏つてござります。』

と、主從わ飽くまでも眞面目だ。他の家來わ眉を顰めて、

『殿樣も御醉狂な！　こんな狂人小僧を捕まえて、御冗談にも程がある。常から嚴しい殿樣にも似ず、今日わ何だつてこの通り、馬鹿氣た事をなさるんだろう？』

と、片腹痛く思つて居るが、

『何を此奴等に解るものか。』

と、光吉わ更に氣にも掛けない。

其中に光吉わ、左衛門の館え入れられて、取りあえず一室を遣わされたので、光吉わ其儘こゝに立て籠つたが、何と思つたか其後わ、更に左衛門の前にも出ねば、また朋輩にも顏を見せない。

變な奴だと思いながら、左衛門わその夕方、そつと襖の隙間から、部屋の中を覗いて見ると、光吉わ前に城の圖をひろげて、仔細らしく腕を組んで居るが、時々わ何か點頭いて、得意の笑を洩らす樣子が、まるで何者か相手があつて、それと相談して居る樣にも見える。

『何所まで不思議な奴か知れんが、兎に角今夜が試驗物だ。』

と、好奇心わ一層度を增して、只明日の朝が樂みでならない。が、その眞夜半頃、左衛門わ不圖目を覺して見ると、しきりに物の音がする。

さてわ光吉奴、何か仕事を初め居つたナ。それにしても朝までに、何れ程の事が出來るものかと思いながら、そつと寢床をぬけて、窓から外を見ると、驚いた。

宵にわ星さえ見えなかつた空が、夜の明けたよりも明るく光つて、一時わ目も眩まんばかり。漸くにして瞳を凝らすと、何所から何うしてやつて來たか、何千匹とも數知れぬ小猿が、手に〳〵作事の道具を持つて、櫓を組む者、塀を築くもの、瓦を葺くもの、壁を塗るもの、何れも一心不亂に成つて、こゝを先途と働いて居る。

左衛門わ夢かと斗り、一度わ我目を疑つたが、

『さてわ光吉わ魔法使か、それならその城の二つや三つ、一夜に建てるも易い事だ。こりや重寶な奴が來てくれたわイ。』

と、思直して大きに喜び、夜の明けるのを待ちかねて居る。やがて軒端の雀わ鳴き出し、森の烏わ塒を放れて、夜わほの〴〵と明け離れると、今まで見えた數千の猿わ、一時に何所えか姿を消して、殘るわ新築の天守の櫓、巍然として空に聳えて居る。

『さゝ、出來した。天晴れ〳〵！』

と、我知らず躍りあがれば、はや其前に平伏して、

『これにわ御意に叶いましたか？』

と、光吉わもう扣えて居る。

左衛門わ嬉しまぎれに、その手を取つて引き起し、

『イヤ、光吉！　見事なものぢや。實に頼もしい其方の腕前。今日から其方を引抜いて、一方の侍大將に致すぞ。その褒美にわ具足、太刀、馬、皆予の物を取らすぞよ。』

と、殊の外の御機嫌に、光吉此上も無い面目を施こし、まだ青二歳の身をもつて、忽ち錦織左衛門の、片腕と頼まれる樣になつた。初め小僧と侮つて、あの高言を冷笑つた、他の家來の面々も、この一夜の大手柄に、皆舌を捲き膽を消して、今わ誰一人光吉の前に、頭を上げ得るものさえ無い。

茲にまた、この錦織の館の腰元に、桔梗と云う女があつた。これも新參者でわあるが、心の利いた性質で、讀書から算筆から、裁縫から、料理から、何一つ出來ぬと云う事も無い、稀代の才女である所から、左衛門にも殊の外氣に入り、一も桔梗二も桔梗と、お側去らずに立働いて居たが、光吉わその身の出世につれて、この桔梗とも親しくなつて、その擧動を見る中に、その鋭い目の光で流石にはやくも見ぬいたのわ、この桔梗の只者ならず、實わ老女に姿を變えて、しばらく人間に近づき、油斷があつたら躍りかゝつて、餌食に取つて食おうと云う、恐ろしい鬼神であると云う事だ。

されば光吉わ、機會があつたら化の皮を引剝き、見事退治てくれようと、思いながら日一日と、仇に送つて居る中に、やがて主人の命令で、しばらく遠國え使者に行く事となつた。

光吉わ何うやら心掛りになるので、いつそ左衛門に云つて置こうかと、つい口まで出しかけたが元より先方も魔性の曲者、なか〳〵尻尾を見せないので、それと證據を指す事もならず、其儘主人の命を受けて、旅路え立つてしまつたのだ。

所がその使の用向わ、同じ大名仲間の所え、大切の道具を借りに行くと云う事で、談判が思いの外手間取り、心ならずも三日四日と、時を移す事に成つたが、丁度その五日目の朝だ、錦織館から急の使が、

『御注進！　〳〵！』

と、顏色を變えて飛び込んで來た。

『慌しい何事だ？』

『御聞き下だされ、光吉様！　た、大變が持上りさゝした。』

『ナニ、大變？　オ、そうか？　さてわ桔梗が正體を現わしたナ。』

『よく御存じでござります、いかにもその桔梗婆、只の婆と思いの外、世にも恐ろしい鬼婆で、大それた、あの殿様を、一夜の中に食い殺し、生首もつてその儘、天昇致してござります。』

『ナニ殿様の御寢首を……ム——　とう〳〵やり居つたか、殘念な事をした？』

『それと云うのも殿様が、平生のお氣に入りに似合わず、よく〳〵御機嫌が惡かつたと見え、御給仕の仕樣が間違つたとやらで、お茶碗を取つて頰になげつけ、お箸で眉間を突かれたのが、桔梗の腹の蟲を怒らせ、其夜の中に正體を現わして、あの仕末でござりまする。』

と、仔細を語れば篤と聞いて、

『ア、、殘念な事であつたナ。』

と、しばらく腕を組んで居たが、何思つたかカツバと跳ね起き、

『殿様お逝去あるからわ、このお使もこれまでだ。それより早く追かけて、鬼女を退治てくれねばならぬ。』

と、云うかと思うと光吉の、身體わはや座を舞い上つて、あれよ〳〵と人々わ、只空を見て呆れる斗り。

空にわ忽ち雷鳴、電光!!

七　墓前で授かる天下の名玉

鬼女の正體を現わした、腰元桔梗わ雲に乘つて、今しも天の一方え、喜び勇んで舞い上ろうとする。

所え同じく宙を飛んで、追いすがつて來た例の光吉。見ると桔梗の身の邊にわ、怪しい惡魔共群れ立つて、勝鬨の雷を鳴らすもあれば、得意の電を光らすもあり。その凄まじさ、恐しさ、只の者にわ面も向けられない。

けれども光吉わ少しも怯まず、はやくも桔梗に躍りかゝつて、

『おのれ殿様の寢首を掻いた、憎い惡魔奴！　思い知つたか。』

と、云いながら襟頭つかんで、エイとばかりに引き据える。

鬼女わそれを振り拂つて、また逃げようとする所を、光吉わはやくも刀を拔いて、横に拂つた一撃に、見事その首わ胴とはなれた。

すると居合わせた惡鬼共わ、

『ソレ親方の仇を取れ！』

と、右左から飛びかゝつたが、元より山王の加護ある光吉、爪も牙も立てばこそ！　睨めかえされた威光に恐れて、皆ちり〴〵に逃げてしまつた。

其間に光吉わ、尚宙に舞つて居る、桔梗の生首を打ち落して、其儘片手に提げながら、急いで錦織館に歸つて見ると、こゝでわ大將左衛門を討たれて、舵を取られた船の様に、途方に暮れた家來の者共、横着な奴わ此隙に、主人の祕藏の寶を盜んで、何所かえ駈落するもあり、また氣の弱い者共わ、明日から誰に扶持を貰おうと、メソ〳〵泣いて居るのもある。

光吉わこれ等の者を、更に目に止めもせず、早速左衛門の墓所えとかけ付け、まづ取つて來た桔梗の首を、その前に供えて、丁寧に禮拜し、

『あゝ、左衛門樣！　さぞ御殘念でございましたろう。然しその仇わ、この通り討取つて參りましたから、何卒これで御無念を晴らし、御心安く御成佛遊ばしませ！』

と、云つて其靈を慰めると、その心が通じてか、不思議や墓石がグラ〳〵と動いて、何やら物も云い度げに見えた。

光吉わ點頭いて、

『さて亡き殿樣にも、この御供物を御覽になつて、御嘉納遊ばして下ださると見える。然し此鬼女の生首、このまゝ此所にも置かれまいから、御供えが濟んだらば、いつそ燒き棄てゝ灰にしてやろう！』

と、近所の枯木をよせあつめて、其場に火を焚き、これに桔梗の首を投げ込むと、執念深い生首わ、燒かれてまた唸つて居たが、程無く灰になつたので、まづこれで安心と、あとを消して立とうとすると、こわ如何に！　その灰の中から、白い光がさつと立つた。

光吉わはやくも目をつけ、

『やゝ、や、これわ不思議なものがあるぞ。』

と、まだ溫味のある灰の中え、ぐつと手を入れて、それを摑んで出して見ると、思いがけないこの光物わ、明皓々とした玉であつた。

『オヽ、これわ珍らしい白玉！　何してまたこんな物が、この中から出たのか知らん？』

と、不審の首を傾けた。

すると彼方の石塔の下から、正しく錦織左衛門の聲で、

『その玉こそわおれの家に、日頃祕藏の白玉ぢや。桔梗がおれを殺した時、手ばやく寶藏から盜み出し、人に見咎められぬ樣に、口に含んで逃げた所を、其方に會つて首を落され、その儘此所え首とゝもに、戻つて來た稀代の寶ぢや。』

『オヽ、それでわこの玉わ御家の重寶？』

『ウン、「天下の玉」と云うものぢやぞ。』

『天下の玉とわ？』

『よくその文字を見い！』

と、云う聲に點頭いて、光吉わ白玉を、尚よく檢めて見ると、成る程只の白玉とわちがつて、刻

んだのか、書いたのか、其中央に一際白く、「天下」と云う文字が見える。

『オ、殿様、ござりました。天下と云う字がござりまして、これわ然し何う云う譯でござります。』

『オヽ、その譯わ？　それわおれが云うよりも、其方が大切に持つて居れば、その玉の奇特に依て、自然と合點が行くであろう。』

と、云うのを聞くと流石わ光吉、はやくも心に悟つたと見えて、さも嬉しそうに點頭きながら、

『それでわ、これわこの儘、私がお預り申してよろしうございますな？』

『いかにも其方に預けるから、屹度麁末に致すまいぞ。』

『畏りましてござります。』

と、光吉わ推し戴いて、この玉を懐中に入れ、更にまた石塔に向つて、

『それでわ殿様！　私わもう參ります。』

『オヽ、よく參詣に來てくれた。嬉しいぞよ。』

と、又もや石わ動き出したが、やがてその靜まるのを見て、光吉わ靜に立ちあがり、元の館えと歸つて來た。

するとその途中の事だ。——只ある並木の側を通ると、だしぬけに聲がして、

『ヤイ待て！　小二才！』

『用がある。』

と、前後から立ち閉がる者がある。

光吉わ立止まつて、その者共をキツと見ると、これわ見上る様な大鬼、何れも手に〳〵鐵棒を持つて、大地をズシ〳〵鳴らして居るが、此方わ一向驚かず、

『待てとわ何だ、何の用だ？』

『その懐中の玉を出せ！』

『ナニ、この天下の玉を出せと？』

『貴様の様な二才奴に、勿體無い天下の名玉！　きり〳〵此方え出せばよし……』

『若しまた否ぢやとぬかすなら、可哀相だがこの棒で、貴様のどたまをお見舞申し……』

『その眼の玉から火の玉を出させて、』

『天下の玉わ捲き上げるぞ。』

『命が惜けりや神妙に。』

『さアその玉を出してしまえ！』

と、一匹の鬼わ聲をそろえて、まるで追剝を見る様に、光吉を喝しつけて、例の玉を奪い取ろうとした。

光吉わカラ〳〵と笑つて、

『殿様の敵桔梗を討つて、その御褒美に殿様から、今戴いた斗りの此玉、むざ〳〵貴様等に渡して

成ろうか。餘計な慾をかわかずと、さア其所退け、退き居ろう。』

と、軀に似合わぬ怪力に、二匹の鬼を推しのけて、ヅカ〳〵通り抜けようとする。

鬼も今わこれまでと、やり過して後から、振りかぶつた二本の鐵棒。今にも光吉の腦天めがけて……。

八　鬼の退散、天狗の推參

一

匹の鬼わ鐵棒を振りあげて、光吉の後から、力にまかせて打ちおろした。

あわれ光吉わ、其一撃に微塵と成つて、影も形も留めまいかと思うと、こわ如何に其體わ、何時かヒラリと飛鳥の如く、飛び退さつて彼方の木の下。

此方の鬼共わ空を打つた、力の餘りで鐵棒の先を、大地え四五寸埋め込んだが、「えイ」とばかりにまた取り直して、再び打つて掛ろうとする。

所え何所からやつて來たか、總身金毛に包まれた、七匹の小猿共わ、手に〳〵鐵の鎗を持つて、先に立つた鬼に向えば、つゞいて銀毛の小猿三匹、これわ大太刀振りかぶりながら、後の鬼えと掛つて來た。

鬼共わ驚いて、例の鐵棒をふりまわし〳〵、群れかゝる小猿を相手に、右え拂い、左え薙ぎ立てしばらく必死に戰う中、何と思つたか光吉わ、高く玉を捧げながら、

『退けい〳〵！』

と、號令をかけた。

すると例の小猿共わ、一度に凱歌をあげたと思うと、其まゝ姿わかき消す如く、はや一匹も目に遮らない。

此間にこそと鬼共わ、また鐵棒をふりかぶり、

『おのれ小童！』

『覺悟をしろ！』

と、今度わ眞向から打つてかゝると、光吉わ更に驚かず。

『オヽ、見事取るなら取つて見ろ！』

と、わざと玉を見せびらかす。

『おのれ小癪な！』

『取つてくれるぞ。』

と、此度わ鐵棒取り直し、手を擴げて摑みかゝつた。

時その時！　光吉の二つの眼から、金色の光が二筋、さながら雲を破る電光！　サツと斗りにほどばしつた。

するとまた此方の鬼わ、さながら彈丸に打たれた如く、アツと云うと二匹とも、將棋倒しに其場

に倒れ、頭を抱えて悶きながら、

『ア、恐ろしや！　免せ！〳〵！』

『降参々々！　あやまつた。』

と、果わ大地え兩手をついて、まるで平蜘蛛の様に成つてしまつた。

それを尻目に見やりながら、光吉わニヤリと笑つて、また玉を懐中え納め、悠々として立ち去るのに、鬼共わもう起きも上れず、只指を咬えて後から、羨やましそうに見送るばかり……。

さて光吉わ、今日舊主の墓參をして、はからず天下の玉を得たのわ、いよ〳〵出世の前兆と、喜びながら館え歸つたが、元より大氣の男だけに、その嬉しさわ顔にも出さず、またその話も人にわ語らず、只その玉を大切にして、朝夕肌身を離さない。

すると、それから三日目の、而も夜が更けてからの事だ。

光吉わ不圖眼をさまして見ると、何者とも知れず雨戸の外に、ガヤ〳〵話し合う聲がする。

『この夜半に何事ぢや？　さてわまた强盜共か、それとも此間の鬼の奴が、今度わ仲間を語らつて、また玉を取りに來たのかな？　何にしても驚きわせんぞ。』

と、靜かに床から起きあがり、常の者なら押取刀で、戸の隙間から外の樣子を、そつと覗いても見ようと云う所を、光吉わ無造作に、素手で緣側まで出ばつて行つて、雨戸をガラリと引きあけた。

途端にパタ〳〵と音を立てゝ、何れも其場を逃げた樣子だが、生憎戸外わ眞の暗、何所に何者が

居るのやら、流石の光吉にも解らない。

『コリヤ〳〵、誰だ〳〵？　用があるなら此方え入れ！　何も隱れる事わ無いぞ。』

と、大聲あげて呼びかけると、

『オヽ、それでわ御免下ださりませ！』

と、云いながら緣の下から、躍り上つて座についたのわ、人間でも無く、鬼でも無い、羽根の生えた、眼の鋭い、そうして鼻の高い奴だ。

光吉わ不思議に思いながら、

『コリヤ、貴樣わ天狗だナ。』

『ヘイ、如何にも天狗でございます。』

『シテ、何しに此所え來た？』

『天下の玉を拜見に出ました。』

『オヽ、そうか。それわ見せてやらん事も無い。だが先刻の話聲の樣子でわ、貴樣一人とも思われんが、他の者等わ何うしたのだ？』

『御許しさえござりますれば、皆此方え入つて參ります。』

『オヽ、何の遠慮が入ろう。皆此方え入るがよい。』

『でわ呼びますでござりましよう。』

と、一人の天狗わ縁側に立つて、何か合圖の羽叩きをすると、彼方の木の枝、此方の石の上 或わ築山、燈籠の陰から、バタ〳〵バタ〳〵羽音をさせて、群がりよつた天狗共、其數凡そ十五六、光吉の前に居列ぶと、等しく頭を下げて辭儀をした。

光吉わ見て興に入り、

『さてわ貴樣等天狗共わ、天下の玉を見に來たと申すか？』

『いかにも左樣にござりまする。』

『オヽ、でわ見せて遣わすぞ。』

と、光吉わ懷中から、しづかに出しかけた天下の名玉！

九　日出吉の再現、名玉の奇特

日月を欺き、萬象を照らす、天下の名玉の光の鋭さ、サツと斗りに四邊を射ると、途端に並み居る天狗共わ、アツと一度に平伏したが、やゝあつて少し頭をあげた時、見るとその二つの眼わ、まぶしい光に開けかねて、皆半ばを閉ぢた斗りか、その大切の鼻柱わ、等しく中途から折れて居た。

光吉わいよ〳〵笑坪に入り、

『なんと見事な名玉にわ、何れも肝が潰れたろう。』

と、云えば、天狗の中でも年長と見えるが、恐る〳〵進み出ながら、

『なるほどこれわ天晴れの名玉、兼て噂に聞いたにたがわず、見事な御寶でござりまする。』

『シテ貴樣等わ、何と思つてその通り、大勢揃つて見に參つたのぢや？』

と、聞けば、今度わ次の天狗が出て、

『さればでござりまする。私共一同が、日頃鼻を高く致して居りまするも、實わその名玉を、我手に入れ度いばつかりに、常からその在所をば、其所か此所かと嗅ぎ立てますので、さてこそ斯樣に伸びたのでござります。』

『なんだ、それでわ貴樣等のその鼻わ、この玉を嗅ぎ出そうとして、それでそんなに伸びたと云うのか。』

『左樣にござります。イヤ、その玉を望んで居りますのわ、私共斗りでわござりません。同じ魔性の仲間でござりまする、あの鬼共も玉の所在を、何うか致して聞き出そうと、始終耳を立てゝ居りますが、その一念が骨を拔けて、あの通り耳の上に、角が生えたのでござります。』

『なるほど、道理でこの玉を貫つて歸る時、途中に鬼奴が二匹居て、横奪しようとしたのだナ。』

『全くその爲めでござります。然しその鬼共も、その名玉の威光にわ、必ず角を折りましたでござりましよう。』

『何にしても貴樣達わ、よくこの玉の事を知つて居るが、全體この名玉にわ、何う云う奇特がある

のだナ？』

『それをまだ御存じないのでございますか……』

と、三番目の天狗わ乗り出し、

『それこそ其名にも呼ぶ通り、この天が下に立つて、如何なる事も思いのまゝ、自由自在になると云う、不思議の奇特があるのでござります。然し斯様な名玉わ、滅多な者にわ手に入らぬ筈、それがまた御手に入るとわ、何と云う果報な御方、貴方様わ何時何所で、何う云う月日の下にお生れなさりましたか、さて〳〵お羨ましい事でござります。』

と、云う言葉に光吉わ、ニツコリと打笑みながら、

『おれわ何所で生れたか知らん。然し天地の間に生れて、初めのほどわ光物、それが母の膝に抱かれて、忽ちに人間に成つたのだ。』

『さてこそ〳〵、只のお方とわ異うと存じました。そう云うお方なればこそ、この名玉も御手に入つたれ、――さも無い者が持つて居れば、却つてその玉の祟りによつて、非業の最期を遂げねば成りません。たとえば貴方様の先の御主人、錦織左衛門殿の如きも、なまじこの玉をお持ちなされて、却つて桔梗と云う悪魔の爲めに、あゝした事にお成り遊ばしたのでござります。』

『オヽ、そうだつたか。して見ると危険い玉だナ。』

『イヤ、その危険いも人にこそよれ。貴方様の御手にあれば、それこそ正直天下の玉、天下の事わ御意次第、こんなおめで度い事わござりません。コレ、兄弟！　何れも御祝儀申上げようでわ無いか。』

と、一座を見かえると、他の天狗共も點頭き合い、

『萬歳！　々々！　萬々歳！』

〳〵〳〵

と、云うかと思うと天狗共わ、忽ち掻き消す如くに失せた。

さてわ夢か、それとも幻か、何にしても不思議な事と、あとに光吉わ玉を抱きながら、茫然として坐つて居ると、何時の間に入つて來たか、見覺のある小猿が一匹、眼の前え來て畏まつた。

光吉わキツと目をつけ、

『オヽ貴様わ、日出吉で無いか？』

『ハイ、光吉様、その後わ御無沙汰致しましてござります。また此度わ御目出度う存じます。』

『めで度いとわ、玉の事か？』

『天下自在のその名玉が、お手に入りました上からわ、今こそ再び日出吉が、貴方様の御側え參つて、御用をつとめる時節が參りました。その御奉公の手初めに、御覽に入れるものがござります。サア此方え御出で下ださい！』

と、はや起き上つて先に立つ。

光吉わまだ夢心地、その後について行くと、日出吉わ庭え下りたが、やがて光吉の手を取ると、

見る〳〵中に宙を飛んで、間も無く大きな岩の上に立つた。
見おろせばその下わ、波漫々たる大海原、小舟一つ浮いてわ居ない。
『日出吉！　此所わ全體何所だ？』
『此所わお國の端でござります。』
『國の端とわ世界の端か？』
『世界の端てわござりません。只貴方樣の御國の端、世界わまだこの先に、いくらもあるのでござります。』
『でわ、まだこの海の先にも國わあるのか？』
『あるどころでわござりません。あれ〳〵、あの雲と水との間に、薄く見えて居ります所わ、卽ち大きな國でござります。』
この先にある妖仙國、妖しい仙人の居りまする、大きな國が殘つて居るのだナ。』
『オヽ、それでわ同し天が下にわ、妖しい仙人の住んで居る、國が殘つて居るのだナ。』
『その通りでござります。殊に彼の妖仙國わ、もとわ貴方樣のお生れに成つた、大日の國に付き從つて、同じ日の出を仰いで居りましたが、中頃大日の光が薄らぎ、遠く屆かぬ樣になりましたを、妖仙共わ好い事にして、まぶしい日の出に背を向け、代りに月の光の下で、勝手に魔力を振つて居ります。なんと怪しからん奴等でわござりませんか。』
『如何にも聞き棄てならん話だ。』
『然し今こそ貴方樣わ、天下の名玉をお持ちになる、大日の國の光吉樣、天下を自在に遊ばすからわ、あの妖仙國も降參させ、同じ大日の光の下に、その名玉の奇特のほどを、お示し遊ばさねばなりますまい。』
『そうだ〳〵、大きにそうだ。ましてむかしわ彼の國も、此方の物だと聞くからわ、今さら背を見せられて、默つて居る所で無い。然し日出吉！　見れば彼方わ海の先、只でわ渡つて行かれんなア。』
『御決心さえ付きますれば、渡るに何の御心配が入りましよう。それこそ名玉の奇特によつて、何事も自由自在、まづあの玉をお出しになつて、試しに高くお捧げ下ださい！』
と、云われて光吉も力づき、また懷中の名玉を、推し戴いて高く捧げた。
すると不思議やその光が、さつと八方を照したと思うと、見る〳〵中に雲の上にわ、日出吉と同し姿をした、小猿の群が幾千匹か、鬨を作つて現われた。
それと同時に岩陰からわ、一度に羽音を鳴らしながら、現われ出でた天狗共、思い〳〵に武器を取つて、我先にと躍り立ちながら、忽ち天下の名玉の、光の下に集まつた。
光吉わ勇み立ち、
『オヽ、太儀々々！　小猿共、天狗共よツく聞け！　今度この光吉わ、天下の名玉の奇特によつて、あの妖仙を征伐するぞ。貴樣等も供を致せ！』
と、皆まで云わぬその中に、小猿も天狗も口をそろえて、

『オ、合點でござります。』

一〇　妖仙の狼狽、王子の生捕

さても妖仙國と云う所わ、只海一つ隔てゝ、大日の國の西隣にある、隨分古い國でわあるが、其所に住む妖仙共わ、いづれも氣が重く、心が鈍く、立つて働くと云う事よりわ、臥て遊んで居る方を、得意として居ると云う風だから、國こそ可なり大きくわあれ、更に開けも進みもしない。

否、昔時わこれでも立派な國で、一時わ大日の國の者が、種々の仙術を學びに出かけ、樣々の仕事を習つて、それを土產に歸つて來てわ、留守居の者に敎えた事もあつたが、後にわ却つて反對に、此方で手を引いてやり度い位に成つた。

尤も其頃わ此の國に、金鷄と云う名鳥が居て、是が大日の光を見ると、聲高らかに歌つたもので、その金鷄の聲を聞くと、國中の者が一時に跳ね起き、齊しく業を勵んだればこそ、國も榮え民も富みたれ、其後この金鷄が、何時か山深く隱れ込み、其の聲を聞かせぬ樣になると、妖仙共わ忽ちに其本性を現わして、今わ却つて大日を厭い、雲を祈つてわ、その光を遮り、雨を降らせてわ、その道を閉ぎ、偶々大日の光る時も、その方に皆尻を向けて、只管眠をのみ貪ると云う、不埒わ日毎につのるばかり。これと云うのもその隣に、大面國と云う大國があつて、此所の大面の妖怪共が、兄分顏に妖仙共を、常から加勢して居るからの事で、妖仙共わそれを頼みに、さてこそかくわ我儘氣儘、傍若無人に振舞うのである。

さればその妖仙國の、濱手の守護を堅めて居た、妖仙の小頭共も、日わ高々と昇らば昇れ、此方わ眠る丈眠つてやるワと、今日もまた例の通り、彼方にゴロリ、此方にゴロリ、算を亂して臥そべつて居ると、不意に誰やら表の方で、大聲に叫び立てるものがある。

夢心地に聞いて見ると、何うやら聞きなれぬ者の聲！　而もまたこれに合わせて、同じ妖仙の仲間の者も、何やら罵り合つて居る樣子に、妖仙の頭わムクリと起きて、大欠伸一つしながら、澁々起き上つて窓から覗くと、こわ如何に！

表門の屋根の上にわ、つねに見馴れぬ武者一人、手に武器をおつとりながら、此方を向つて名乘りをあげて居る。

『ヤア〳〵此國の妖仙共、寢ぼけ耳をかつさらつて、我が云う事をよく承われ！そも〳〵これわ大日の國に、天下の玉を手に入れ給う、大果報の大豪傑、光吉將軍の一の家來に、山王の日出吉とわわが事なり。此度汝等妖仙共の、金鷄鳥に歌も唄わせず、朝から晩まで臥そべつて、日を日とも思わぬ無禮を、用捨ならずと光吉將軍、懲らしめの爲めに征伐成さるに付き、卽ち日出吉承つて、かく先鋒に立ち向つたぞ。まだ此他に二陣にわ、大、中、小の天狗共、鼻を揃え羽を叩いて、雲霞の如く押しよせたるぞ。イザ早く起き上つて、尋常に勝負せよ！』

と、大音に呼わる聲わ、妖仙城の內外に、實に時ならぬ靑天の霹靂、流石暢氣の妖仙共も、一時に皆眠を覺まして、身を震わせぬ者わ無い。

『スワ、大事に成つて來たぞ。大日の國から攻めて來おつた。こりや斯うしてわ居られぬぞ。……サア皆起きた〳〵。』

『だから平生から云わん事か、雲や雨わ起しても、大日の光を消す事わ、所詮出來るものでわ無いから、たまにわ東の方を向いて、辭儀の一つもしておけと、私が云うこと聞かぬからぢや。』

『イヤ、大日の國の光吉とやらが、自身で攻めに來よつたのなら、迂濶に手出しも成るまいが、高の知れた日出吉とか云う奴……見れば只の猿ぢや無いか。』

『それに二陣の天狗とやら……そんな奴等に乘り込まれて、驚く妖仙樣でわ無いぞ。片端から摘み出せ！』

など、驚き恐れる者やら、强いて空腕を揮う者やら、上を下えとしばらくわ、土鰌の桶を覆えした樣だ。

其中に日出吉わ、城門の屋根の頂邊に立つて、

『ソレ、進め！』

と、號令を掛けると、聲に應じて數千の小猿、手に〳〵小槍をしごきながら、どつと斗りに鬨を作つて、城內さして亂れ入る。

今わたまらず妖仙共も、有合う武器取る間もおそしと、苦しまぎれに立ち向つたが、元より常わ臥てばかり、重い者わ箸より持たず、一寸ころげた煙管さえ、自分で拾うも面倒ぢやと、自墮落ずぼらに持ち崩した者が、何で戰の間に合おう。

見る〳〵中に三人、五人、或わ十人、二十人と、此所に倒れ、彼所にへたばり、目も當てられぬ大敗北。

果わ逃げると、降參するとて、名におう妖仙國の濱手の城わ、見事日出吉の手に落ちて、金鷄島の紋つけた、妖仙國の旗印わ、忽ち裂いて引き棄てられ、代りに立つた大日の旗、その下に群がる者共、一度にどつと凱歌を揚げた。その勢の凄まじさにわ、山も爲めに頂を折り、川も爲めに底を覆えし、艸木もやがて其前に、何れも倒れ臥すべく見えた。

するとまたこの事が、はやくも王城えと聞えたから、妖仙王わ大きに驚き、

『所詮今の勢でわ、私等が此所に逆立しても、大日の軍勢にわ敵うまいから、いつそ早く明け渡して、仲直りをしてしまつた方が、後が樂でよいでわ無いか。』

と、云えば、大臣わまた頭を振つて、

『イヤ〳〵、それわあまりの意氣地の無い事。假にも妖仙國の王樣ともある方が、敵に一筋の矢さえ放さず、此まゝ御殿を明け渡すのわ、金鷄島の手前もあり、旁々出來る事でわござりません。それよりわ王樣にわ、王子諸共大面圖え、しばらく立ち退き遊ばしませ！　後にわ私共が居りますか

ら、決して御心配にわ及びません。高の知れた猿の日出吉、私が手捕にしてくれます。』

と、高言を吐いて諫めながら、尚も軍議を凝らして居る。

所えはやくも寄手の日出吉、勝に乗つて寄せ來る樣子に、妖仙軍も心得て、同じく十分に身を堅めながら、ドツと斗りに躍り出で、小猿の勢と渡り合う。

暫時の間わ入り亂れて、互いに勝負を爭つて居たが、其の中に妖仙勢わ、次第にまた征め立てられて、討たれる者數多く、はてわ此の王城も、はや風前の燈明の如く、危く見えたその折から、王わ王子と諸共に、裏手の門からそつとぬけ出で、大面國えと逃げようとする。

これを見た例の日出吉、何でムザ〳〵敵を逃がそう、逸早く飛んで來て、矢庭に王子の襟頭摑むと、其まゝ宙え吊りあげた。

二　大面の加勢、天狗の菌狩

妖仙王子わ王と共に大面國え逃げようとしたが、足弱の身の悲さわ、忽ち日出吉に捕えられ、空中高く摑み上げられて、ヒイ〳〵と云う泣聲あげ、

『アレエ助けて〳〵！』

と、呼んだが叫んだが妖仙王わ、元より命あつての物種、九死の境に陷つてわ、なか〳〵わが子の事など思えず、

『オ、和子や！　捕えられたか？　捕えられたわ不憫ぢやが、今わとても助ける事わ出來ん。これから行つて大面殿に、加勢を賴んで來る迄わ、不憫ながら人質に、敵の陣屋に殘つて居てくれ！　追付け味方が強くなつたら、屹度取り返しに來てやるぞ。』

と、勝手な事を云いながら、雲を霞と逃げて行く。それにつゞいて家來の妖仙も、皆尾をまいて一算走り……。

日出吉わ雲の上から、この體を見て冷笑い、

『さりとわ妖仙の弱蟲奴等！　現在大切な王子を取られて、それを取り返える勇氣も無い。親としてわ子を忘れ、家來としてわ主を忘れ、いたづら盛りのこの子をば、此所に置去りにして逃げると わ、何たる意氣地の無い奴等だ。』

と、云えば王子わ悔しがり、

『ア、、情無い阿父樣！　家來共も覺えて居れ！　此まゝおれが敵の手で、命を取られる事があつても、敵わ恨まぬ、それよりも、恨めしいわお父さま、憎いわあの家來共！　……そう云う心で居ればこそ、大日の國から征められて、あつたら國を取られるのた。口惜しい、殘念だ。』

と、切齒をして泣き伏した。

それを見ると又日出吉わ、急わ不憫の心が增し、

『これ妖仙の王子殿！　その哭きわ道理だが、少し思う仔細があるから、貴君の命わ取りわせぬ、

安心して居るがよい！』

と、いたわつてもまだ頭を振り、

『イヤ〳〵、助けて欲しい事わ無い。この儘此所で討死する。殺してくれ〳〵！』

と、悶えながら身を摺り寄せる。

日出吉わいよ〳〵感心して、

『イヤ天晴れのその覺悟！　そう云う立派な氣性の者が、他に一人でもあるならば、妖仙國もこれほどに、もろく我手にわ破られまいに……その見上げた覺悟を見てわ、いよ〳〵殺す事わ成らぬ。さ、さ、心安く一所に來なさい！』

『いゝや行かぬ、こゝわ動かぬ。何うしても此所で死ぬのぢや。』

と、だゞけて更に動かない。

面倒なりと日出吉わ、手ばやく王子を引かゝえて、しつかり背に負つてしまい、

『それほど討死したければ、よい所で殺してやる。何と云うにも此所わ途中、さア神妙に來るのだぞよ。』

と、はや其所を引揚げたが、其途中でも王子に向い、

『先刻から見る所、骨組と云い、度胸と云い、大日の國の子供の中にも、滅多に見られぬ程なのわ他の妖仙の弱蟲に比べて、月と泥龜とより思われぬが、それでも貴君わ妖仙國の、まことの妖仙の胤なのか？』

聞くと王子わ、無念の涙を呑みながら、

『そのお尋ねわ道理だが、これにわ理由のある事ぢや。全體この妖仙國でわ、私一人に限らない。子供の內わこの通り、皆氣が強く度胸が好いが、大きくなると何う云うものか、皆骨がぬけ、筋がゆるんで、あの通り弱蟲に成つてしまう。それと云うのも妖仙にわ、惡わ菌が生えて居るので、その菌を國の者が、皆喜んで食べる中に、何時か元氣が無くなるのぢや。』

『それわまた不思議な話……してその菌わ何と云う？』

『なまけ茸と云うもので、妖仙國にわ野にも山にも、至る所に生えて居る。たとい大日の國の者が、強いえらいと威張つても、この菌を食うならば、やつぱり同じ弱蟲に、屹度成つてしまいますぞよ。』

『それわ好い事云うてくれた。それでわこの事味方の者に、よく云いつけて用心させよう。』

と、こんな話をして居る中に、はや日出吉わ王子を背にして、今攻取つた王城をば、其儘陣屋に乘込んだが、元より殺すつもりでわ無いから、王子わ直ぐに一室え入れて、警護に小猿を四五匹付け、只逃げ出さぬ樣にして、大切に生捕にして置いた。

てしまう故、たとい如何に腹が減つても、菌と見たら手をつけるな！　菌の類わ口に入れるな！』

と、堅く云い渡したのである。

話變つて妖仙王わ、わが子の生捕にされるのを、つい鼻の先に見ながら、一目算に其所を逃げて、大面國えと轉げ込んだが、折から國王大面の魔王わ、何か表が騒がしいと、立つて物見に出ようとする所え、息せき切つた妖仙王、

『コ、コ、これ大面殿、タ、タ、大變だ、助けて〳〵！』

『あわたゞしい、何事ぢや？』

『大日の國から攻めて來た。』

『ナニ大日の國の奴等が、お前の國え攻めて來たと？　それが何うして大變なのだ。何故一ト息に吹き飛ばしてやらん？』

『何うして〳〵吹き飛ばすどころか、あべこべに蹴ちらされて、皆、さん〴〵な目に會つた。はやく頼む、加勢を〳〵！』

『アハヽヽ、又しても泣面見せる、意氣地の無い妖仙殿ぢやな。然しその樣子でわ、大日の奴等も馬鹿にわ成らんな。よし、それならば心得た。直ぐに加勢に向つてやろう。實わあんまり仕事が無いので、少し退屈して居た所だ。』

と、云いながら大欠伸、ウウンとさし上げた兩の手で、そのまま左右をさし招くと、オウと答えて彼方此方から、進み出た大面の惡鬼共、

『大王、何御用でござりまする？』

『妖仙國に加勢して、大日の勢を追拂うのぢや、直ぐに出陣の用意をせい！』

『ハツ、心得ました。』

と、云う間に起る怪しの黒雲、魔王の前におし蔓ると、魔王わ幾千の惡鬼と共に、その黒雲に打ち乘つて、妖仙國えと群がりよせた。

とわまだ知らぬ大日勢の、別手に向つた天狗共わ、もろくも倒した妖仙共の、しばらく跡さえ見えぬのに、少し油斷をしたと見えて、此所の廣野、彼所の山間に、假の陣屋を構えたが、見ると其邊にわ、如何にも見事な菌が生えて居る。

先刻からの戰爭に、大分空腹成つて居た所だ。つい取つて一個を食べると、そのまた味の甘いこと、それと聞いて又一人……二人三人、五人十人、はてわ何れも爭つて、その菌を食い初めた。

二　妖仙の降參、光吉の天昇

毒　とわ知らぬ天狗勢わ、只空腹さに手當り次第、有り合う菌を取つて食つたが、暫するとこわ如何に、全身一時に痲れ渡つて、手足わ萎み、目わ晦み、唇さえも硬ばつて、例の肝腎の鼻柱わ、もろくもヘシ〳〵折れてしまうに、これわ不思議と訝る所え、一旦逃げた妖仙軍わ、大

面王の援兵を得て、忽ち元氣を盛り返えし、ドツと計りに逆襲して來た。

それと見て天狗勢わ、

『何を小癪な！』

と、云いながら、渡り合おうとして見たが、五體の自由を失つて、さながら案山子か木偶同樣、今わ何の役にも立たない。

見る〳〵中に大天狗小天狗、何れも大面の惡魔の爲めに、薙き立てられ、踏み蹂られて、目も當てられぬ大敗北となつた。すると例の日出吉わ、後陣にあつてこの體を見るより、

『こわ容易ならぬ事だぞ。さてわあの天狗共、仔細を知らずに茵を食つて、その毒氣に中てられたと見える。よしそれならば此方にも法があるぞ。』

と、罵りながら、小猿共に云いつけて、まづ野山に生え蔓こる、例のなまけ茸を片端から、ザクリ〳〵と刈り拂わせ、その刈り取つた茵の笠を、礫にかえてバラ〳〵と、群がる敵え投げかけた。

すると不思議やその笠の、中から黃色い粉が、さながら火藥の破裂した樣に、サツと頭から浴びせ掛ると、その毒氣に打たれつゝ、勝ち誇つた大面の鬼共、角を折られ、牙を挫かれ、彼所にバタリ、此所にバタリ〳〵と投げ倒されて、再び起きも上り得ない。

これに又力を得て、天狗共も立ち直れば、小猿の群わそれと共に、力を合わせ氣を揃えて、大面軍と妖仙勢とを、只の一匹も殘さんぞと、揉みに揉んで押し寄せた。

互いに叫ぶ鬨の聲わ、天に轟き、地に鳴つて、その凄ましさわ帝釋天が、魔軍征伐のその昔も、かくやと思う許りである。

その中に大面王わ、少しおくれて此場え來たが、見れば味方の惡鬼共わ、小猿の軍に攻め惱まされ、また妖仙の兵士等も、天狗共に擊ち破られて、云い甲斐無くも逃げ出す樣子に、カツと許りに腹を立て、

『おのれ猪子才な蛆虫共、いで大面の手並を見せて、猿も天狗も一ト揉に、揉み潰してくれるぞ。』

と、手勢をはげまし、直先に、目に餘る大魔劍を、風車の樣に振り立てながら、勢するどく進んで來た。

それを見ると大天狗共わ、スワよき敵ぞ逃がすなと、五六人一群になり、ワツと許りに走りよつて、右左から擊つてかゝつたが、何を云うにも先わ大面、風を起して振る劍の、煽りを喰つてわ流石の天狗も、羽根を挫かれ、鼻を捻ぢられ、ヨロリヨロリと足を浮かせて、より付く事さえ成らぬ樣子。

此時また日出吉わ、少し退つて雲の上から、勝負如何にと見て居たが、何さま大面王の魔力にわ、天狗も所詮及ばぬ樣子に、よし、今わ猶豫せぬぞと、ヒラリ體を躍らせて、雲からおりると、こわ如何に、忽ち其身わ平生の、二倍餘りの大猿となつて、大面王の前え躍り出て、

『ヤア〳〵、其所に現われた怪物わ、音に聞く大面王か？　かく云う我わ大日國の、光吉將軍の一

の大將、山王權現の御身内の、猿の日出吉と云う者なり。相手に取つて不足わあるまい。イザ尋常に勝負しろ！』

と、大太刀眞向に振りかぶつて、二つに成れと切つて掛ると、敵もさる者體をかわして、

『オ、、日出吉猿とわ汝の事か。桃太郎の供をして、鬼が島でわ手柄するとも、大面王わ汝等の、手に合う樣な者でわ無いぞ。蟹をだました惡猿の、臼に打たれた最期の程を、今こそ其身に知らせてくれん。』

と、罵りながら渡り合う。

魔王に魔力の祕法あれば、猿に神通の祕術あり。互いに負けじ劣らじと、一心不亂に闘う有樣、玉を爭う深淵の龍か、肉を取り合う荒原の獅子か、敵も味方もその凄ましさに、固唾を呑み、汗を握つて、只呆氣に取られて居る。

かゝる所に妖仙王わ、先に大面國え逃げ込み、その助太刀を頼み得て、初めて安堵をして見ると、今度わまたわが子の事が、急に案じられてならず、元より戰わ恐ろしいが、只子の愛に引かされてウカ〳〵此所まで來て見ると、大面王わ日出吉を相手に、此度を先途と勝負の最中、

妖仙王わ我を忘れて、

『オ、、其所に居るその猿たちわ、王子を奪つて逃げた奴ぢや、憎い仇ぢや、仕留めて下ださい！』

と、聲をそえると大面王より、日出吉わまづ聞きつけて、

『さてわ妖仙王も其所に居るか。居るなら云つて聞かしてやる。汝の樣な弱虫の、親に似合わぬ王子の男々しさ、末頼もしく思つた故、命わ取らず生かした儘、陣屋にしかと預かつてあるぞ。』

と、闘いながらも話して聞かせた。

すると何思つたか、妖仙王わ走りよつて、いきなり大面王に向い、

『コレ待つた！　待つて下ださい！』

と、立ち閉がる。

『エイ、邪魔な、其所退いた！　怪我するぞ〳〵。』

『イヤ怪我わしても厭わん、どうぞ待つて下ださい！』

と、臆病者に似もやらず、双の間に割つて入る。

これに流石の大面王も、劍を扣えて身を引くと、同じく日出吉も太刀を潛めて、二歩ばかり身を除けた。

妖仙王わその中央に、身を伏してまづ日出吉に向い、

『これわ〳〵日出吉殿！　思いがけない今の言葉に、我が子の無事な樣子も知れて、この樣な喜わござりません。付きましてわ妖仙王、今こそ先非を後悔致し、改めて大日國に、降參致します程に、何卒その王子奴わ、私にお返し下ださいませんか！』

と、云つてからまた大面王に向い、

『今お聞きの通り、私さえ降参致しますれば、貴君にわざ〳〵御出でを願つて、御苦労かけるにも及ばぬ事でござります。只今までの御加勢の御恩わ、一生忘れわ致しませんが、もうその劍もお納め下だすつて、日出吉殿ともお仲直りを、何卒お願い申します。』

と、云う。

その眞情にわ大面王も、強いて戰をつづけもならず、又日出吉も妖仙王さえ、降參させてしまう上わ、今度の征伐の趣意も立ち、自分の顏も立つ事と、同じく王の頼みを入れて、

『それでわ大面王!』

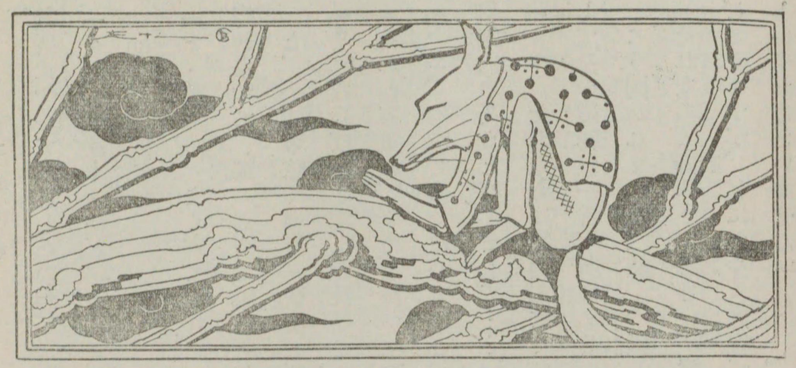
『日出吉殿!』

と、互いにニツコリ笑いながら、等しく刃を鞘に納め、改めて手を握つて、こゝに和睦をする事になつた。

此時虛空に聲あつて、

『オヽ日出吉、出來したぞ。光吉も大滿足、今わ思い殘す事なし。さらば〳〵!』

と、云う言葉に、何れも上を見あげれば、光吉わ衣冠凛々しく、光の雲に打ち乘つて、はや天國えと昇つて行く。



こがれ丸

一

むかしある山奥に、一匹の大虎が住んで居りました。軀わ只の犢牛よりも大きく、眼わ鏡の様に光つて、鬚わ針の様に鋭く、一度オウと吼えさえすれば、其聲が山中に響いて、樹に止まつて居る鳥までが、驚いて下え落ちると云う勢。獸類仲間わ誰一匹、畏れ從わぬ者も無い位でしたから、虎わます〳〵大威張、名も金眸と名乘つて、山中の大王になつてゐました。

丁度一月の初めの事でした。春と云うのわ名斗りで、昨日からの大雪に、野も山もすつかり埋まり、寒氣も一通りでありません から、流石の大虎も洞に斗り籠つて、獨りて退屈して居りますと、

其所えやつて來ましたのわ、常から氣に入りの古狐で、聽水と云う奴でした。

『イヤ大王樣！　ひどい大雪でござりますな。一寸御見舞に參りました。』

と、云いますと、

『オ、聽水か、よく來てくれた。何しろこの大雪でわ、外出をしても獲物わあるまいが、實わ少々空腹なつて、獨り困つて居た所ぢや。』

と、金眸の呟くのを、皆まで聞かず、

『それならば御心配にわ及びません。丁度好い獲物をさし上げましよう。』

『それわ有難い。何所え持つて來た？』

『ナニ、持つて參つたのでわございませんが、大王樣さえ御厭いなくば、私が好い獲物のある所え、御案內申そうと存じまして……』

『イヤ、それならば案內してくれ。ナニ、私も年こそ取つたれ、まだこれしきの寒氣にわ恐れんぞ、してその獲物わ一體何所にあるのぢや？』

こう聞かれますと、聽水狐したり顏に、

『それならば御聞き下ださい。實わその獲物と申しますのわ、此山の麓の里の、庄屋の家の飼犬でござりますが、私にわ少々意恨がございますので、若し大王樣が仇を討つて下だされば、こんな嬉しい事わございません。』

『それわ聞棄てならん。意恨と云うのわどんな事ぢや？』

『さればでござります。それわ一昨日の話でござりますが、丁度その庄屋の邸の、表を私が通りかゝりますと、納屋でしきりに鷄が鳴いて居りました。これわ幸いの獲物と存じまして、裏の垣根から忍び込み、已に其鷄を占めようと致しますと、早くもその犬めが見つけまして、いきなり私に飛んで掛ります。これわたまらんと思いながら、急いで舊の垣の穴から、外え出ようと致します間に、もう側えやつて來て、この私の大切な尻尾を、グツと咬わえて引戻そうとします。此方わ拂つて出ようと致します。……その彈みに御覽下ださい！　尖の處を咬いちぎられて、やつと命わ助かりましたが、おかげで尻尾わ半分になつて、生まれも付かない不具にされてしまいました。』

と、切られた尻尾を見せながら、さも悔しそうに話しますと、金眸大王わ氣の毒がり、

『これわなるほど酷い目に會うたな。よし、その仇わ屹度取つてやるから、さア直ぐに案內しろ！』

と、はや仕度をして出かけますので、狐も喜んでその先に立ち、腹を摺るほどの雪路を踏み分け、やがて麓まで來ましたが、聽水わ立ち止まつて、

『アレ〳〵彼所に見えまする、こんもり茂つた木立の中から、煙が立つて居りますのが、庄屋の邸でござります。然し彼所迄大王が、わざ〳〵御出張りになりましてわ、余計な人騷がせになる斗りか、肝腎の仇の犬まで、却つて取り逃がすかも知れません。それよりわ私に、よい計略がござりますに、一寸お耳を拜借致しましよう。』

と、伸び上つて金眸の耳に、何やらヒソ〳〵囁きました。

二

さてもこの庄屋の家にわ、夫婦の犬が飼われて居ました。牡わ月丸、牝わ花瀬と云いまして、二匹とも至つて忠義な犬でしたから、庄屋も大層可愛がつて居りました。

折から丁度降りつゞく大雪、雪わ犬の伯母さんと云う位ですから、二匹とも大喜びで、奥の廣庭で遊んで居りますと、急に鶏舎の方で、コケエ〳〵と騒ぎ立て、鳴聲まで聞えますから、月丸わキツと耳を立て、

『さてわ此間の野狐めが、又悪事に來おつたか。今度こそわ免さんぞ。』

と、雪を蹴立てゝ眞一文字に、鶏舎の方えと來て見ますと、案の定狐が一匹、これを見るなり慌て腐つて、表の方えと逃げ出しました。

『おのれ逃がしてなるものか。』

と、尚もはげしく追いすがつて、表の門から出ようとしますと、一聲オウと咆える聲がして、彼方の籔の小陰から、此方え向つて來る者があります。

月丸わそれを見ると、思いがけないその敵わ、自分の二倍もあろうと云う、恐ろしい大虎ですから、只の犬なら尾を巻いて、其場に萎んでしまう所ですが、元より強い犬ですから、そのまゝ虎に

喰つてかゝり、一所懸命に闘いました。

けれども元より飼犬わ、虎の敵手でわありませんにもその虎の爲めに、とう〳〵噛み倒されてしまいますと、虎わこの死骸を咬わえたまゝ、遙の山えと引あげて、後にわ白い雪の上に、さながら紅梅の散つた様な、血の痕斗りが殘りました。

此時牝の花瀬わ、夫の後から跟いて行つて、初めからの様子を見て居ましたが、元より自分わ牝犬てわあり、殊にこの二三が月前から、姙娠になつて居ましたので、一所に出て闘う事が出來ません。見す〳〵夫を虎に取られて、悲しいやら悔しいやら、まるで狂犬の様になつて、聲を限りに鳴き立てましたから、この聲を聞きつけて、主人の庄屋も家内の者も、皆此所え來て見ましたけれど、さて何うする事も出來ません。

それでも一匹殘つたのわ、せめてもの幸福だと、尚泣き騒ぐ花瀬を扶けて、その小屋え歸えしてやりましたが、花瀬わもう此時から、すつかり力を落しまして、食物もろくに食べず、只嘆きに沈んで斗り居ります。

飼主わ不憫に思つて、わざ〳〵藥などをやつて、いろ〳〵親切に介抱して居りますと、その中に月が滿ちたのか、ある日急に産氣づいて、しばらく身を悶掻く中に、可愛い子犬を産み落しましたが、普通の犬なら二三匹か、多いのわ十匹も産みますのに、この花瀬の胎からわ、只の一匹より生まれませんでした。これわ珍らしいと思いながら、よくこの子犬を見ますと、總身奇麗な茶色です

が、その肩から背の所にわ、金色の毛が混つて居る、如何にも逞ましい牡犬ですから、名もそのまゝ黄金丸とつけて、大切に育てる事にしました。

けれども母犬の花瀬わ、只さえ弱つて居る所え、又産をしましたので、急にまた容體が悪くなりました。

すると、同じ庄屋の家に、牡丹と云う牝牛が居ましてりましたから、こう云う時にわ側え來て、親切に世話をしてくれますから、花瀬わ牡丹にむかいまして、

『御覽の通りの私ですから、とても今度わ助かりませんと、覺悟わ極めて居りますが、それについて牡丹の姐さん、貴女に頼んでおき度い事があるのです。』

と、云いますと、

『何な事か知れないが、出來る丈の事わしてあげるから、遠慮無く云つておくれ！』

と、さも頼もしい言葉です。花瀬わ苦しい息を次ぎながら、

『姐さんも知つてる通り、私の夫の月丸わ、聽水狐に誑されて、虎の餌食になつたのですが、其時私わ見て居ながら、これを助ける事もしませず、又一所にも死なゝかつたのわ、義を知る獸の面汚し、何たる腑甲斐無い犬だろうと、定めし蔑んでお居でゞしようが、實わ私わあの時分、もう只の體でわなく、お胎の中にわ月丸の、胤を宿して居たからで。なまじその時跳り出せば、この大切の子犬まで、闇から闇え犬死させる、それが不憫でならないからです。殊に大切な其胤を、親と一所に絕やしてしまつてわ、誰が後で仇を討つて、恨を晴らしてくれようかと、それを思つたばつかりに、悔しい胸を無理に抑えて、おめ〳〵生き殘つて居たのです。そのせつない心の中わ、何卒よろしく察して下ださい。……けれども今わその子犬も、無事に生まれた事ですから、今わ思いおく事もありません。一時も速く私わ死んで、夫の側え參りますが、その代りにわ後に殘つたあの黄金丸を、何卒貴女の御側に置いて、育てゝやつてわ下ださいませんか。なまじ病み疲れた犬の乳より、強い牛さんのお乳で育つたら、それこそ世間並の犬でわない、天晴見事な强犬になつて、見事虎と も勝負が出來、親の仇が討てましよう。……頼みと云うのわこの事です。何卒よろしくお願いたします。』

と、心を籠めて云いますので、牡丹わしきりにうなづきながら、

『その事ならば心配なさるな。どうせ有りあまる乳ですもの、この可愛い嬰兒さんわ、きつと私が引請けて、十分育てゝあげますから……』

『それを聞いて安心しました。でわもうこれでお別れです。』

と、俄かに心のゆるむ樣子に、

『そんならせめて今一ト目……』

と、牡丹わ黄金丸を抱きあげて、花瀬の側え寄せますと、花瀬わもう目が見えませんが、我兒を

胸に抱きしめて、頭から口の邊まで、重い舌で甜めまわしながら、そのまゝ息わ絶えてしまいました。

三

可哀さうに花瀬わ、夫月丸の後を追うて、おなじく死んでしまいましたが、後に残された黄金丸わ、漸く目の明いた斗りで、そのまゝ牡丹の所え引取られ、他の牛の子供等と一所に、牛の乳で育つ事になりました。只さえ月丸の一粒胤、それが牛の乳で育つたのですから、その成長の目に立つて、めき〳〵大きくなりました。

殊に牡丹の夫文角と云うのも、俠氣のある牛でしたから、花瀬の頼みを堅く守つて、黄金丸の養育も、我子の様に心をつけ、他の牛の子の仲間に入れて、角力を取らせたり、競走をさせたり、切りに身體を鍛えさせますと、黄金丸わそのお庇で、まだ齢こそ幼いさけれ、他の年長の大犬と咬合つても、決して負を取らない位になりました。

そこで文角も、もう好い時分と思いましたから、ある日黄金丸を膝近く呼びよせ、さて最初からの事を、残らず話して聞かせますと、黄金丸わ驚きまして、

『それでわ貴君わ眞の阿父さんでわなくて、眞の私の阿父さんわ、悪い狐に誑されて、虎の餌食になつてしまつたんですか。そう聞いてわもう我慢わ出來ません。直ぐに行つてその虎を、喰い殺してやらなければなりません。』

と、悔しそうに立ちかけますから、文角わまたこれを止めて、

『そう思うのわ道理だが、まあ落着いて聞くが可い。一體お前の親の仇わ、金眸と云う虎にわ相違無いが、それも聽水と云う古狐が、自分の悪事を棚にあげて、手引をしたから起つた事だ。それをあまり早まつて、虎に斗り目をつけてわ、ひよつと勝負に負けた時、肝腎の古狐を逃がしてしまおう、ことに金眸わ名代の大虎、もつと此方の牙を磨き、爪を鍛えた上でなければ、容易に名乗りかける事わ出來まい。それよりわ機會を見て、まづ聽水めを討ち取り、その上改めて金眸の、隙を狙つて攻めかけるが可い。』

と、丁寧に教えてくれますので、黄金丸も漸く解り、

『それでわ然う云う事に致しましよう。けれどもこう解つた上わ、此まゝ此所に居りますのわ、何分にも、氣が濟みませんから、いつそこれから暫時の間、お暇をもらつて野良犬になり、諸國をまわつて種々〳〵な獣と、咬合蹴合の修行をして、十分體を鍛えた上、あの金眸に名乗りかけて、天晴れ仇を討ち度うございます。今まで御養育下だされましたその御恩も返しません中に、こんな勝手な事を申して、まことに申譯ございませんが、これも親の爲めでございますから、何卒お免し下ださいませ！』

と、思い込んで頼みますと、文角わニツコリ笑つて、

『オ、よく云つた。それでこそ月丸さんの子だ。實わお前が云わなければ、強いても勸めようと思つた所だ。何の遠慮が入るものか。今からでも直ぐに立つて、その修行をして來るがよい。』

と、快く許してくれましたから、黄金丸わ勇み立つて、善わ急げと直ぐに支度をし、

『見事親の仇を討つて、金眸の首を取らなければ、二度とお邸えわ歸りません。』

と、健氣にも言葉を盟い、養親の文角と牡丹に、懇ろに別をつげ、その日から邸を出て、わざと宿なしの野良犬となりました。

四

さて黄金丸わ、折角可愛がられて飼われて居た、庄屋の家を出てしまいますと、その日からもう頸輪の無い、宿無し犬の事ですから、食べるにも自分で餌を漁り、寢るにも自分で塒を探さなければなりません。ですから看屋の荷の前をうろついて、天秤棒で追い立てられたり、肉屋の車の後をつけて、小僧に石を投付けられたり、又ある時わ犬殺師に狙われて、あぶなく命を取られようとしたり、それこそ一ト通りの苦勞でわありません。

こうして幾日かおくる中に、ある日大きな野原え出ましたが、いくら行つても里え出ず、その中日も暮れかゝつて來ますのに、宿を取る木蔭もありません。

殊にその日わ、朝からろくに水も飲まず、食物とても見つかりませんので、その空腹さも一ト通

てありませんから、仕方が無しに草の上に平太ばり、しばらく息を入れて居りますと、今度わ何だか寒氣がして來て、なんとも云われない苦痛を覺えました。

『さてわいよ〳〵こんな所で、俺わ野たれ死をしてしまうのか。此間文角さんに別れて、所々方々と廻る中、随分いろ〳〵な獸にあつても、ついに一度負けた事わないが、この空腹と云う敵にわ、流石の俺も齒が立たない。アゝ、情無い、俺の體わ、このまゝこの野原に腐つて、仇の狐にさえ會わん中に、鴉の餌食にされてしまうのか。エゝ、殘念な事だなア。』

と、身をふるわして泣いて居ました。

すると、何所から來ましたか、一團の燐火の光が、パツと目に映りましたから、思わず頭をあげて見ますと、これが又フワリ〳〵と、或わ高く、或わ低く、宙を舞つて居る樣子が、何だか自分を招く樣にも思われます。

黄金丸わ心の中に、

『さてわ死んだ阿父さんが、私を助けに來てくれたのか。』

と、思うと急に力が出まして、その燐父を拜みながら、側え〳〵と寄つてゆきます中に、いつか四五町來てしまいました。

此時忽ち耳近く、ズドウンと恐ろしい銃音がしましたら、その途端に燐火わ消えて、見ると自分わ何時の間にか、大きな古寺の門の所に居ります。

さてわ今夜わこの中で、一夜の宿を借りろと云うお託かと、黄金丸わ門を入つて、中の様子を見まわしますと、正面にわ大きな本堂がありますが、それもゝう壁わ落ち、軒わ傾き、柱わ朽ち、縁わ腐つて、見る影も無い廃寺ですが、その前の石疊の上に、一羽の雉子が仰向になつて、バタ〳〵苦しんで居りますから、こりや好い物が見付かつたと、走りよつてグッと抑え、已に口をつけようとしますと、後の方から大聲で、

『コリヤ盗賊犬め！』

と、吠える者があります。

何者かとふり向きますと、それわ眞白な獵犬でしたが、此方を見ると牙を剝いて、今にも飛びかゝろうとして居ります。黄金丸も身構えて、

『盗賊犬とわ失敬な！』

と、云いますと、

『失敬とわ貴様の事だ。おれの旦那が擊つた雉子を、斷りも無く食おうとするから、盗賊犬と云つたが何うした。』

『それでわ先刻の銃音わ、この雉子を擊つた音か。』

『今となつてとぼけるな。見れば首に頸輪も無い、いけ圖々しい野良犬め！　貴様の様な奴が居るからこそ、犬殺師が世間に殖えて、俺達までが迷惑するのだ。』

『云わせておけば無禮な吠言。重ねてぬかすと勘辨せんぞ。』

『そりや此方から云う事だ。生意氣云つて怪我をするより、その鳥渡してはやく逃げろ。尾を捲く奴わ免してやるワ。』

『何を小癪な、ウウワン〳〵！』

『ワン〳〵〳〵！』

と、云う中に、二匹わ双方から飛びかゝつて、上を下えと咬み合いましたが、何方も劣らぬ強犬ですから、互いに挑み闘う彈みに、風を起し、砂を蹴立てゝ、その勢の凄ましさ、まるで獅子の狂う様です。

所が丁度此前から、彼方の木の陰に身を潜ませて、様子を見て居た奴があります。それわ眞黒な野良猫でしたが、今しもこの二匹の犬が、肝腎の獲物を其方退けにして、夢中になつて咬み合つて居ますので、こいつわ占めたと思ひながら、ぬき足さし足忍びより、石疊の上に置いてあつた、雉子の死骸をくわえるより速く、まるで兎の脫げる様に、彼方の塀えとかけ登りました。

それを見た此方の二匹わ、

『おのれツ！』

と、聲をかけましたが、先方わ高い所ですから、果わ互いに顔見合わせ、今迄咬み合つて居たその口を、アングリ明けたまゝ呆れて居ります。

五

あゝ馬鹿な事をした。私等二匹が喧嘩さえしなければ、あんな野良猫に馬鹿にされて、おめ〳〵獲物わ盗られわしまいにと、思ふと黄金丸も獵犬も、今わ咬み合う張合もぬけて、そのまゝ牙を納めましたが、それにしても先刻からの喧嘩で、よく〳〵、強い黄金丸の働きに、つく〳〵感心した獵犬わ、改めて言葉も丁寧に、

『一體お前さんわ何所から來なすつた。何と云う犬さんなのだ。私も今まで種々な犬と、隨分咬合わして見たが、まだお前さんの樣な強い犬に、一度も出くわした事が無い。』

と、云ひ出しますと、黄金丸も同じく感心して、

『イヤ、そう云う君こそ今迄に、曾て經驗の無い強い犬だと、實わ先刻から驚いて居た位だ。何を隱そう、僕わ名を黄金丸と云つて、元わあるお邸に奉公し、御門の番をつとめた者だが、少し心願があつて暇を貰い、わざと野良犬になつて居るのだ。』

と、はじめて名乘りますと、獵犬もうなづいて、

『なるほど聞けば然うありそうな事だ。私わまた御覽の通り、獵師に使われる獵犬だが、ある時大鷲を生捕にしてから、鷲を取つた白犬と云うので、名を鷲郎と呼ばれて居る。自分で云つちやあ可笑いが、これでも獵犬仲間にわ、誰も敵手になる者もない、一番強い犬のつもりだつたが、今日と云う今日お前さんに會つて、何だか天狗の鼻を折られた樣だ。どうかこれを緣にして、此から仲好くしてくれ給え。』

『それわ僕の方から云う事です。』

『それにつけても今の話の、お前さんの心願と云うのわ、一體何樣な事なのです?』

と、鷲郎が尋ねるので、黄金丸わ四邊を見まわし、

『それでわ話すから聞いてくれたまえ!』

と、これから父の殺された事、牛に引取られて育つた事、はてわ金眸の大虎と、聽水狐とを仇と狙つて、こうして諸國を修行して居る事を、委しく話して聞かせますと、鷲郎わいよ〳〵感じ入つて、

『聞けば聞くほど偉い犬さんだ。それなら私も及ばずながら、お前さんの兄弟分になつて、力を添える事にしよう。あの金眸にわ恨わないが、彼奴わ自分の力を恃んで、餘の獸類を勝手に苦しめ、それ斗りか時々わ、人間の居る里えも來て、善くない事をする奴と、常から憎んで居た所だ。お前さんが親の仇と云うなら、私にわ仲間の敵だ。是非共一所に退治てやろう。』

と、さも賴もしく云いますので、黄金丸も喜びまして、

『君までがそう云つてくれるとわ、何と云う嬉しい事だろう。アゝ、これこそ亡父さんの引合せ、先刻の燐火の案內したのも、全く君を知らせてくれたのだ。』